

# 狛江市に存在した中小河川・用水・清水の調査

—— 狛江三小地域を中心として昔の生活や発展を

中学年・高学年の社会科教材として活用する研究 ——

1 9 8 6 年

野 村 義 子

狛江市立狛江第三小学校教諭

# 目 次

I. はじめに .....	1
II. 地名の語源 .....	5
III. 地図・用水・六郷用水 .....	9
(1) 人 口 .....	23
(2) 江戸時代の狛江の村々 .....	26
(3) 江戸時代の用水の開発 .....	27
(4) 河川改修と氾濫 .....	34
(5) 新田開発 .....	38
(6) 近代の六郷用水 .....	39
(7) 経済的基盤（明治以降の農業） .....	40
(8) 六郷用水の埋立てと他の用水 .....	50
IV. 用水と共に変化していったこと（子供との学習をおりませながら）.....	53
(1) 水とのかかわり .....	53
(2) 養 蚕 .....	59
(3) 信 仰 .....	67
(4) 伝統行事（年中行事） .....	72
(5) どんぐりだんご .....	83
(6) 狛江前史・化石堀り .....	85
(7) 竪穴住居造り .....	92
(8) 子供達の遊びについて .....	108
(9) 布芝居 .....	112
(10) 石器作り .....	131
(11) 多摩川を歩く .....	134
V. 狛江郷土かるた .....	141
VI. あとがき .....	173
参考文献 .....	174

I. は じ め に



(用水路跡)

# I. はじめに

宅地化による地域の変化が激しく、児童の生活している場所の過去の様子がどうであったかということが年々わかりにくくなっています。

ここ狛江は、かつて六郷用水の取り入れ口があり、江戸幕府の米や野菜の身近な供給源として、又、東京府にとっても同様だったろうし、つい最近まで都民にとっても同じことが言えた地であったでしょう。

そこで、今は埋め立てられた下水道や遊歩道として名残りを止めている用水や小河川、清水が何の目的のために作られ、どのように利用されていたかを調べることによって、昔の人達の生活様式を学び、今、その用水や河川がどう変化した、それに対応して生活様式や社会の様子も変化してきていることに気づかせ、どうしてそういう変化が起きたのかを考えていく中で、地域に親しみ、住んできた何万年かの人々との連帯を身近かに感じ、今後生き続けるだろう我々の子孫への愛を深めるような教材を作る工夫をし、授業をより豊かなものにしたいと願い始めました。

まず江戸時代・明治・大正・昭和初め・最近の地図を手に入れ、用水を塗り分けてみました。その後、地図を手を歩いて確かめ、不確かな箇所を古くからの住民の方に教えていただきました。同時に参考文献を捜し読み進めていきました。授業の中でも、取り入れるように努力しました。

年中行事などは知識不足で話を引き出せない面もありましたが、児童へどこに質問しにいけばよいか体験者として助言できました。

私達の計画では、当初、郷土のカルタ作りを計画しておりましたが、堅穴住居や布芝居へと児童の興味のある所に焦点を合わせていきました。体験学習をする中で幾許かの地域への愛が持てたかは定かではありませんが、これらの学習を通して、いくぶんでも、古いものと新しいものを調和させて生きていけるようになってもらえたらと期待しつついたしました。

## Ⅱ. 地名の語源

## Ⅱ. 地名の語源

まず用水調べのために地図を捜しました。地図が見つかるまでの間、地名の語源を調べました。角川小辞典・鏡味明克、完二の地名の語源をみました。

### 狛江

コマ 高麗の婦化人(高麗・巨摩・狛)

エ 江

### 猪方

イノ 水路のある野・砂礫地・小さい(井野・飯野・印野・伊野・猪ノ尾)

カタ 領土・潟湖・方角・片側・山頂近くの平坦地

(地頭方・緒方・小県・大県・静岡・諏訪形・山形・野方・片山・槍の肩)

### 和泉

イズミ泉 <sup>いずみ</sup> 出水

### 岩戸

イワ 岩・山

ト 湖沼・場所・狭い所 (上沼・折戸・瀬戸)

ド 川の合流点・水門 (寄合渡・沢ノ渡)

### 駒井

コマ 駒・馬

イ 井

三小に関係のある現在用いられている地名だけを上のように調べてみても、江・猪・和泉・戸・井と  
いうように、水に関係の深い地名であることがわかるのです。

狛江町だった頃の地図をみますと、猪方・和泉・岩戸・駒井は大字としてあり、その下に次に記すよ  
うな地名がみられます。

猪 方	和 泉	岩 戸	駒 井
猪方上野・大河原	稲 荷 前・西南河原・和泉北野・西河原	三 島・宿屋敷	上 中 村
中 村・前 原	泉 境・玉泉寺前・扒 山・北河原	堀 上・松 場	下 中 村
久 保・中河原	富 士 塚・南河原・小 原・田 中	駄 倉・古屋敷	本 村
前原下・水神下	北久保・駄 倉・松原西・寺 前	相之原・稲荷森	南河原
天神森・道 下	松原東・丸 山・茶 畑・和泉原	平戸川	供 養 塚
緒方原	宮 前・野 川・宮 附・内北谷		
	橋 場・北 谷		

これらの地名を調べていくのも興味深いと思われます。私たちも天神森はどのあたりで天神様があったから名付けられたのだろうかとか尋ねてみましたが、わかりませんでした。稲荷森についても、稲荷というのは江戸時代ぐらいからだろうと見当はつけましたが、どこに稲荷があったのやらわからずじまいでした。

筑波大学の社会科指導法を担当しておられる横山先生に  $\frac{1}{10000}$ 、 $\frac{1}{25000}$  の地図を持ってきて地形図、土地利用図を用意して、和泉に関する地名を捜させる。地図をみさせて考えさせる。地名の中に水に関するもの含まれているものを拾わせる。という教材構成があるのではないかと助言をいただきました。

今後、授業をする機会に導入部分にやってみたいと思っています。

ここに添付するのは、5年生に、国語の単元で「聞いたり、読んだりして調べたことを書こう。」というのがあり、その時に調べて書いたものであります。

#### < 狛江資料集 >

柏木 祥文

狛江に泉という地名が多いのは、泉龍寺の前の池からわき水が豊富に出ていたから、地名になったということです。正しくは和泉と書きます。

#### < 石井 千城さんの話 >

鈴木 博仁

岩戸は、もと一つだったけど、ぼくたちが生まれた年ぐらいに、南と北に分けたそうです。この土地は、狭いし、土が悪くて草もろくに生えなかったほどで、肥料をたくさんやらないと駒井と同じものはできなかつたそうです。

小足立、覚東という地名があったけど、今は東野川、西野川という名にかわってしまいました。ここは、岩戸よりもっと土が悪かつたということです。

和泉も、もと一つだったけど最近、和泉本町、中和泉、東和泉、元和泉になったそうです。

駒井は宿ヶ原を入れて大きな駒井だったそうです。駒井とか、和泉とか、猪方という多摩川べりの方は田んぼが多く、また駒井や猪方の方は下がじゃりだつたり砂だつたりしたから、はだしになつてもあまり土が足につかなかつたといひます。

小足立、覚東の方はこれと反対で、なかなか足の土が落ちなかつたし田んぼは、深田で胸までつかつて働いたそうです。

### Ⅲ. 地図・用水・六郷用水



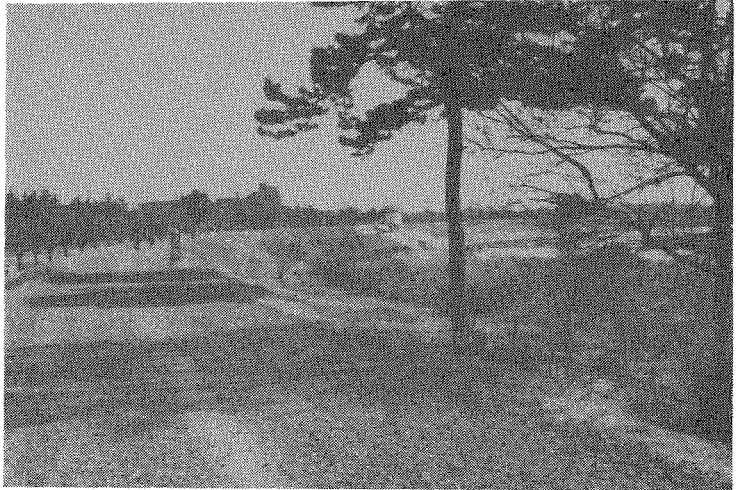
(六郷用水取り入れ口附近)



### Ⅲ. 地図・用水・六郷用水

「六郷用水はあのあたりから取り入れられ、福社会館前のバス通りを流れて第一小学校の脇を通って一の橋の方へ流れていた。今の世田谷通りは六郷用水の跡だ。」

と言われても、福社会館前より後ろの道の方が下にあるのにどうして上の方に流れていたのか、今の世田谷通りの広さなんだろうかと、疑問が次々とあって納得できませんでした。多摩川の水の高さを今のものを頭の中に入れて考えるので当時とは異なり想像しにくかったのです。なによりも六郷用水があった頃の地図を見つけてじっくり見て確かめたいということになりました。



(六郷用水の取り入れ口)

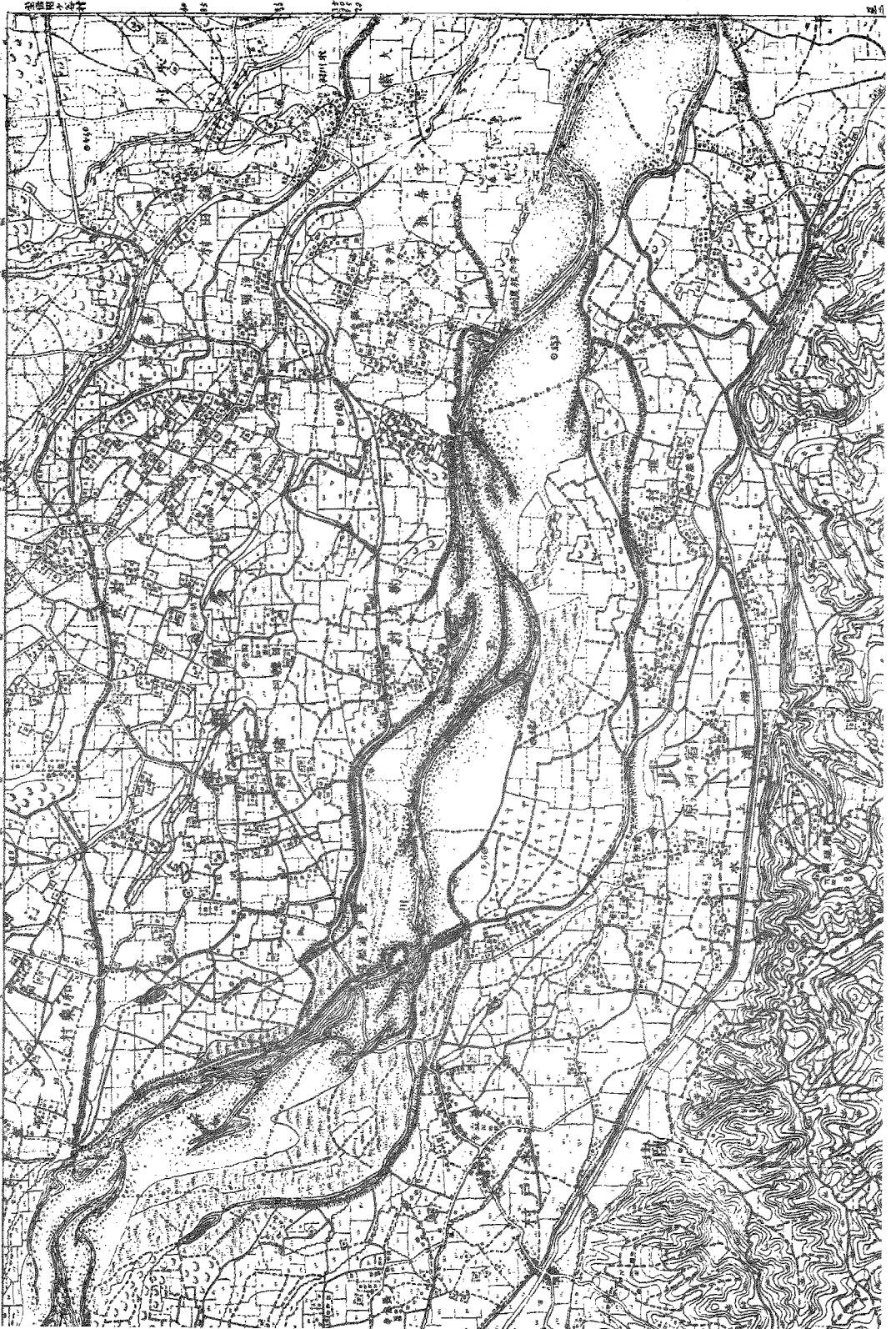
昭和58年11月1日、大日本測量株式会社で明治14年測量の登戸村の地図を見付け出しました。(資料1)です。六郷用水の取り入れ口から大蔵村へ向かっての流れの様子が迎れます。岩戸村、猪方村、駒井村、和泉村に僅かに家があり、田や畑が大部分であったこともわかります。

その前に、明治33年の分(資料2)と、小田急線の開通後(資料3)の地図を市役所で捜してコピーしてありました。

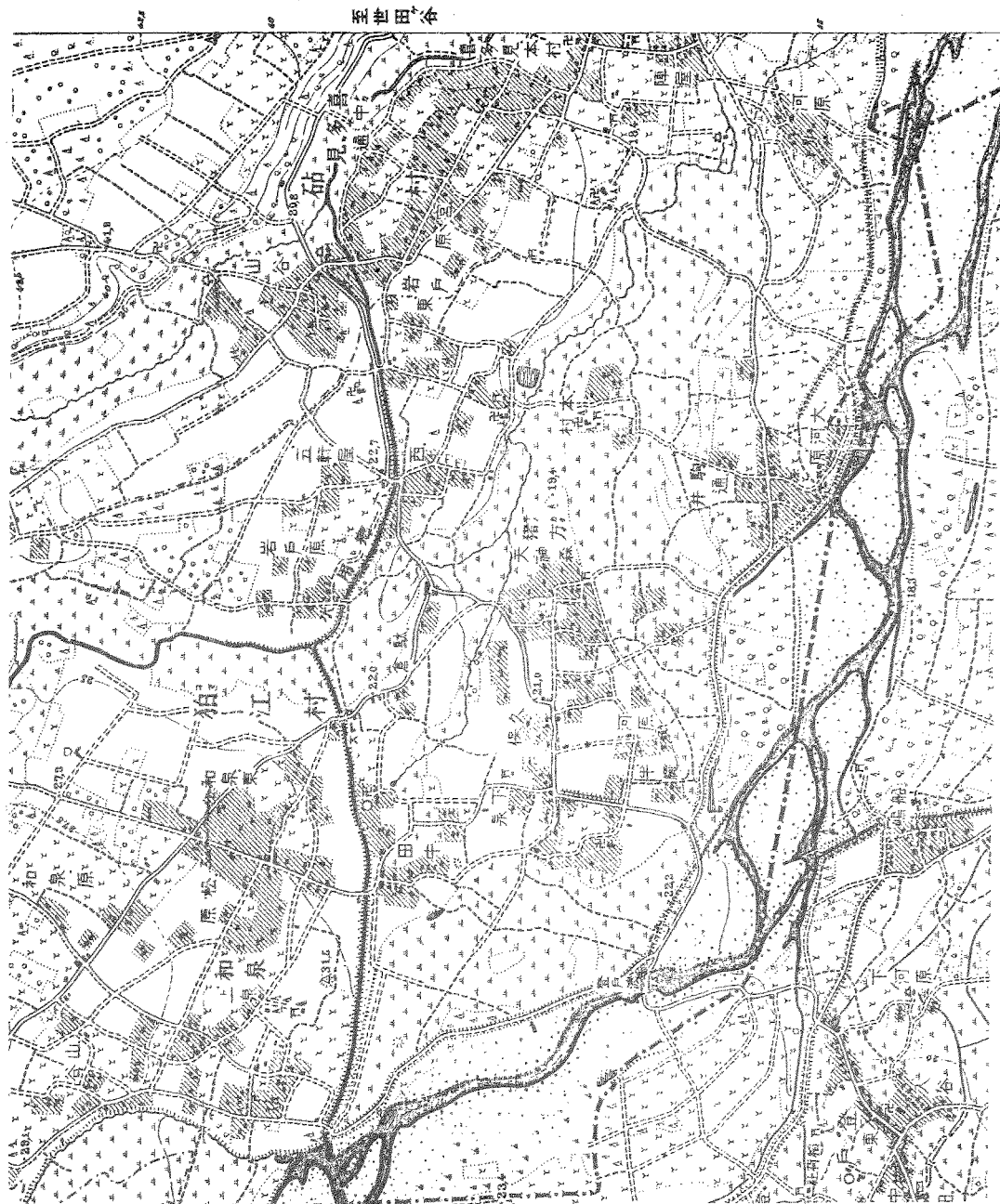


(世田谷通り、左手が六郷用水の跡)

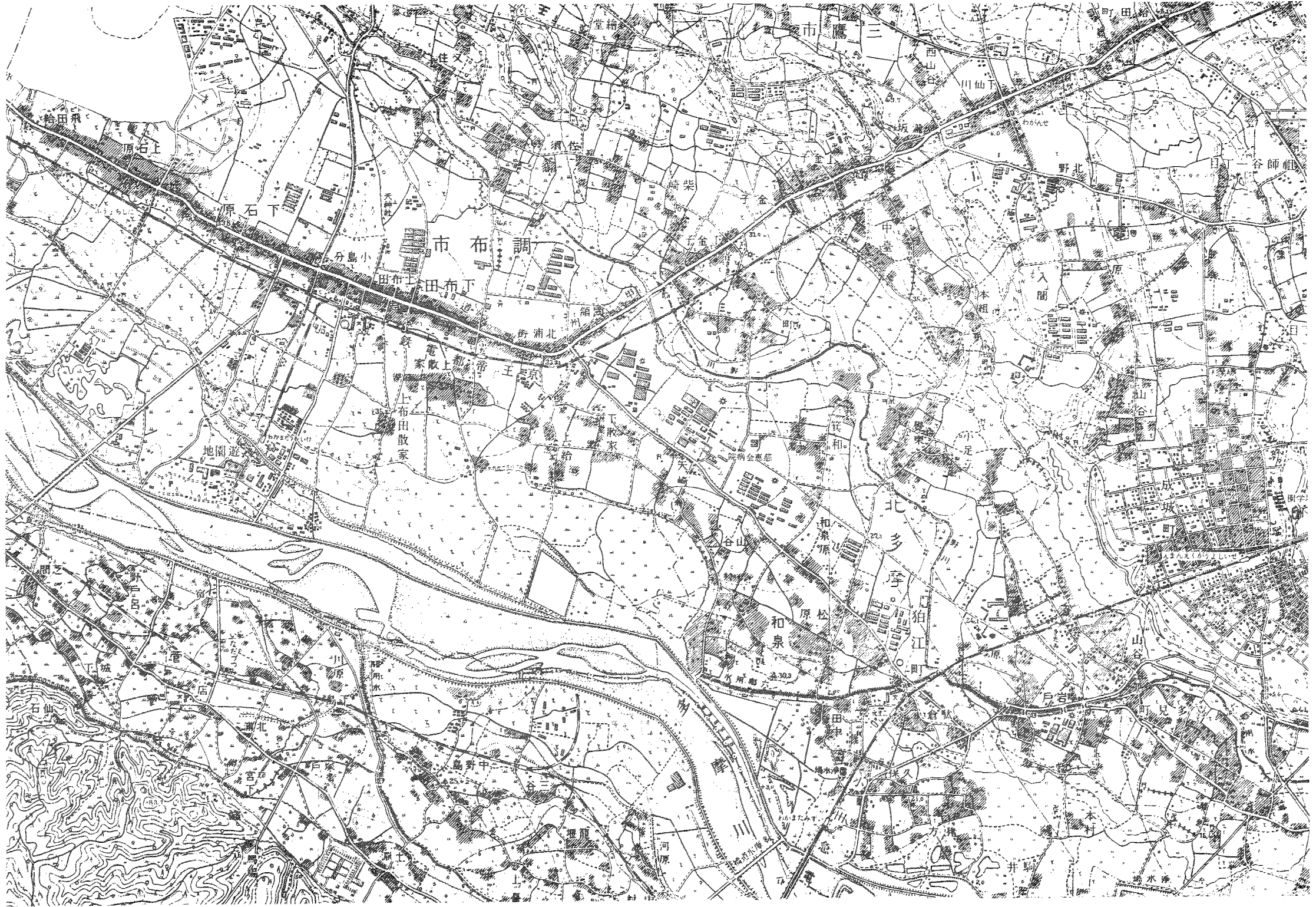
(資料 1)



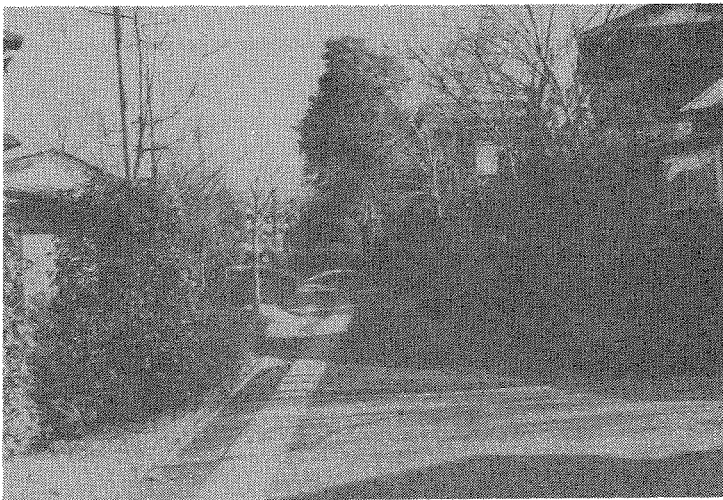
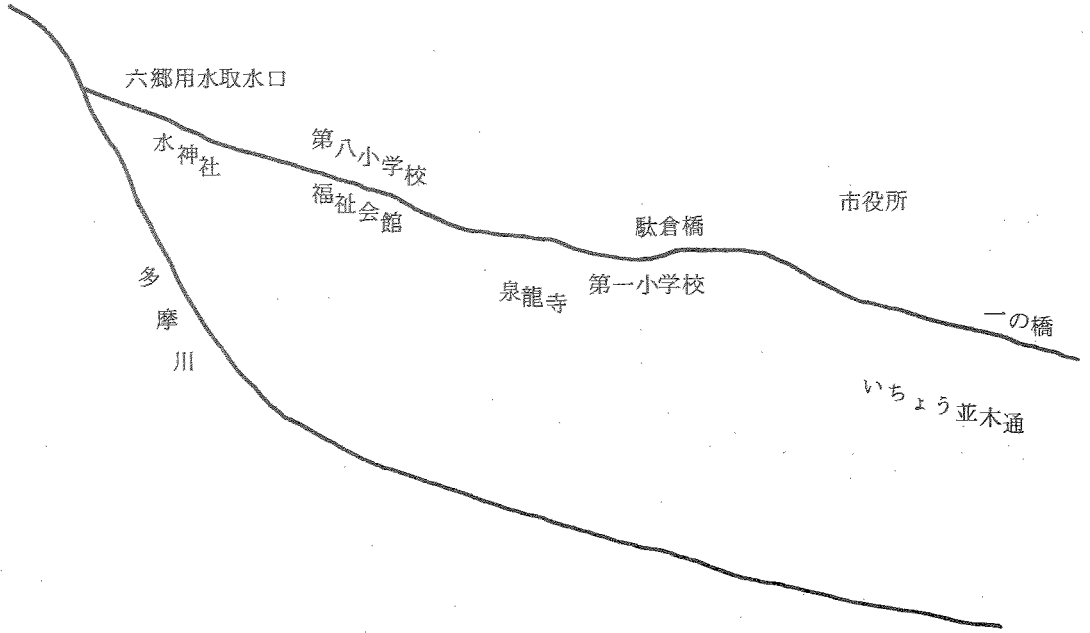
(資料2) 明治33年(明治24年大日本帝国陸地測量部)



(資料3) 小田急線開通後(昭和34年資料修正 国土地理院)



これらを見ていくと、確かに冒頭で述べたように福祉会館の前を通過して一の橋に六郷用水は出るようです。



(世田谷通りから六郷用水跡の公園を写す。)

宝暦7年(1757年)生れの植田孟縉の武蔵名勝図会の中の世田ヶ谷領和泉村の項に六郷用水が次のように記されています。

当所和泉村にて玉川を引き入れて、それより世田ヶ谷領の村々を経て、所々より田用水も落ち入りて、末は川の如し。当所にては水幅三間許。郡界荏原郡の瀬田村へ流れ入り、御入国後の御代官小泉治大夫という人堀り割りて、水道を通じて、多磨郡、荏原郡十三ヶ村の田用水となれり。土人はその徳を称して一名を治大夫堀と唱う。

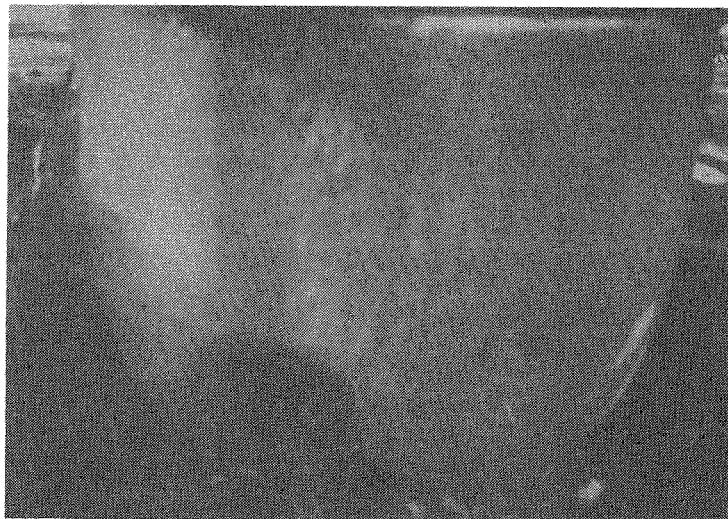


(世田谷通六郷用水跡に)  
今もある水門

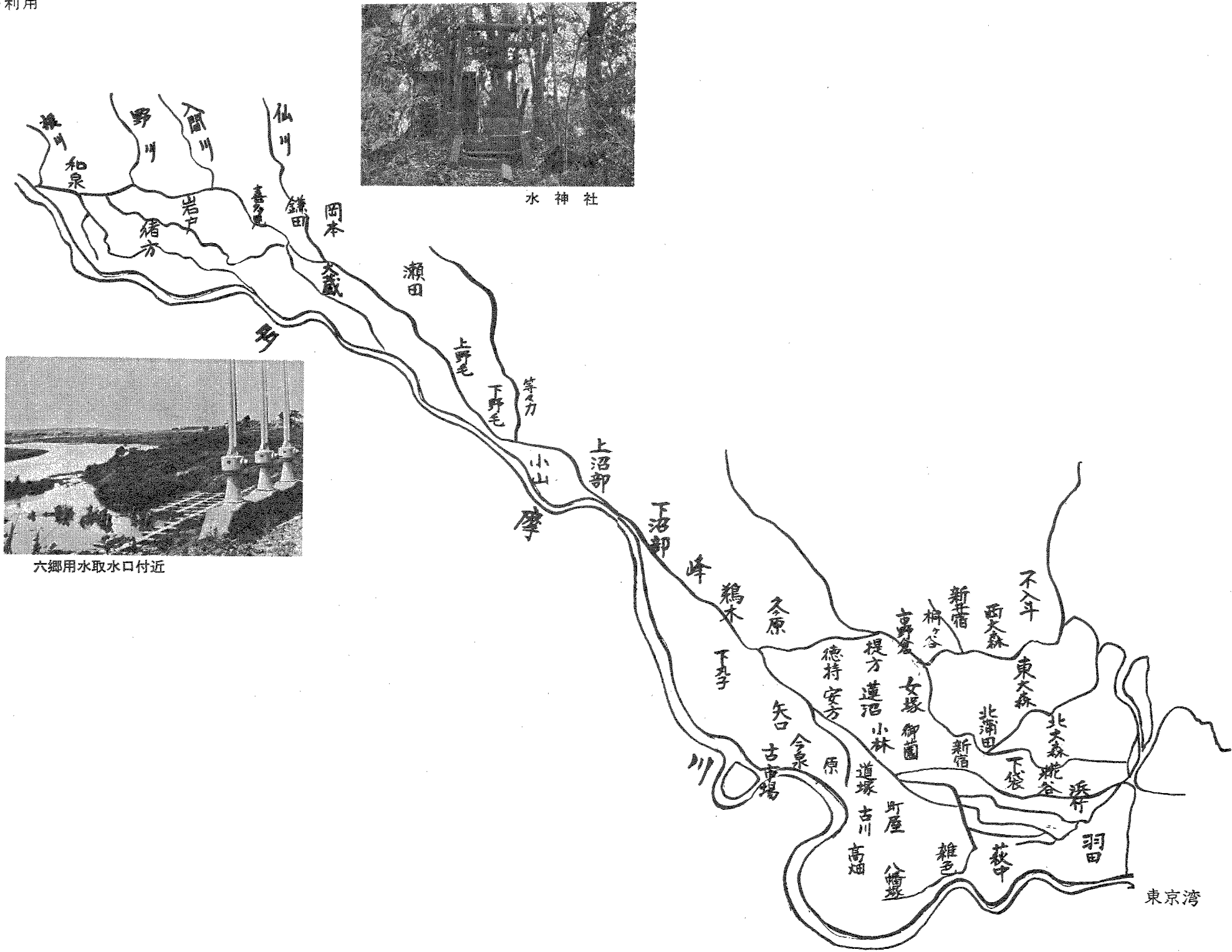
狛江市教育委員会発行の『のびゆく狛江』の新田開発の項の六郷用水(資料4)をみても、六郷用水は六郷の人達のみで使われなかったようですが、狛江三小の周囲にある用水とどこで繋がるのか、今まで捜した地図では不明だったのです。狛江第三小学校の社会科資料の中に昭和30年10月測量の地図を見つけ出したのですが、この $\frac{1}{3000}$ の地図は惜しいことに一部分しかなかったのです。たずね求めるうちに石井千城さんをお訪ねしたおりに、この地図を作られたのが石井さんであり、全部を持っておられ、今も資料の整理に使われていることを知りました。二度ほどお訪ねし、全部をお借りしてコピーすることができました。(資料5)

浦田宅

六郷用水で使われてい  
た水車の臼

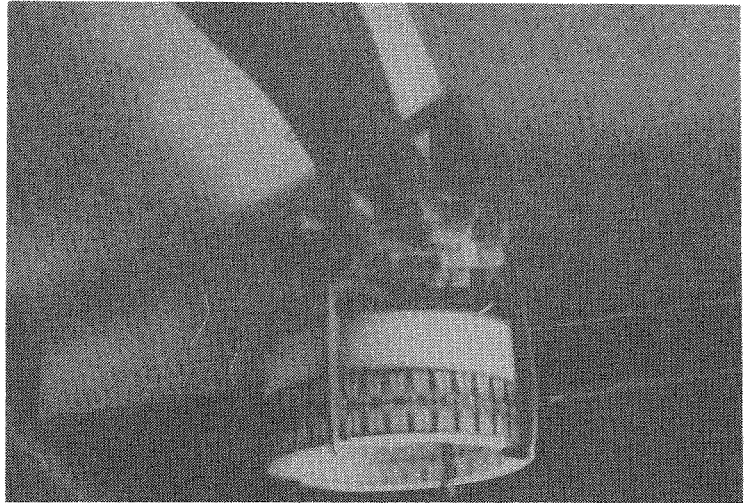


(資料4) 六郷用水の利用



これを色分けしていく中で、地図上用水が浮かんできました。六郷用水との繋がりととは別に泉龍寺の泉からの用水もあるということも発見したのです。それらの用水がどうも昭和30年にはもう失なわれつつあったらしいです。

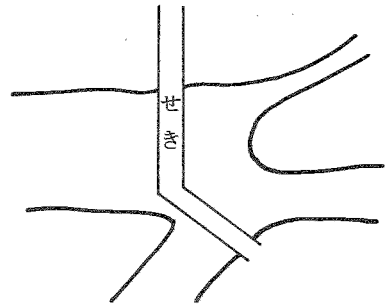
(水車に使用されていた歯車)



#### 和泉の石井千城さんのお話

六郷用水は慶長2年(今から350年前)に16年がかりで出来た。四つ川を堀り、その内の三つが川崎側であった。面積は六郷用水だけで千五百町歩あり小泉次太夫が指揮をした。

今、どこが取り入れ口かはっきりわからなくなっているが、今の排水溝のあたりぐらいから広くあったであろう。砂利を15尺(約5m)堀ってしまい、川底が低くなってしまったので、わかりにくくなったのである。



昭和26・7年頃までは、3尺ぐらいの関で入っていたのが、1m堀る約束が4m堀るという具合で、内務省からまかされた見張り番も置かれたのだが、この人達も仲間で、倉が建った人もあるほど儲けた。昭和10年から禁止されるまでこの状態が続いた。この他にも、田んぼの2尺ぐらいの土を堀ると砂利をとるということで、他の田の水が抜けてしまうので、又、田を売るということになってしまった。

六郷用水は、今の高さより2m下を80cm位の深さで流れ、巾は二間半位あった。

今では森林が少なくなったこと、雷がならなくなったこと等で雨量も減っただけけれども——調布の飛行場ができて、今までは中村重右門さんという大金持ちの人の雑木林だったため、雨が落ち葉にすわれていたのが、道路に流れ出し、野川が氾濫するので野川を今のように太くした。戦後も2・3回氾濫した。

今でも、民家園の前のあたりに六郷用水の川の跡があり、一定数量以上の水量がくるとその水は、野川に捨ててしまうようにできていた。

女堀というのは、宇ノ木のあたりが、岩盤が固くて、なかなか堀れないので、費用がかかりすぎるので、女の人にも頼むことを考えついたところからだ。



関の所は、夏に流れてしまうので、1月～4月半ばぐらいまでにしていた。費用は六郷用水水利組合で出していた。だんだん六郷の方に、工場が増えて水はいらないとなって、関を作ることもなくなっていった。



(1) 人口

狛江市史（昭和60年発行）によって江戸時代から最近までの人口を書き出してみました。

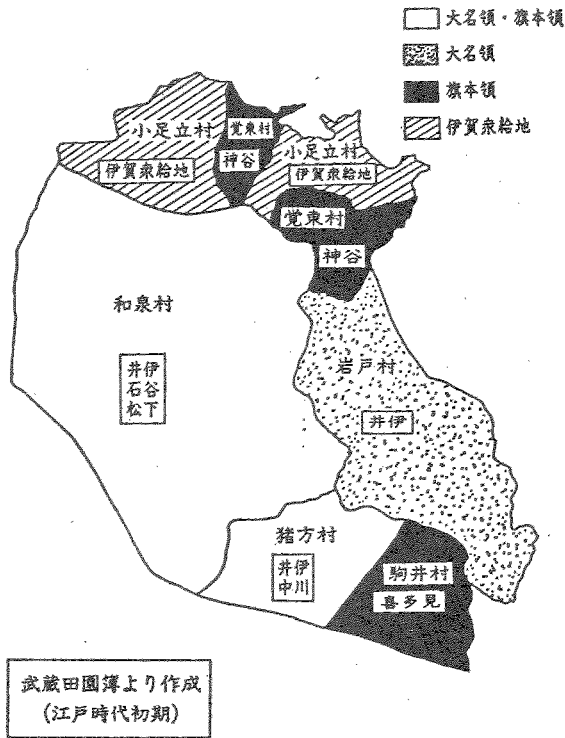
（資料7・資料8）

（資料7-1）

	和泉村	猪方村	駒井村	岩戸村	覚東村	小足立村
寛永16年	井伊領 164人	173人	30戸数	246人		12戸数
元禄7年						
文政2年						
文政11年	199人					
天保13年	167人	204人		260人		
慶応2年	195人	233人		264人		
明治4年					30戸数 183人	
	石谷領 松下領 井伊領	井伊領 中川領	喜多見領 断絶後は 幕府領	井伊領	神谷源太郎 のち 幕府領	伊賀者の 給地

国勢調査はなかったので、今、残されている資料からは、上記のように所々抜けてしまいます。

（資料7-2）



江戸時代初期狛江村支配の状況（武威田園簿より）

のびゆく狛江より

明治22年市制・町村制が施行され、和泉村・猪方・駒井・岩戸・覚東・小足立の六ヶ村が、4月1日に合併し狛江村となった。

(資料8)

	世帯数	人数
明治22年		2,207
明治33年	336	2,501
大正元年	419	2,908
大正14年	452	2,854
大正12年	792	4,407
昭和20年	1,833	9,757
昭和30年	3,113	13,496
昭和40年	11,768	34,916
昭和50年	23,104	67,565
昭和60年	27,237	70,744

狛江市史には、次のように書かれています。

都会で家を焼かれた人たちや、戦火を避け地方に疎開していた人々の転入が続き、昭和31年首都圏整備法によって近郊地帯に指定されたのを、農地の宅地への転用や売買も思うようにできなく… というようなことで反対運動が起りグリーンベルトになることは避けられたが、人口増加傾向は一層強まり、昭和33年から昭和44年にかけて、対前年度人口増加率が10%を越えた。

昭和58年度狛江三小の3年2組で調べた結果は(資料9)のようになり、昭和19年以前は、江戸時代から住んでいたといってもよく、急激な人口の増加は、昭和30年を境にしていると言ってよいでしょう。

五年生の子供達の調査より

<石井 干城>さんより

伊藤 敬子

明治・大正の頃は 4,000人、  
昭和20年、戦争が終わった年は 8,000人、  
10,000人という年があったそうです。

<石井 干城>さんより

鈴木 博仁

昭和27・28年頃に10,000人を越え、  
昭和30年から急にふえはじめて、昭和40年には45,000人になった。  
さらに少しずつ増え続けて今は70,000人を越えている。  
農業をやる人は年々へってきた。今、農業をやっている人は、岩戸では3~4人しかいなくなった。その人は一の橋の小川さん、三杉としかずさんなどです。

(資料9)

1984年(昭和59年)1月に3年2組にいた人たちが  
いつから狛江にいるようになったかの調査

< 狛江 面積 551 ㌠ >

- 4 人 石黒 君 多分, 200年以上前に, 神奈川県から。  
久野 君 100年以上前に, おとわく音羽?>から。  
谷田部君 113年前。  
秋元さん 117年前。

- 6 人 昭和19年 国立から 斎藤 君。  
" 20年 富山県から 大熊 君。  
" 22年 浅草から 小穴さん。  
" 30年 谷田部さん。  
" 32年 黒岩 君。  
" 34年 島内さん。

- 12 人 " 40年 仲西 君。  
" 43年 青柳 君。  
" 45年 世田谷から 小島文君。  
" 46年 高橋さん。  
" 47年 前田さん。風間さん。  
" 48年 阿久津君。湯浅君。  
" 49年 宮武君。小島さん。川島さん。黒河君。

- 21 人 " 50年 上野さん。神谷君。 (アンダーラインは商家)  
" 51年 高柳君。  
" 52年 鈴木君。加賀谷さん。足立さん。木内さん。小森さん。  
" 53年 吉丸さん。相馬さん。安田さん。後藤さん。増田君。  
" 54年 長谷川君。  
" 56年 渡辺君。松本君。  
" 57年 横尾君。後沢さん。坂井さん。  
" 58年 堀岡さん。枝川君。

商家は2軒だけ,あとはサラリーマン家庭で,  
農家は1軒もありません。

狛江村誌によると昭和10年には,721戸中  
321戸が農家だったそうです。

100年以上も前から住んでいたお宅が,4軒  
もあるわけです。

大正 9年	人口	2,917 人
	戸数	430 戸
	一戸	6.78 人
	密度	5.29 人/㌠
昭和10年	人口	4,246 人
	戸数	721 戸
	一戸	5.9 人
	密度	7.7 人/㌠
昭和39年	人口	35,180 人
	戸数	1,076 戸
	一戸	3.29 人
	密度	63.8 人/㌠

昭和49年	人口	65,967 人
	戸数	22,479 戸
	一戸	2.93 人
	密度	119.7 人/㌠
昭和59年	人口	70,218 人
3月末	戸数	26,731 戸
	一戸	2.63 人
	密度	127.4 人/㌠

(2) 江戸時代の狛江の村々

狛江市史によって江戸時代の村々の様子を調べてみました。

和泉村 正保（1644年）村高237石9斗，その内、田140石4斗，畑が97石5斗，元禄15年（1702年）村高258石4斗。

六郷用水取入口があり，ほかに用水が一流ある。助郷は甲州道中布田宿勤め，東西15丁南北15丁許。村内平地にて土性は野土に真土半せり。



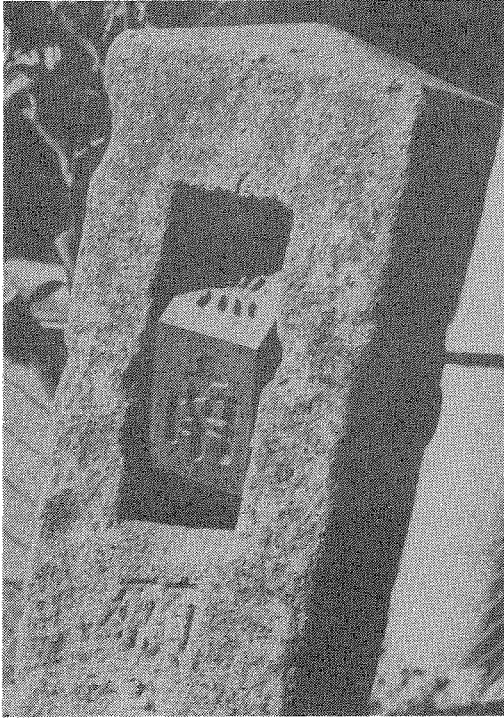
（和泉の松下領で長屋門のある石井さん宅で白などを見て説明をしていただく。）

陸田は多く水田は少なく多摩川の辺に開けり。民戸120軒が所々に散在していた。惣鎮守は六所明神（伊豆美神社）でほかに白幡明神があり，寺院は曹洞宗泉龍寺，天台宗玉泉寺がある。

猪方村 正保の頃は村高84石6斗。家数44軒。馬七匹，助郷は高井戸宿勤めである。用水二流，埋樋は一ヶ所ある。小川寺があり，天神森に天満社があったが，村民の多くは和泉村の玉泉寺を菩提寺とし，同寺の隣地にあった白幡明神は，猪方一村の鎮守とされた。

（猪方・狛江三小校庭，柳の下を用水が通っていた。）





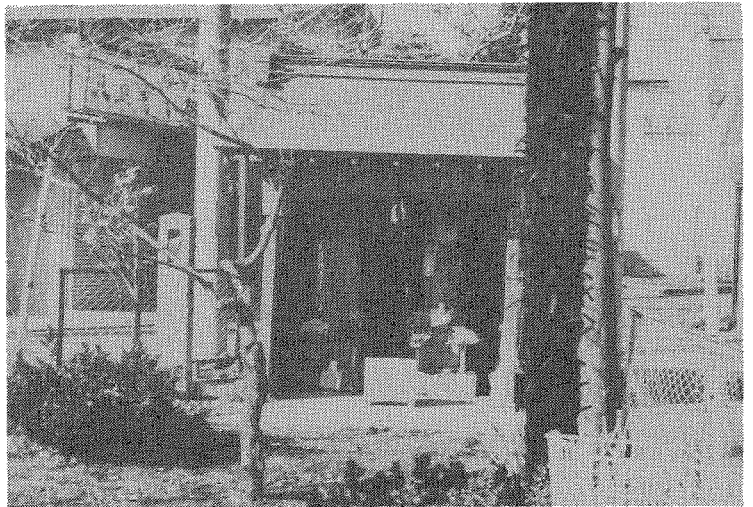
(喜多見の道標)

駒井村 正保2 8石4斗, 元禄1 5年(1702年)  
7 2石8升, 天保7 7石6斗, 土性は真土に  
砂を混じえ, 地形平坦で畑が多く田は少なか  
った。用水は和泉村泉龍寺境内より湧出する  
清水を使用していた。

鎮守は山王権現社, 円住院は影向山毘沙門  
寺と号した。

岩戸村 正保のころ, 井伊領で村高1 1 9石3斗, 家数5 2軒, 馬6匹, 農耕用水は, 六郷用水が通  
過しているが, ほかに用水堀一流, 悪水吐堀一流, 橋は二ヶ所。助郷は甲州道中高井戸宿。水  
車一カ所は和泉村持ちとなっていた。地形は平坦, 土性は野土も少し混ざり, 畑は北寄りで田  
は南方に多く開け, 畑が多く田は少ない。用水は和泉村泉龍寺境内より湧出する清水を利用す  
る。

(喜多見と岩戸の境にある  
地藏尊)



### (3) 江戸時代の用水の開発

江戸時代の用水の開発を前項と同様に狛江市史によって調べてみました。

慶長2年（1597年）に、徳川家康は、灌漑・治水などの促進によって農業生産地域にするため、多摩川流域を小泉次大夫に命じて巡視させた。

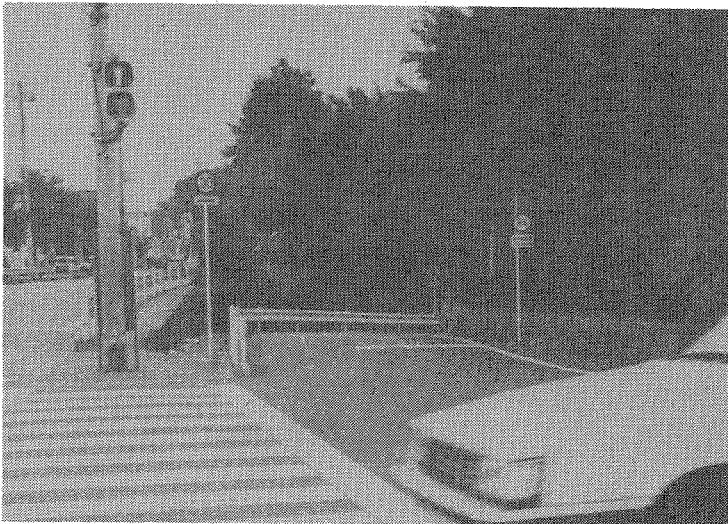
多摩川巡視後、小泉次大夫は、多摩川から水を引入れる用水堀の開削案を進言した。六郷および川崎、稲毛二ヶ領用水を作り、水田造成することを許された次大夫は、慶長2年多摩川下流の測量に着手した。彼は、新用水堀割見立てのため、慶長2年2月1日安方村（大田区）名主兵庫宅に來泊、3日同家に領内村々名主・年寄を呼び集め、案内役を命じた。4日に多摩川下流の道塚村（大田区）から見立てが始まった。2月20日までに南方と北方とに分岐させる矢口村より下流の杭打を終え、21日から4月9日までは川崎、稲毛の二ヶ領用水の見立てに移り、以下交互に進めていった。翌慶長3年8月に至り喜多見村名主・年寄の案内で岩戸村境までを見立て新用水堀境杭を打ち進み、続いて岩戸村名主・年寄の案内で、和泉村境まで進んだ。小泉次大夫は9月中は稲毛領側に赴いているが、10月6日より上和泉村山伏宅に來泊し、和泉村の名主、年寄が案内して岩戸村境より和泉村川原境までと悪水落用水の余り水はづし洗一カ所を見立て、境杭を打ち、10月末日に至って、六郷用水の見立てを完了した。12月5日には、二ヶ領用水側の見立ても終了した。こうしてその後また川下へ戻り、順に堀立てるのである。（資料10）

六郷用水の延長は23.2Km余、その灌漑面積は六郷領4町歩、世田谷領五百町歩。この用水は、和泉村地内の元玉翠園（現興銀狛江寮）の西あたりより多摩川の水を取入れ、多摩川とはほぼ平行して崖地沿いに洪積層の台地を進み和泉、岩戸境で、小金井村・佐須村・（調布市）附近より流れてくる野川の水を引入れ、世田谷区域内で野川と分岐する。

なお、用水組合は世田谷領14ヶ村、六郷領21ヶ村であった。

この六郷用水の完成により、狛江全域の水系に大きな変化が起った。古い野川の流れが六郷用水に合流され、岩戸・駒井地区が野川の流域でなくなった。その代わりに、これらの地区では六郷用水の分水（第一小学校裏）を受けて、灌漑が行われるようになった。

また、泉龍寺弁財天池から流れる清水川の流域（資料11）には、和泉・岩戸にかけて、おそらく中世以前からの狭い水田（湿田）があったと考えられるが、この清水川に六郷用水の分水（田中児童公園）

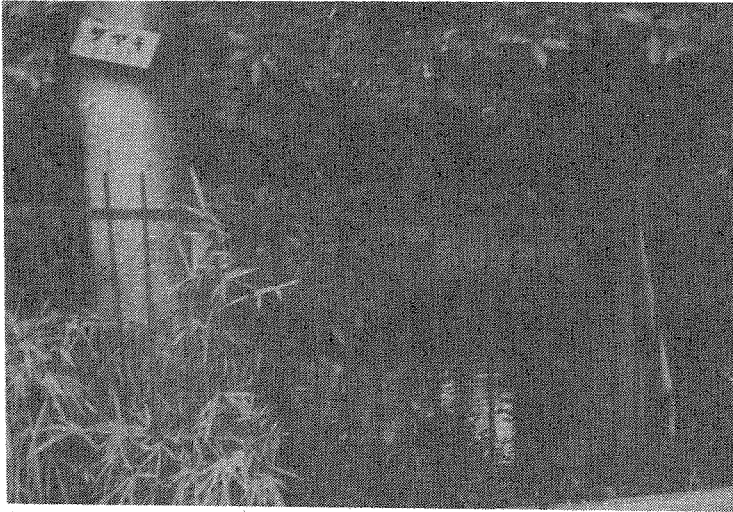


（元玉翠園跡水神社の前）



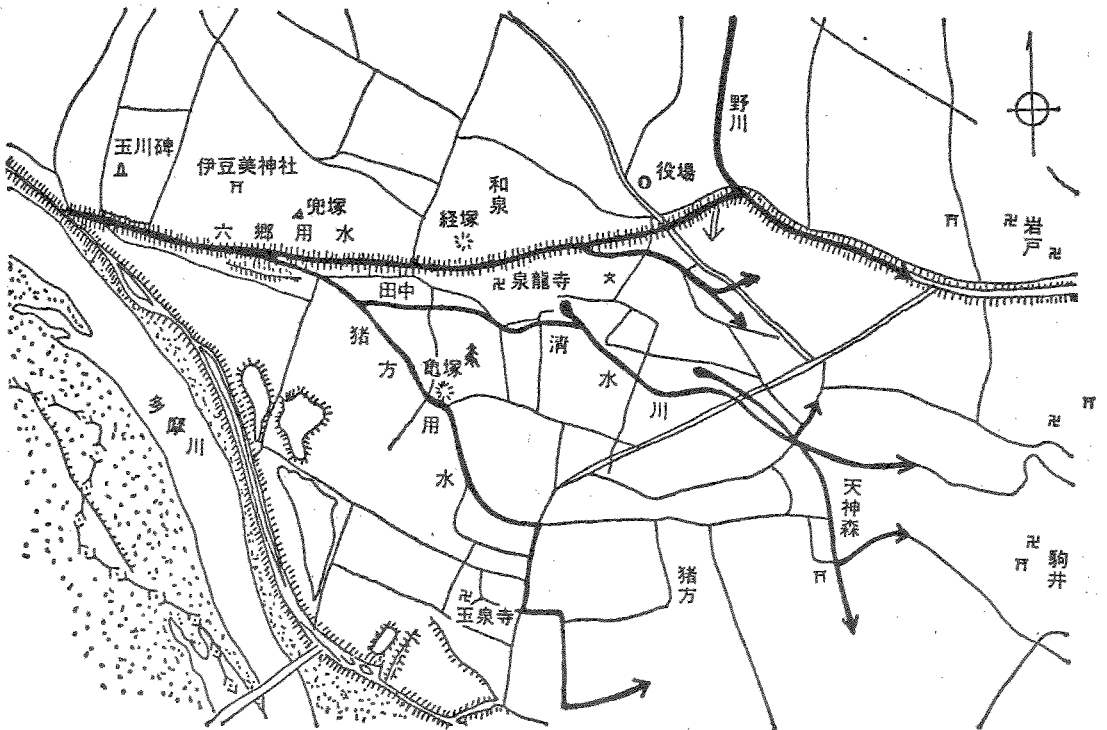
(資料10) 慶長4年より14年六郷用水掘立て施行(狛江市史より)

4年	日 月 場 所 宿	1月9日～3月29日 退塚村下～矢口村下	4月1日～6月24日 川崎領	6月25日～9月25日 堀方村～矢口村下 安方村 名主兵庫	9月26日～12月20日 川崎領	12月22日 御帰宿
5年	日 月 場 所 宿	1月5日～3月29日 矢口村～峰村 鷺木村 名主五郎右衛門	4月1日～6月30日 川崎領	7月1日～9月26日 矢口村～崎村 鷺木村 名主五郎右衛門	9月27日～12月20日 川崎領	
6年	日 月 場 所 宿	1月5日～4月1日 鷺木村～下沼部村 鷺木村 名主五郎右衛門	4月2日～6月29日 川崎領	7月1日～9月26日 矢口村～崎村 鷺木村 名主五郎右衛門	9月27日～12月20日 川崎領	
7年	日 月 場 所 宿	1月5日～3月23日 峰村～上沼部村 下沼部村 名主伝左衛門	3月24日～6月17日 川崎領	6月18日～9月1日 上沼部村～ 下沼部村 名主伝左衛門	9月2日～11月2日 川崎領	11月3日～12月20日 下沼部村～等々力村 小山村 名主三重郎
8年	日 月 場 所 宿	1月5日～3月15日 等々力村 小山村 名主三重郎	3月16日～6月6日 稲毛領	6月7日～7月29日 等々力村～ 小山村 名主三重郎	8月1日～10月20日 稲毛領	10月21日～12月20日 小山村～上野毛村 等々力村 名主兵左衛門 12月22日 御帰宿
9年	日 月 場 所 宿	1月5日～2月15日 等々力村 名主兵左衛門	2月16日～5月5日 稲毛領	5月6日～7月20日 下野毛村～岡本村 上野毛村 名主左内	7月21日～10月1日 稲毛領	10月2日～12月20日 大蔵村～喜多見村 大蔵村 名主市郎右衛門 12月22日 御帰宿
10年	日 月 場 所 宿	1月5日～4月5日 大蔵村～和泉村 喜多見村 名主太郎右衛門	4月6日～7月5日 稲毛領	7月6日～10月1日 大蔵村～和泉村 喜多見村 名主太郎右衛門	10月2日～12月20日 稲毛領	12月22日 御帰宿
11年	日 月 場 所 宿	1月5日～4月5日 大蔵村～和泉村 喜多見村 名主太郎右衛門	4月6日～7月5日 稲毛領	7月6日～10月1日 大蔵村～和泉村 喜多見村 名主太郎右衛門	10月2日～12月20日 稲毛領	12月22日 御帰宿
12年	日 月 場 所 宿	1月5日～4月5日 大蔵村～和泉村 喜多見村 名主太郎左衛門	4月6日～7月5日 稲毛領	7月6日～10月1日 岩戸村～和泉村川原 和泉村 山伏	10月2日～12月20日 稲毛領	12月22日 御帰宿
13年	日 月 場 所 宿	1月5日～4月5日 岩戸村～和泉村川原 和泉村 山伏	4月6日～7月5日 稲毛領	7月6日～10月20日 岩戸村～和泉村川原 和泉村 山伏	10月21日～12月20日 稲毛領	12月22日 御帰宿
14年	日 月 場 所 宿	1月5日～4月5日 岩戸村～和泉村川原 和泉村 山伏	4月6日～7月5日 稲毛領	7月5日 工事竣工		



(泉龍寺弁財天池)

(資料 1 1) 六郷用水と野川・湧水図(狛江市史より)



六郷用水と野川・湧水図

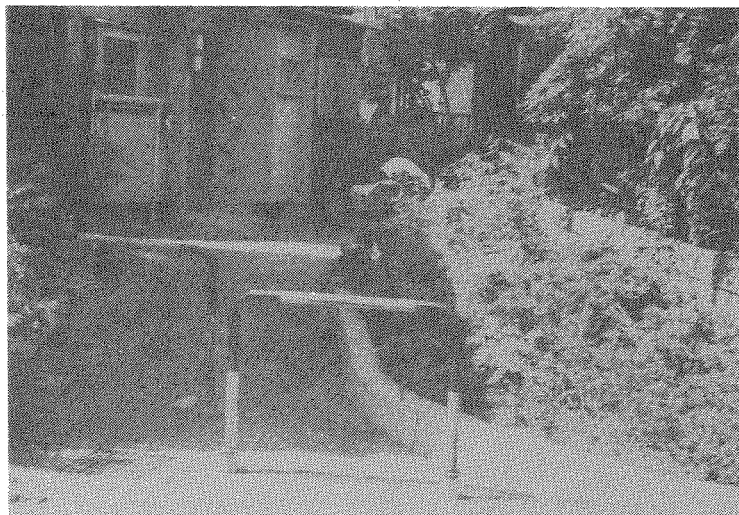
を接続することによって、清水川の水量を大きく増やし、岩戸以東の流末が広まっただけでなく、新たに猪方方面に向かう掘割が作られ、天神森下から猪方の一部および駒井方面の灌漑が行われるに至った。

さらに寛文年間(1661~72)には、六郷用水を分水した猪方用水が作られ、水神下(猪方)から猪方の西側一帯を潤すようになっている。幕府権力が成し遂げた用水に依存してのみ農民生活が成り立つようになるという画期的な事件であった。

六郷用水が完成する以前における狛江地域の水利は、主に野川と泉龍寺の池および幾つかの湧水によっていたと考えられる。

野川用水は、国分寺 恋ヶ窪 小金井を経て、佐須辺で玉川上水より流れくる水を引入れ、佐須 柴崎 金子 大町（調布市）を過ぎ、当地域に入り、小足立・覚東・和泉と流れ、和泉と岩戸の境で六郷用水に合流する。宝暦2年（1752）の記録によれば、野川の灌漑面積は、和泉村では5町6反8畝8歩となっている。

（猪方の用水の跡）



泉龍寺弁財天池は、和泉村泉龍寺境内から湧き出た池水を源とし、田場の用水となる。これは六郷用水開通以前から、和泉村周辺の村々で用水としていた。その流域は、和泉・駒井・岩戸・喜多見・大蔵の諸村である。

干魃には流末では湧水しがちであったが、帯状に続く湿田の部分だけは、平年の生産力は低い、干魃に強かった。このために、明和8年（1771）より新たに「弁天御供米」玄米一斗が泉龍寺に納められることになった。

5年生が国語の学習で前述したように聞き取り調査をしてまとめたものを載せておきます。

〈六郷用水と女性〉 より

恒松 良昌

世田谷は、水の流れる川がなく、雨が降ると水たまりが、そこらじゅうにできました。だから、田んぼがありませんでした。

「川があったら、田んぼが作れる。」

「自分たちで、川を作ろう。」

「となりの村の人にも相談してみよう。」

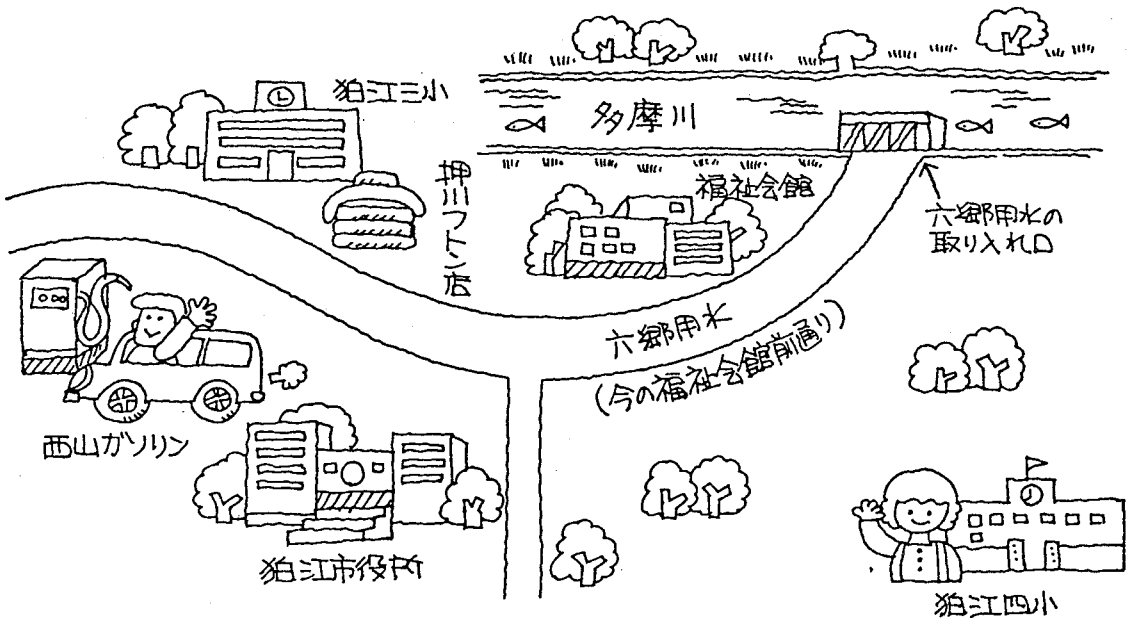
ということで、となりの村に相談しました。そうしたら、

「いっしょにやりましょう。」

と言ってくれました。そのまたとなりの村にも相談しました。

「いっしょにやりましょう。」

と言ってくれました。幕府の代官である小泉次太夫 — ジダユウ — さんが工事のまとめ役を、ひきうけてくれました。



すきでどろをすくい、もっこに入れます。

「さあ、かついで。」

「もう、つかれちまった。」

今のように機械がないのですべて人がやらなければなりません。村人たちは疲れてしまったのです。毎日土ばかりをみているので、やる気がなくなってしまったのです。次太夫さんは、困ってしまいました。「もっと早く工事をすすめる方法はないものだろうか。そうだ。女の人にも、手つだってもらおう。」

男の人10人の間に、若い女の人を一人ずつ入ってもらいました。女の人たちはよく働いてくれました。

「ハイ、お茶が入りましたよ。休んでください。」

「今日は、もう少し頑張らましょね。」

と男の人をはげました。それで、男の人は今までより、よく働くようになりました。

全部できあがるまでに15年もかかりました。これが六郷用水です。この川ができて、たくさんの方が田んぼをつくることができ、多くのお米がとれるようになりました。

こんなことから、この川を「次太夫堀」とか、「女堀」とか呼ばれました。今は「丸子川」と名がかわりました。

このお話は、お母さんが選んでくれました。もともと、うちのお母さんは世田谷に住んでいて、世田谷のお話の本がたくさんあります。狛江の六郷用水と世田谷の六郷用水をくらべたかったので、この話を選びました。今は狛江の六郷用水は全部うめられています。世田谷のはまだ残っているということです。狛江だけに用水があるのではなく、六つの村を通して、今の大田区の方までつながっていることを知りました。

この世田谷の用水を一度見たいと思っています。

<二の橋は昔> 石井さんの話

沢田 明子

一の橋を通して、二の橋からずっと東京湾のそばまで続いている、水がきれいなので昔の人は泳いでいたそうです。川をうめたてたのは、昭和40年ころだそうです。そこを道路にしてしまったのだそうです。

<むかし話> より

絹山 朋子

狛江は、むかし田んぼや畑ばかりだったそうです。そればかりでなく林や原っぱもたくさんあったそうです。畑や田んぼがあれば、これをあらす人や、ぬすむ人もいました。これから書くお話は多摩地区に伝わっているお話です。

<たんぼあらし> 多摩地区

むかしむかし、稲が実って明日は刈り取りという夜のこと、真っ白な馬がやってきて、田んぼじゅうを大暴れ。あくる日、お百姓さんはあられた田を見つけました。昨日までの田とは大ちがいの、見るもむざんな姿。

かんべんならん、というわけで村の衆みんな夜通し見張ることにした。その夜のこと、またもあの白馬がやってきて田の中へ入っていく。

「よーし！ つかまえろー！」

の一声で馬をおいまわした。しかし白馬は勝手気ままに暴れまわり、とうとう全部の田をムチャクチャにして帰っていった。

くやしきでいっぱいの人たちは、足の速い若者を選び、白馬のあとをつかさせた。若者は白馬を追ってようやく山頂へ登ると、もうそこには白馬はいない。ところが、お堂のとびらがあいている。

「ははぁ。」

と考えた若者は、村の衆を呼んできて馬がかくれているらしいお堂のまわりをとりかこみ、いっせにお堂の中へ。しかしお堂の中には馬はいない。あたりを見まわすと、かべに絵馬がかかっている。その絵は、まさしくあの白馬。その白馬の足を見ると、田のどろでよごれているではないか。

「どうして絵の馬がとび出したのだろうか？」

よく絵をながめて見ると、絵の馬には手綱がかかいていないから馬が暴れまわったという訳だ。

原因がわかってひと安心。絵かきを呼んで、手綱とくいをかきこんでもらい、お堂にかけておいた。それからというものは、田んぼあらしのひがいがなくなったということだ。

というお話です。狛江市に田んぼが多かったということは、川があるはずですよ。多摩川です。多摩川には、古くからいろいろなお話が伝わっています。いろいろな本を読んで、私たちが住んでいる狛江市に、こんなことがあったのかと思うとびっくりします。もっと狛江に親しくなってみたく思います。

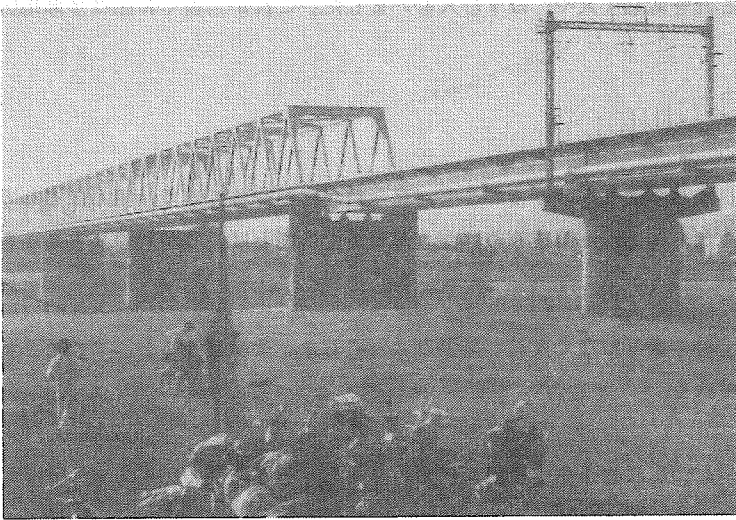
多摩川のウナギの話・和泉多摩川の玉泉寺に伝わるカッパのクー助など、  
多摩川のむかし話 <有峰書店> にのっています。  
小泉八雲の怪談の中の「雪女」も調布の話です。 <調布のむかし話>

#### (4) 河川改修と氾濫

粕江市史から抜き書きをしました。

治水は農業と密接な関係があり、堤防を堅くし河底を浚渫することが、重要視されていた。

天保19年(1550)多摩川の洪水により、和泉村鎮守六所明神流失、その後も元禄・宝永・正徳・享保と洪水による田畑の川欠が記録されている。享保20年(1735)6月出水。寛保3年(1743)前年の多摩川洪水により、多摩川通りは公儀御普請になり、その費用は川通り村々で金約3,000両ほどであった。

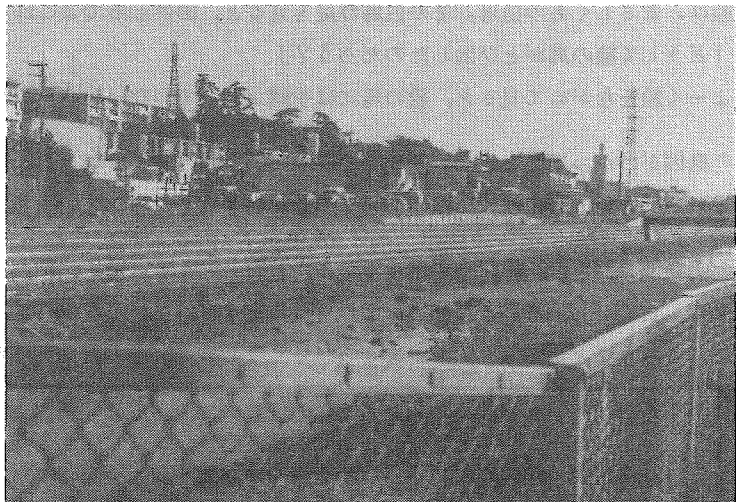


(多摩川粕江グランド附近)

この後も、川欠の記載は多くみられる。

天明3年(1783)猪方村大堤切れ、その築立は水下7ヶ村の自普請で完成する。天明6年(1786)猪方村大堤切れ、築立普請金が三度に切渡されている。寛政3年(1791)猪方村の堤が8カ所で約240間切込み、田に砂利が入る。砂入り田は堤築立の際に砂利を取除いた跡新田になり、見捨(免税)地と、以後決められた。この年、和泉村でも120間余の堤切所ができた。

(六郷用水と野川の合流点)



このように、度重なる川欠とこれに対する川普請が明治期にと引継がれていく。

また、春普請といって、田植え前の農閑期に数々の普請を行うことが行事となっていた。村方の川や堀・橋・堤防・杵樋・堰枠などを保守することは、村役人はじめ村民の義務であるとともに、その良否は直接稲作に関係し、幕府も農民に注意を促し、村役人に厳重に管理させたのである。

(多摩川狛江附近)



駒井の秋元清平さん(明治38年7月24日生)は、

「用水は六小の周囲に関しては、六小が建つ頃まで水田が江戸時代より続いていたが家で食べられるくらいを作っていた。用水の掃除は年2回5月1日と、2回目は草刈だけを8月の下旬にしていた。六郷用水から引っぱってきていたので、六郷用水からの取り入れ口までを掃除した。5月1日の溝さらいに出ない人は“デブソク”と言って日当としてお菓子代を払っていた。一軒の家から一人ずつ田の大小にかかわらず一戸に対して一人の割合で出ている。

三小の裏のはセキタから流れていた。普段は空で、5月になると、そこまでの関をあげ水門までの溝さらいをした。

裏の川・表の川とあり、表の川は東洋堂の下にきている分である。裏の川は百人位は出た。朝7時、8時から始めて晩までやった。

この他に私堀があった。

消防署の裏の川はイケメンと言って池を埋めたらしい。私堀としては宮武さんの家のそばを“どじょう川”円住院の所を“前川”教会の所を“平戸川”と言っていた。」

岩戸南の岩戸造園の秋元重光さん(明治33年4月19日生れ、85歳 昭和61年3月没)

「春と夏にシャベルを持って行って水の流れをよくする。

泉龍寺へは水年貢といってお米を納めていた。お正月・お盆に年貢を納めた。一升檀家二升檀家と畑の広さ、収入で納めた。

和泉のところ、二つ橋で駒井の方と分れており、しぐち(水の取り入れ口)は、神田橋のあたり、水の多い時は板で調節してさしこんで、六郷用水が多い時は来ないようにした。土手が切れてしまったことがある。稲の穂まで水が来てしまったこともある。

明治43年猪方の堤防が切れて、八幡神社の下から二つ目の階段まで水が来る。舟で行ったりきたりした。小田急の鉄橋が切れて昭和になってからも切れている。明治42年大水、43年田植えしたばかりの稲が流れた。」

猪方の清水さん（大正四年生）

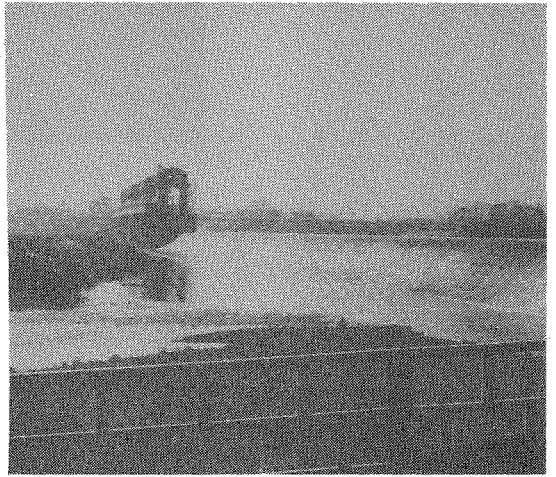
「父親は農業をしていたが、多摩川が氾濫すると、等々力だとかあの辺に仕事がいっぱいあっていった。玉川上水の鉄管を入れる時は朝3時おきで行った。」

東和泉の絹山さん（大正四年生）

「戦後も水が六郷川の方から氾濫し、いちょう通りの脇の水田は低い方は水につかり、後が大変臭かった。舟でおむすびなど届けられたのを覚えている。その後、今から9年前ぐらいに多摩川が氾濫した時は、堰を爆破するために、退避するように言われ、ロータリーまで逃げたが、家のガラスは割れた。」



いちょう通り（六郷用水のあと）



（多摩川の猪江の堰）

狛江市史によっても、聞き取り調査によっても、多摩川と用水の氾濫、改修はいつの時代にも変ることなく続いてきたことが理解されます。水田のあった時はあった時で、用水は掃除を年二回はしなければなりません。水田がなくなれば、ちょっとした大水で用水や川は氾濫したようです。

5年生の聞き取り調査から

<石井 干城さん> より

鈴木 博仁

多摩川は今までにいろんなところに動いていると、おじさんは言った。川の向こうの向ヶ丘の方の、榊形山のすぐ下を流れたり、岩戸の境のお宮のそばを流れたりしたそうです。

今の所におさまったのは、明治の終わり頃で、今から70年～80年くらい前だそうです。

明治45年に川を境にして、狛江村と稲田村というふうに分けたとおじさんは言っていました。（川の真ん中を境にした。）

宿ヶ原というところが狛江に入ったが、今は、狛江市の駒井町3丁目に入っているそうです。



おかあさんに聞いた話です。

私たちが1才ぐらいの頃の9月初めのこと、雨が1週間ほど降り続いたそうです。回覧板がまわってきて、

「今度、雨があがったら堤防をくずしますので、窓ガラスとかがわれる危険があるので、広くて安全な所に逃げてください。」

と書いてあったので、三小へ逃げたそうです。

その時の三小は、どろまみれでくろずんでいたようです。

その日はとてもいい天気に見えたらしく「まぶしかった」とか言っていますが、私はくもりだったような気がします。

みんな長ぐつをはいていました。その日は校庭が狭く感じたのですが、多分人がいっぱい集まっていたからでしょう。

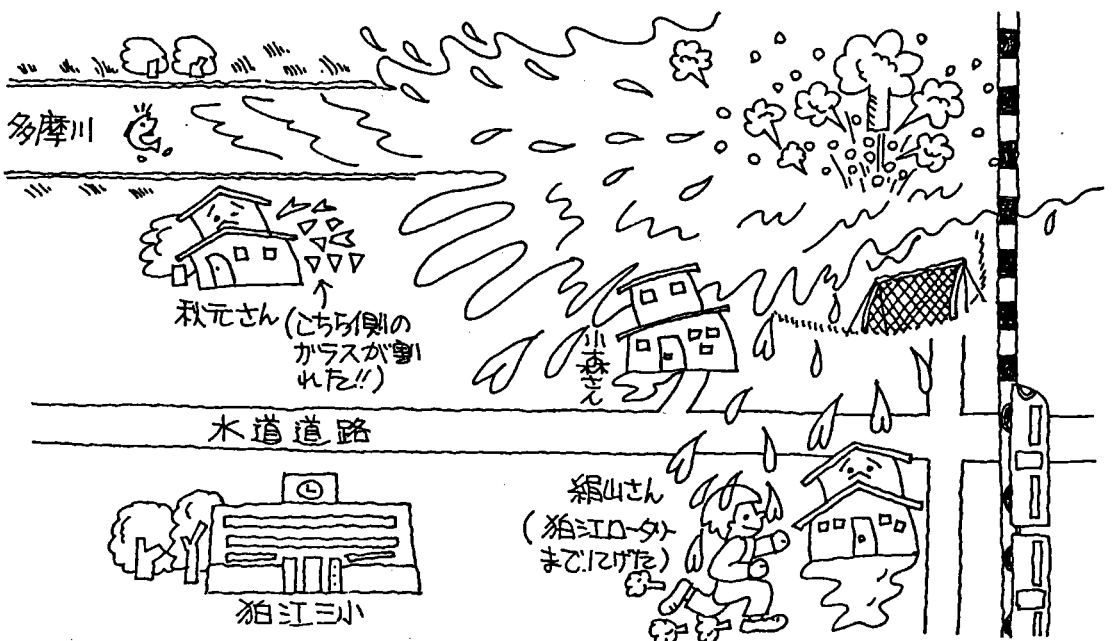
先生が

「これから、一発目のダイナマイトを爆破させますから、しょうしょうのひびきはがまんしてください。」一発目のダイナマイトはびくともしなかった。おかあさんが、学校の生徒を見たら、生徒はとても静かだったそうです。それよりか、おくさんたちのほうがびっくりしきわいでいたようです。

先生が

「エー、おくさんがた静かにしてください。又、二発目のダイナマイトを爆破させます。一発目より、衝撃が強いのでけがをしないように気をつけてください。」と言いました。

急に、ものすごい音が生、みんなびっくりした。地ひびきもしてきた。でも、まただめだった。しばらく、こんなことが続いていたへんだった。



## (5) 新田開発

狛江市史からこの項を抜萃してみました。

猪方に寛文年間(1661～72)の新田開発があるが、石高などは全く分からない。また慶長年間(1596～1614)の六郷用水によって当然新田ができたはずだがその記録はない。明確な記録を残しているものとして、和泉村石谷領では、宝永5年(1708)の新田開発、また同村井伊領では翌宝永元年(1709)の新田畑開発を初見とする。猪方村は寛政8年(1796)を初見とすることが正しいとすれば、和泉村よりほぼ100年近く遅れたことになる。

江戸時代に「新田開発という場合二つの意味があって、広義には未開発の荒野を掘起こして、新しく田畑を開発することをいうが、普通は一カ村にも及ぶような大規模な耕地造成を新田開発と呼び、農民たちが耕作の余暇をさいて自分の田畑の周辺の小規模の未耕地などを開発することを切添きりぞえと呼んでいる。

両者とも、一定期間(2～7年)は無年貢であった。新田開発が急速に進むと、広く耕地や河川を荒廃させ、古田畑の管理の手入れを怠り、結局は多量の荒廃田を生じさせるので、「本田畑」を重視する政策を幕藩体制初期にはとろうとした。

明和3年(1766)和泉村川原新田水帳によれば1町1反15歩

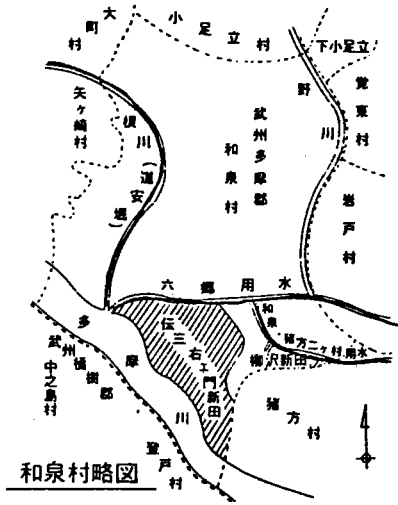
明和8年(1771)1町9畝

寛政8年(1796)用水は古来の通り上野根川を取入れ、すでにある堀敷より垾下までを堀り、六郷用水を掛樋とし、それを銘々へ分水し、三給西耕地古田が、先年の川欠立返り地面を小前へ銘々割付けられる。

文政11年～2年(1828～29)和泉村字柳沢古割の新畑一町一反二十五歩を新田に開発した。天保3年～14年(1832～43)和泉村井伊領名主伝三右衛門は、私財を投打ち多摩川附近の荒地の開発を出願し、上野村根川、道安堀残水を六郷用水よりもらい受け新田を開発した。反別約34町余歩といわれている。その一部は幕府直轄の高入御料所となり、残りは井伊・石谷・松下各領地の支配に組み込まれた。この新田に根川の利用を計画したのであるが、多摩郡国領村、上給村、上布田村・下布田村(調布市)四カ村の用水であったので、異義の申立てがなされた。また六郷用水に掛樋を新しく築工して多量の用水を導入することは、六郷用水を利用している荏原郡35カ村にとっては重大な問題であり、反対を申入れてきた。これに対して、和泉村側では、それぞれの村方に対して趣意金を差出すことを約束している。また六郷用水路の村々にも、このほか年々一札を入れて、掛樋の修復・掛替えや用水管理のことを取決め、天保13年(1842)に至り、ようやく議定証文を取交わした。

この他にも、村役人どうしの争いも井伊家・松下家・石谷家であったようだが、江戸時代狛江が農村地帯であり、多摩川の流れに一喜一憂して暮らしていただろうことは想像できる。

(資料12) 和泉村略図



(6) 近代の六郷用水(多摩川誌からの抜萃)

明治5~6(1872~1873)年ごろの旧六郷領の農業生産は穀類が主流であったが、ナス・キュウリ・ニンジン・ゴボウなど都市近郊農村における農業経営の集約化=商品作物栽培が出現してきた。特に明治後半から急速に米穀が減少し野菜類が急増、東京近郊の園芸農業地としてきている。また農家の米、野菜、味噌醤油などの購入も同じ頃から急増している。

経営の転換が行われた明治時代においても用水管理は組合によって行われるのが基本であったが、明治5年(1872)名主、庄屋等が廃止され、同11年(1878)郡区町村制、同22年(1889)市町村制公布とめまぐるしく地方行政組織が変更

され中央集権化されたのに伴い、用水管理の方法も大きく変化する。明治11年に郡長の管理に属するようになり、六郷用水普通水利組合会議員が各村から約30名選出され、その互選により選出された5名の常設委員により実際に管理されていた。大正13年には小堀ごとに12の組合が組織されていた。

流水制限の際には各町村長が立ち合っていること、内堀用水費を町村役場が徴収していることは、江戸時代に自普請の増加に伴い、幕末に近づくに従って用水管理が農民の手に移っていくのに対し、明治維新後には用水の維持管理・運営に対しての町村の発言権が強まっていったことを示している。

六郷領用水流域の宅地化は、明治中期以降、東京の人口増加に伴って次第に進展した。特に大正12年(1923)の関東大震災を契機に、大田区でも大森駅に近い新井宿から馬込に文士が住み、大正7年(1918)に田園都市株式会社が創立され、日本で最初の計画的住宅専用市街として計画された田園調布の住宅街が建設され、土地の分譲が行われた。また同11年(1922)に現在の目蒲線も開通し、交通の便も図られた。これ以後、現在の東急各線が開通され、さらに住宅地化に拍車をかけた。そのため農地は減少し、六郷領用水の農業用水としての地位も低下していった。

また明治5年(1872)に官営鉄道、同34年(1901)に京浜電気鉄道の運転が開始され、後それが延長されるに伴って臨海地域を中心に東京瓦斯株式会社大森製造所、同社大森自動車工場などの多くの工場が建設され、これによっても用水の地位は低下していった。

こうした社会の急激な変化により上水道の設置もすすみ、この用水の生活用水としての側面も消滅することになる。用水取入口付近では昭和6年に日本水道狛江浄水場が建設され、市街地化した世田谷町、駒沢町一円およそ2万haの10万人に給水を始めた。これら昭和初期に相次いだ上水道設置は、宅地の増加と東京市が衛生上の理由から農業用水、河川水の飲用など生活水としての利用を中止するように指導したことの反映で、これにより六郷領用水の生活用水としての社会的役割も急速に後退し、流域各地の物洗場は次々と姿を消した。

第二次世界大戦で敗北し荒廃した日本の復興はめざましかったが、大都市への人口集中——とりわけ1960年代の高度経済成長期の東京とその周辺の人口集中は激しく、大田区、世田谷区の宅地化はすさまじいばかりで、農地・農用地は次々と宅地化した。戦前、戦後の社会変化の中で、六郷用水は農業用

水・生活用水としての使命を終えて、狛江市和泉の用水取入口は破却され用水組合も解散された。残念ながら取入口破却、組合解散の年月日は不明である。

(7) 経済的基盤（明治以降の農業）

ここで眼を近代・現代に転じて、明治・大正・昭和の狛江市民の経済的基盤はなんであったかを資料をみながら考えてみよう。

(資料 11) 明治9年の生産物

地名 産物名	和 泉	猪 方	駒 井	岩 戸	覚 東	小 足 立	大 町	
米	410石355合	240石900合	138石300合	256石	55石 反=付7斗7升	83石	181石	
大 麦	700石	126石	84石	261石350合	48石 " 8斗	110石	82石	
小 麦		49石140合	43石864合	81石140合	16石 " 4斗	40石	46石	
大 豆	85石	26石	28石	56石500合	16石 " 4斗	18石	19石	
粟	114石	18石	15石	31石930合	15石 " 7斗5升	28石	18石	
稗	120石	25石	78石	83石250合	3石 " 6斗	45石	28石500合	
黍	40石	20石	15石	24石200合	24石 " 8斗	14石	11石	
菜 種			1石200合	1石100合			950合	
胡 麻	4石	300合	400合	3石710合			7石350合	
蕎 麦	20石	7石	2石100合	18石510合	1石6 " 3斗	5石500合	4石500合	
小 豆	10石	2石600合	2石300合	4石660合	2石 " 4斗	3石	7石	
大 角 頭		2石400合						
綿 芋			6ノ					
薩 摩 芋	200駄	70駄	60駄	1駄=16ノ	100駄	20駄	55駄	28駄
芋	160駄	75駄	39駄		133駄	20駄	50駄	40駄
苳	3石				1石600合			1石6斗
唐 (唐胡麻)					510合			1石3斗
大 根	180荷	45荷	50荷	1荷=7ノ	60駄	24本	3,000本	40荷
午 房 (旁)	12荷	2荷	6荷	"	12駄	300本	30荷	2駄 1駄=14ノ
茄 子	200荷	62荷 1荷=6ノ500	40荷	"	80駄	16荷	30荷	30荷
黄 (胡) 瓜	10荷		1荷	1荷=6ノ5				
鴨 (氈) 瓜			1荷	"				
南 瓜	20荷	2荷 1荷=7ノ500			3荷			7荷 1荷=7ノ500目
茶	120斤		12斤半	1斤=160目				5斤
藍 葉			4貫目					
桑 葉	20駄	8駄	70駄	繩3尺3寸廻し				3駄 3尺3寸廻し
柿	25駄	3駄 16ノ=1駄	3駄		15駄	10駄	10駄	10駄
栗	1石500合					500合	9斗	1石200合
竹 薪	30束	15束	30束			200把	300把	220束
槨 木	500把	40束	50束			12駄		1,300把
炭 下 工		4,400本	1,500本				640本	12駄
傘 轆 種		5,500本						
蚕 紙 ヌ	278枚		140枚					
マ 下 駄	14石	5斗	4石500合	1斗=1ノ200目				
鮎	300	40枚	200枚	1枚=30並				
鶏 卵	3,000	600	600	750		1,500	800	

明治9年の生産物(資料11-狛江市史より)をみると、米・麦・野菜・鮎・マユ等がみられ、農業を主として生計を立てていたと考えられます。

この後、狛江市史によると

明治30年(1897)日清戦争後の大きな資本主義の波が押し寄せつつあった。

富永銀之助の日記によると、農業と養蚕業に対して営々たる努力をし、同時に蔬菜栽培をはじめとする都市近郊農村における経営努力、銀行業への接近、投資が読める。米作改良・稲麦試作等の研究も熱心だった。

(資料13)は、土地所有の状況の表ではあるが、田・畑・山林・原野の多いことが理解できます。

(資料13) 明治35年 江村の土地所有状況(狛江市史より)

旧村名	項目 地名	当村民所有		本郡 他町村民所有		府下 他郡区民所有		他府県民所有		合計			1人当り 平均反別
		人員	反別	人員	反別	人員	反別	人員	反別	人員	反別	人員	
和泉	田	89	4,686.01	1	08.08					90(35.4)	4,694.09(42.3)	52	
	畑	155	13,286.08					1	08.22	156(39.6)	13,295.00(51.0)	85	
	宅地	145	1,487.14							145(43.2)	1,487.14(41.8)	10	
	山林	118	2,453.09							118(39.5)	2,453.09(34.7)	21	
	原野	10	4,119.02							10(20.8)	4,119.02(94.7)	412	
猪方	田	40	874.11			2	125.11	6	199.06	48(18.9)	1,198.28(10.8)	25	
	畑	59	1,829.00	1	05.11			5	133.27	65(16.5)	1,968.08(7.6)	30	
	宅地	50	441.28					1	03.10	51(15.2)	445.08(12.5)	9	
	山林	46	931.27					3	35.07	49(16.4)	967.04(13.7)	20	
	原野	17	80.00							17(35.4)	80.00(1.8)	5	
駒井	田	23	469.04	5	112.23	4	278.08	6	334.19	38(15.0)	1,194.24(10.8)	31	
	畑	33	1,074.22	4	156.21	4	159.15	8	489.11	49(12.4)	1,880.09(7.2)	38	
	宅地	29	293.29			1	12.27			30(8.9)	302.6(8.6)	10	
	山林	27	333.26	2	21.11			4	168.19	33(11.0)	523.26(7.4)	16	
	原野	11	76.22							11(22.9)	76.22(1.8)	7	
岩戸	田	29	2,127.02	1	06.29					30(11.8)	2,134.04(19.2)	71	
	畑	58	3,815.24	5	229.17	1	52.25			64(16.2)	4,098.06(15.7)	64	
	宅地	55	718.13							55(16.4)	718.13(20.2)	13	
	山林	43	1,317.08	1	03.23					44(14.7)	1,321.01(18.7)	30	
	原野	3	21.19							3(6.3)	21.19(0.5)	7	
覚東	田	15	730.09			1	14.11			16(6.3)	744.20(6.7)	47	
	畑	17	1,285.03							17(4.3)	1,285.03(4.9)	76	
	宅地	18	190.05							18(5.4)	190.05(5.3)	11	
	山林	15	440.05							15(5.0)	440.05(6.2)	29	
	原野	3	23.26							3(0.3)	23.26(0.5)	8	
小足立	田	32	1,137.13							32(12.6)	1,137.13(10.2)	36	
	畑	43	3,527.16							43(10.9)	3,527.16(13.5)	82	
	宅地	37	409.14							37(11.0)	409.14(11.5)	11	
	山林	40	1,365.20							40(13.4)	1,365.20(19.3)	34	
	原野	4	28.14							4(8.3)	28.14(0.7)	7	
小計	田	228	10,024.10	7	128.00	7	418.00	12	533.25	254(100)	11,104.05(100)	44	
	畑	365	24,818.13	10	391.19	5	212.10	14	632.00	394(100)	26,054.12(100)	66	
	宅地	334	3,541.13			1	12.27	1	03.10	336(100)	3,557.20(100)	11	
	山林	289	6,842.05	3	25.04			7	203.26	299(100)	7,071.05(100)	24	
	原野	48	4,349.23							48(100)	4,349.23(100)	91	
	合計	1,264 (95.0)	49,576.04 (95.1)	20 (1.5)	544.23 (1.0)	13 (1.0)	643.07 (1.2)	34 (2.5)	1,373.01 (2.6)	1,331(100) (100)	52,137.05(100) (100)		

(「北多摩郡狛江村土地所有者種別調」)

明治中期の日本資本主義は狛江にも玉川鉄道・京王電気軌道の開通や、納税の貨幣化などの形で除々にやってきて波に吞まれていったと考えてよいのではないだろうか。

(資料14) 明治・大正の職種の変化

年度	職 業 名
明治28年	轆轤工
33	巡査(←千歳烏山)
34	商人, 教員
35	土木技手(←福井)
36	花屋
37	大工(2名), 商人(2名), 理髪職, 教導職
38	商人
39	僧侶
40	土木業, 人力車夫
42	商人
43	農兼桶職, 農兼商, 農兼酒造業
44	魚商, 宗教家
45	僧侶, 染物業, 足袋職
大正2年	荒物商(2)〔和〕, 菓子製造販売〔和〕
4	荒物商(2)〔岩・小〕, 裁縫業〔駒〕, 巡査〔←千歳烏山〕, 小学校教員〔和〕
5	大工〔岩←玉川村〕, 漁業(2)〔和・猪〕, 飲食店〔和〕, 小学校教員〔和〕
6	玩具商〔和〕, 新聞配達業〔和〕, 理髪業〔岩〕, 魚商(2)〔岩〕, 鶏商〔駒〕, 桶職〔小〕, 小学校教員〔和〕, 僧侶〔覚←神代村〕
7	大工〔和〕, 荒物商〔和〕, 屋根職〔和〕, 飲食店〔和〕, 材木商〔和〕, 鶏商〔和〕, 菓子商〔岩→本所へ〕
8	僧侶(3)〔和・岩・小〕, 鍛冶職〔和〕, 花屋〔和〕, 理髪業〔和←溝口〕, 巡査〔和←立川〕, 軍医〔和←宇都宮〕, 大工〔岩〕, 荒物商〔小〕, 漁業〔猪〕, 酒類・荒物・雑貨〔和←多磨上染屋〕, 教員〔和←檜原〕
9	小学校教員〔和〕, 古物商〔和〕, 人力車夫〔和←国領〕, 鶏卵商〔和〕
10	松沢病院書記〔猪〕
11	下駄職〔和〕, 貸自動車〔和→湯島天神町〕, 料理人〔小→野方村〕
12	小学校教員〔和→是政〕, 陸軍々属〔猪→渋谷〕
13	青物商〔和←中目黒〕
14	出版業〔覚←砧村〕, 土木業〔岩→南千住〕

(資料14)も狛江市史からとったものであるが、明治・大正と移っていくに従い商人をはじめとして職種が増加し、移住してくる人が数は少ないながらも存在したことが理解できます。

注 〔和〕〔猪〕等は旧字名の略  
←は入, →は出寄留・移住を示す。

(「学齡簿」)

昭和に入ってからの変化はどうでしょうか。

(資料15) 狛江村の民有有租地反別(狛江市史より)

年度	項目					
	田	畑	宅地	山林	原野	計
大正 4	町 99.37	町 272.48	町 29.03	町 47.60	町 46.98	町 466.43 (495.46)
同 10	106.46	275.67	35.16	46.25	46.95	510.49
同 14	104.14	275.19	35.84	44.58	5.24	467.99 (464.99)
昭和10	104.93	285.65	49.83	21.78	4.93	467.12

(資料15)をみると、山林・原野が減り、田・畑・宅地が増えました。

(『東京府統計書』)

狛江市史を読みますと、

昭和恐慌が農業にも深刻な打撃を与え、小田急線における住宅地化の動きも出だした。

昭和9年の旱・風害による農産物の減収・繭価の下落は狛江村に大きな打撃を与えた。昭和14年東京航空計器株式会社の工場内へ青年学校を新設認可の申請を出しているが、戦争遂行のための軍需工場が昭和10年代に移転してきている。

昭和35年以降の産業別人口構成を表にしてみると次のようになりました。

昭和53年4月1日発行ののびゆく狛江によります。

		第一次	
昭和35年 10,295人	7% 714人	38%	55%
昭和40年 17,524人	4% 522人	39%	57%
昭和45年 26,131人	2% 522人	38%	60%
昭和50年 29,387人	1.4% 411人	33%	66%
昭和55年 31,366人	1.2% 376人	30.9%	67.9%

第一次産業は昭和35年からの20年間で約半数の人数に減り、第二次産業もパーセントの上では減っており、急激に増加したのは第三次産業に従事する人達であることがわかります。

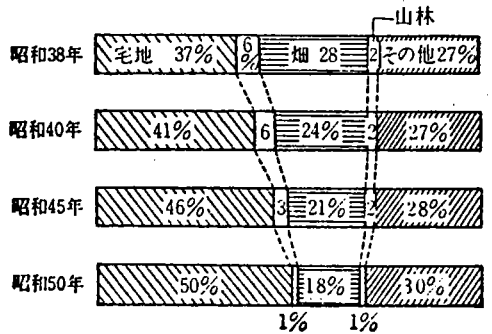
(資料16)は、のびゆく狛江53年版に載っていたものですが、これをみても田畑が減り宅地が増加していったことがわかります。

東京の近郊農業地域としての役割から都市のベッドタウンとしての宅地化が進んだのではないかと考えられます。

(資料16)

地目別土地面積の割合

総面積6.15km<sup>2</sup>



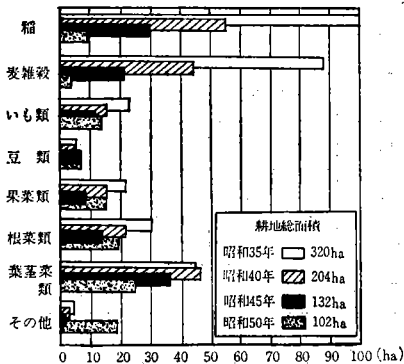
(資料17) 狛江市内の水田面積推移 (統計 こまえより)

年	区分	耕地面積総数	田			
			総 数	一毛作の稲田	二毛作の稲田	そ の 他
40		15,743 <sup>a</sup>	3,373 <sup>a</sup>	1,745 <sup>a</sup>	1,106 <sup>a</sup>	5,22 <sup>a</sup>
45		13,193	1,925	599	435	891
50		10,141	503	35	0	468
55		8,492	37	37	0	0

(資料18) 専業、兼業別農家数 (統計 こまえより)

年	区分	総 数	専業農家	兼業農家		
				総 数	農業が主	兼業が主
40		313	97	216	88	128
45		299	19	280	21	259
50		287	5	282	39	243
55		252	2	250	17	233

(資料19) 農作物の種類別収穫面積



(資料19)も、のびゆく狛江53年版からとりましたが、これをみても、稲・麦雑穀の大巾な減少にまず気付きますが、しかしどれをみても葉茎菜類以外は昭和35年に比べれば減少にあるといえますし、全体的にみれば農作物の収穫面積は減っているのです。行政機関の指導というよりは、なんらかの事情で宅地化せざるをえないことがあったのではないかと考えられます。私たちは狛江で農業を今もしておられる方に話をうかがってみました。



駒井の秋元清平さん（明治38年7月24日生）

新しく来た人のことを新家といい、ここ5年～10年の間に今ようになった気がする。

猪方に住んでる人を猪方モン、又そのあたりのことを指しても言うが、同様に駒井に住んでいる人達を駒井モンという。

田は3反から多い人で4反位を持ち、小作の方が多かった。1反から1石ずつ地主に出し、大体2俵半の割合になる。一反からとれるのは、多い時で5俵～7俵ぐらいだった。部落に30軒あったら、自給自足できたのは10軒ぐらいの割合だった。

菅原神社のところでは、大正の頃蓮を作っていた。低い所は沼っぽくて、二毛田（麦・米）は溝田で作っていたが、胸まで入るといようなことはなかった。泥田に入る時は素足で入り、モンペが流行ったのは第二次世界大戦の頃である。調布の入間では櫛を用いていた。「あしなが」は今は藁を持つ力がなくなったので作れないが、大山に行くときまだ作っている人がいる。

田植えの水加減は6月20日から月いっぱい30日までの間で、川向うの宿河原からウエット（植人）がくる。早乙女といって女の人が一日いくらでくる。4反くらいだと5人くらいでやり、三小の近所にもやってきた。向うの人の方が田植えの時期が早く、こっちの方には女の人がそんなにいなかったかして向うに行くことはなかった。

米を搗く時は、夜遅くなった時は茶碗のかけらとお米の色が同じになると良しとした。でも大体は糠通しなどを夜やり米は明るい時に搗いた。大正元年に小学校一年生になったが、六年生くらいの時に油や炭を持って水車小屋まで使いに行かされた。

白い御飯はだれか来た時に出るだけで、半われ飯 — 半分米・半分麦であった。米を搗くのは人力じん力からといって重くする時には、赤ん坊などをおぶってやった。戦争中は米1・麦9の割合だった。

ジューキミシン会社からの水でカドミウム米ができるようになって奨励金がでるようになって米づくりはやめた。

岩戸南の岩戸造園の秋元重光さん（明治33年4月19日生 85歳）

田は一毛作であり、今、教会の側の駐車場になっているあたりである。田の水は岩戸川を用い、岩戸川に排水していたが、今では道路になっている。岩戸は畑の方が多かったが、一反で2升半とれた。岩戸川は、泉龍寺の湧水と六郷用水が合流し、それが又、二本になって駒井の方へ一本、中心へ一本という具合に流れていた。田んぼの水は充分にあった。牛を使って作業をしていたが、市場へ野菜を作って出すのにも用いられた。

市場へは四輪をつけて行ったが、朝2時に暑い時でも寒い時でも行った。東横の所に“おげん”という市場があった。宮益坂の上に“新どんや”というのもあった。品物によっては五反田の大崎の市場へも行った。荷物だけ置いてくる時には、3時頃に帰ってきたが、肥やしを汲んでくると、暗くなっていた。市場へ行って整理して受け付けに出し6時～7時に売り出す。なす何杯、きゅう

り何杯、すいか何本と札を入れる。競と言って売り子がいって競る。自分で作った籠に入れて持っていくが、空いたら八百屋が置いていく。野菜は宮益の市場で百円とる人はめずらしい。牛車で10円～15円ぐらいにしかならない。トマト・キュウリ・スイカなど百円の仕切りをとる人は1人～2人。当時1坪130～150円。

柿も売っていた。手車引いて神田まで泊まりがけで出かけた。当時10～12才位の子供だった。父親について出かけた。柿(の枝)がおれるほどなり、岩戸・喜多見など土地がよかった。秋元家では10本ぐらいあった。今では鳥の餌か職人さんが帰ってきた時に食べるかになっている。禅寺丸といって大きくならず甘柿であった。

お爺さん夫婦・お父さん夫婦・自分達夫婦・女姉妹4人・男2人でやっていた。弟さんは小金井で旅館を出していたが、31歳の時、海軍で死んだ。女手が多かったので、野菜などやれた。蚕の時は人手を頼んだ。

カドミウムに米がなって食べられないとなって、小田急の住宅が建った。

湧水が出て流れていた。井戸水を2間(4m)掘れば、良い水が出た。井戸がえを一年に一回行なった。つるべでやっていたが、のちに手押しポンプでやっていた。

世田谷通りの二の橋の所に五尺の管が入ってから出なくなった。22尺の井戸はまだよく出ている。

猪方の清水さん(大正4年生)

二毛作である。一毛作の所もあったが、一毛田を高畝にして、菜種とか小麦を作っていた。一毛田の所は稲を刈ったらそのまま空いていた。三小のあたりは一毛田だった。水の無いところは二毛田だから11月の10日頃までに刈り、その後すぐ麦を蒔いた。麦を刈ったらすぐ田んぼにする。二毛作というのは菜種・キャベツなど他のもの・二毛田の場合は税金がついたが二毛作の所は水田でできない所だから、あまりとれないので税金もつかない。

手で大体やり、昭和25年頃、耕運機を共同で買い、あくる年、個人で買った。日にちがかちあって、溝田の所の深い所は小さい機械でないと入らない。水道道路の北の四メートル道路、学校の裏の方が深い。深さ40cmぐらい。膝の上ぐらい。普通15cmぐらいで20cmなんていうところはあまりない。

学校の庭から八幡の下までが深い。みずほ幼稚園の方まで深い。間鍋フラワーの裏のあたりから深い。円住院の北方が深い。水道道路より南は砂利で浅い。中学の庭の所は浅い所は3cmか4cm砂で、その下は砂利、板を張るほど深い所はなかった。二毛田みたいにどんどん植わるということはなく、半分しか仕事はなかった。岩戸のあたりは機械が入らず手でやっていた。浅い方は米がうまいといったがあまり浅すぎて米ができず、縄がなえなかった。種類も今と違って悪かった。

米と麦と野菜で収入を得たが、野菜が一番だった。この辺は三軒茶屋・目黒・五反田・大崎に行った。朝4時に起きて、昭和20年までやっていた。戦争がはじまって遠くに行けなくなって三軒茶屋に行って、そのうち銀行町の所に市場ができて、三叉路の所にでき、神田橋の所にでき、今の農協の所にでき、合併して世田谷に行って狛江になくなる。この辺から三軒茶屋・三鷹・調布・矢

野口・是政へ行った。リヤカーでみんないっちゃった。昭和15・6年頃より前まで、大崎に行き、それからだんだん近くにいく。東京の方は人口が多かったので、値段がちがったので遠くまで行った。昭和20年からあとは近い市場、終戦前、昭和18・9年頃わりあてがきた。50円なり100円なり先にわたされて、目方だけ出さなくっちゃならなかった。

子供の頃は米・麦しか作っていなかった。暮になると、東京へ行って餅を1日20俵ぐらい、搗き手2人、手足1人でやった。高等科の頃には、一緒に25日～31日までやった。(2月に正月をした。)

蚤、麦刈って、お茶摘、田植えと一緒にだったから大変だった。

13歳で男5人兄弟だった。母親がなくなって6年だったから高等2年までいったが、学校はずいぶん休んだ。2年半か1年間に1ヶ月ぐらい休んだ。早退き、お昼まで行って休むというのもしずいぶんやった。

昭和42年、水が枯れてしまった。二中の出来た年だ。中学ができて、水がいらなくなったと思ったら出なくなった。4・5年はモーターでやっていたが、昭和48年か9年に米が余って調整した。休耕田で8月1日に調査に来て補助金がでた。梅などを植えた。

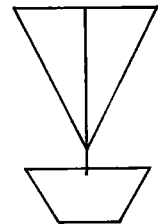
水がなくなり、田がなくなった。

中学の上方は多摩川の水を使っていた。栗原さんの所は多摩川である。今の文房具屋(東洋堂)のあるあたりに洗い場があった。中学が42年から始まったので水が充分にくると思っていたら、水が来なくなった。41年までは結構あった。中学を作った年になくなった。水は使わなくなるから余ると思ったけど来なくなった。

三小の北方に流れている堀と、こっちの川と二間ぐらいしか離れていないのでモーターで20人ぐらいで駒井の人と番をした。あげる番とかける人と分れてやった。4・5年やった。米が余って調整した年ぐらいまでやった。協力した人が、4・5人いて、次の年協力するといった時には、もう補助金はその人には出なくなった。休耕田というのはすぐ復活できるところが対象だから補助金も少ないのでしょう。

白幡神社の下のあたりは、田んぼで多摩川の水が入ってきていたが、入ってこなくなって、地主がワキの人(猪方以外の人の意味)だったので売られてしまった。水が入ってこなくなって、一反が2俵ぐらいになって、年貢米が一反一石とかだったのにあわないので地主が坪1円とか2円というので売った。多摩川の水位は昔は高かった。それが低くなった。少し堰をすると六郷用水に入ってきた。その堰にこの辺の人は皆働きの行った。直しては水を入れていた。あの時分、多摩川の砂利をとってもかまわなかった。六郷の方では水がなくて丸子からこっち二子多摩川、この辺でずいぶん採った。昔は帆掛というのがあって、良い砂利を採ってくる時は帆を揚げて、下りはとって六郷の方へ持っていった。

大正10年から震災ぐらいかの頃だ。多摩川に遊びに行くとよく見かけた。砂利穴があって死んだという人がある。それからだんだんやましくなると、かなり犠牲者もでた。大水が出ると、又埋まってしまう。



和泉の石井干城さん

飲み水は井戸を掘っていたが、川の水も飲んでいたが、小田急線ができた後は、川の水は飲まなくなつた。当時、野川は土のところを流れていたので、土が含まれていて飲めなかったが、多摩川は砂利のある所できれいで、タデ・なでしこ・月見草しかなく、雑草などは生活できなかった。石につく苔を食べる鮎もいたが、人間が住むようになって汚くなり、鮎もいなくなった。

昔は、勝手や風呂の水は30mから50m流して、いつのまにか泥に吸われてしまっていたが、人が多くなるにしたがって2~3m流して穴を掘り、吸い込み式にするようになったので、処理しきれないので深く掘る。すると砂利の所に出る。この砂利の所を通過して井戸に流れこみ、井戸が使えなくなっていった。この状態が昭和40年ぐらいに下水道ができるまで続いた。

関東大震災の時には、田んぼが地割れしたが、土手も地割れや段差ができる。

5年生の児童による聞き取り調査では

<おかあさんの話>

内藤 光恵

私の母が、狛江に来たときは、お店がなくて買い物が大変だったそうです。

<石井 干城さんの話>

沢田 明子

岩戸のへんでは、ほとんどの農家の人がカイコをかっていたそうです。そして、そのカイコのまゆを売った。まゆを生産したのは、大正の頃から昭和10年ころまでだったそうです。

<石井 干城さんの話>

鈴木 博仁

南の方は、昔は和泉にもあったけど、ナシ、ブドウ、モモなどを作っていた。今年あたりは、田にまいたイネが全然みのらなかったと言っていました。

ついに家が建てこんできたので、白菜やなにかを作っても、風とおしがよくないので、バイキンがふえて消毒しないとなくなるといふので、消毒するんだけどいい具合にできなかった。菜っばやなんかの種をまいても、それを食べてしまう小鳥類がふえてきた。そのおかげで、なんでも消毒しなけりゃ作れないようになってしまった。

なんで害虫がふえたかという、害虫は冬をこさなければ生きれない。畑だったら、かくれる場所がないので死んでしまう。しかし、人間がよけい住んでいると、縁の下やどぶのはじに生きているから、冬を越して春になると出てきて卵を産み、ふえていったそうです。いま、公園なんかに行くと、松の木のみにわらが巻いてある。そのわらをかくれがに、冬になると害虫が入る。春の初めごろにそのわらをとって、燃やしてしまうそうです。害虫をふやさないためだそうです。

<おばあちゃんの話>

西山 雅己

多摩川は水がきれいだったから、6月1日はアユの禁漁がとけて、つり人がいっぱいきた。

アユがピチピチはね、つり人が土手をうめるようにきたという。

<お母さんの話>

古谷 有起

昔の狛江の特産物はナシだったそうで、一面ナシ畑があったようです。今でも少しだけど、ナシ畑が

残っています。

<岩戸センターの本>

六角 耕治

狛江市六郷用水取り入れ口の近くに、歌碑「玉川の碑」があります。碑面には、

たまがわに さらすてつくり さらさらに  
なにそこのこの こことかなしき

という、万葉集・巻14の東歌が刻まれています。万葉の昔、この辺一帯に麻を栽培して布作りが盛んでした。近くにある調布、布田、染地などはいずれも布にかかわりのある地名であり、昔のすぐれた特産地であったことから生まれたものです。

ぼくはこれだけ読んだだけでも、なんだか狛江のことを少しくわしくなった感じです。

<石井 千城>

鈴木 博仁

昔はどの家にも井戸が掘ってあって、わずか2mぐらい掘れば水がでた。その水でお風呂をわかしたり、すいじに使ったり生活の水にしていた。

ところが、下水道がなかった当時は人がふえると同時に、多くの排水を吸い込みなくなって、吸い込みの穴を深く掘ったので、その洗濯した水などがジャリ層へ入るようになった。それを隣でくみあげて飲んでいるなんて時期もあった。不衛生だから、上水道がつくられた。

古代から続いてきた農業による主たる生活を支える狛江の住民の生活も、このように追ってくと、農業などの第一次産業から第二次産業・第三次産業へと変わっていきました。

- ① 明治維新以来の富国強兵政策による工業立国
- ② 自然を相手にする不安定な経済状態より年間を通しての安定した生計
- ③ 戦争によって軍需産業のための工場設置
- ④ 多摩川の水を飲用水として使用することにより、河口までの水量が大巾に減少

などに加えて、狛江は、東京都心部、山手線の新宿駅へ小田急線で30分もかからないという地の利もあって、急激にベッドタウン化したのではないのでしょうか。前項をみても、河口から除々に工場化、住宅地化が何十年かにわたって進んできたことがわかります。狛江では住宅ができ、湧水が都市化によって下水道工事後、道をたたれるということなどもあり、又、工場廃水によって農業用水がカドミウムに汚染されたという決定的なこともあり、ベッドタウン化は急速に進んだと考えられます。猪方などは、江戸時代より氾濫に続く氾濫で水田にするのは毎回大変なことだったと思うのです。田畑よりは宅地にしてしまったほうが、持ち主の方もやりやすかったのではないのでしょうか。特に自分ではこの土地に住んでいない人、耕やしていない人はそういうふうと考えられたことでしょうか。自分で耕やし続けてきた方々は手放しがたかったと思いますが、水が出てこなくなったりして、やめざるをえないところに追いこまれていったと思います。

(8) 六郷用水の埋立てと他の用水

用水が埋め立てられていったり下水道にとかわっていったのは、

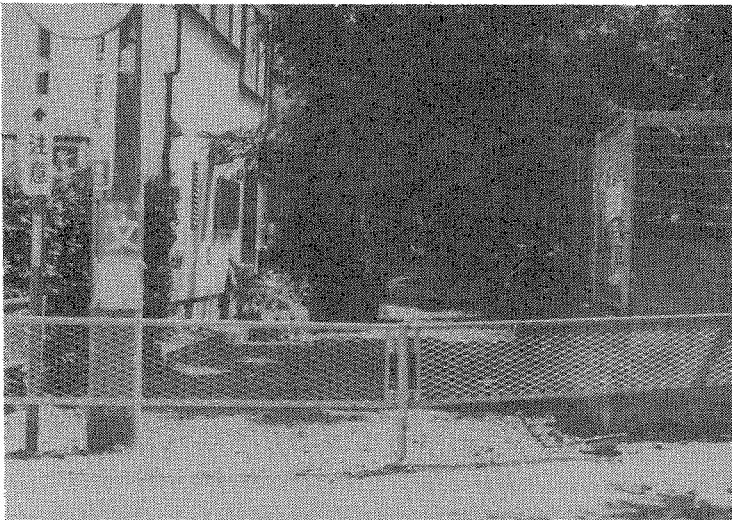
- ① 多摩川の水の高さが低くなった。
- ② 水が枯れた。
- ③ 人口が増え都市化された。
- ④ 人手がなくなった。
- ⑤ 工場ができ、カドミウム米ができた。
- ⑥ 日本全体として米があまって休耕田になった。

というようなことが、今までのことから理解できます。

狛江市史によれば

多摩川下流地域の宅地化が進み、灌漑用水の必要がなくなったことと、多摩川砂利の採掘と流量の減少による水位の低下から六郷用水に流入する水量も少なくなり、六郷用水としての重要性はなくなった。そこで昭和42年、六郷用水は町の下水道計画に合わせて、上を道路、下を下水道という形で埋立てが行われた。

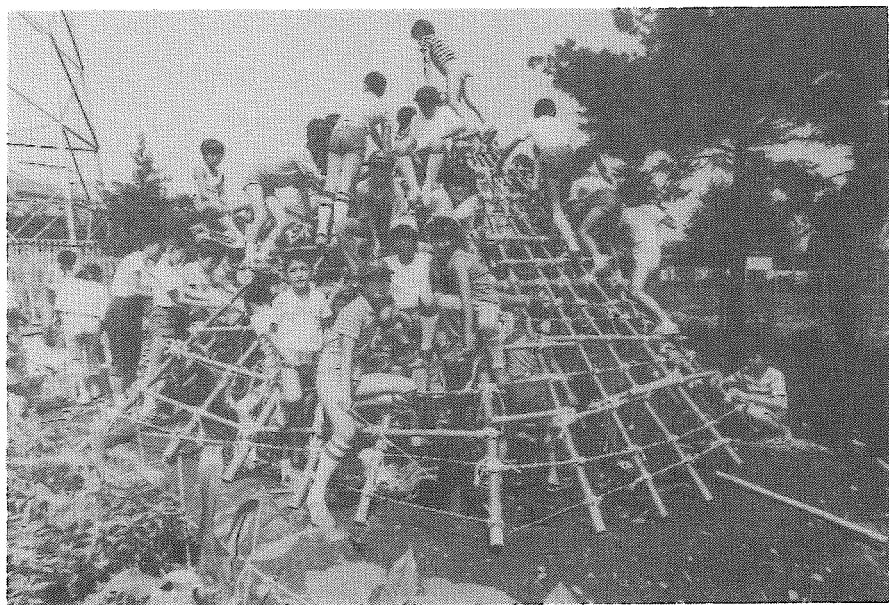
とあります。六郷用水は私たちの眼の前から昔の形としては消え、今では道路の一部として端の方であったり、一の橋・二の橋という地名として残ったりしています。三小の側の用水跡も、私が転任してきて2・3年たった頃に次々と遊歩道などになっていきました。



(三小の学区域にわずかに残る用水跡)

#### Ⅳ. 用水と共に変化していったこと

(子供との学習をおりませながら)



豎穴住居作り(ミゾエ企画撮影)

## Ⅳ. 用水と共に変化していったこと

用水が枯れていくに従い狛江に住み続けた人々の生活も激しく変化していったようです。私たちが聞いた話のうちから、いくつかを選び出して書いてみます。

### (1) 水とのかかわり

狛江の中を用水、水路として流れていた川は、全長5,500m、昭和34年狛江駅前ロータリーの道路工事がはじまり、その後下水道工事等により用水、水路は、昭和61年現在すべて埋られました。狛江第三小学校学区を流れていた大川（泉龍寺の湧水と六郷用水が合流、駒井の方に一本、中心へ一本流れていた。）は、現在1,610mの岩戸遊歩道となっています。（狛江市役所談）

これら用水、水路に水が流れていた頃は、三小学区域は、見渡すかぎり水田と田でありました。湧水も数多く、水を利用して、農村としての営みがあったのです。

#### 水車（水車小屋）

岩戸児童館近くにあった。岩戸の共同のもので、番板に利用する人の名前が書いてありました。米・麦・きびをついたとのこと。

（このあたりにあつたと考えられる。）



#### — 岩戸の秋元重光さんの話 —

共同のもので水車小屋は、うちの田んぼにあったんです。岩戸の共同で順番にまわっていて、米ついたり、麦ついたりみんな交代でやったんです。そばに千坪位の池があったんです。そこに用水を入れてそのあまりは、大川（岩戸川）に落としてやったんです。池は石倉さんの畑の下の画で今全部住宅になっちゃったんです。児童館の並びぐらいの所です。児童館に行かないもうちょっと東に水車小屋に行く道路を作ってやったんですよ。岩戸で共同で持っていた番板ってのがあってね、名前が順々に書いてあってね、20人位じゃなかったかな。岩戸じゅうだったからね、岩戸南、岩戸北、岩戸じゅうの農家で持っていましたからね。搗く順は板の名前順、朝交代、一晩中やっていた。まる一日、夜も搗いたわけです。わたしは若いうち付きっきりでなくてもいいけどね、行っちゃ見なくちゃストップしちゃうからね。



水は泉龍寺からきて落とすようにしてたんだからね。六郷の用水はつかえない、いくらか入ってたけどほしい泉龍寺の水だった。

食事はうちあたりは近かったからね、自分の家で食べた。遠い人は夜なんかは弁当持ったりしましたね。寒い時はアンカみたいのを持ってね。明かりはローソク、提灯。自分の家で食べる分だけ搗いたんです。米でも麦でもきびだって、そうゆうものをみんな搗いたんですよ。

## 田

田んぼの水入れは朝あける。そしてかかった（水が入った）じぶんにみのくち（水口）を塞ぐ。泥とか板で塞いだ。巾は広くて一尺。川の取り入れ口を大関、畑に入れる小さい所をみのくちといった。このみのくちは、どじょう川（水車堀、児童館裏手）にまだ残っている。

### 一 駒井の秋元清平さんのお話 一

水は三小プール内のあたりで、南かたと北かたに分離していた。うちあたりは北かた、円住院のそばに流れるのが南かた。台風の際は稲をあらった。（稲の上まで水が来た。）再々あるよ。漬っている水でポチャポチャあらったよ。田んぼ（二反）は、馬力でやった。馬は借りた。千葉の方をやって来て、むこう（カサイ）を夜中に出て来た。

久野さんが馬喰で、ほうぼうに貸したんだよ。カサイをやっちゃって（仕上げて）それからこの辺をやって、この上流の拝島、拝島あたりはおそいんだよ。田んぼ以外この辺はなんにも作らない。麦なら麦だけ、最近になってアブラナを少し作った。

田植えの時は、宿河原から田植えに来た。女の人が半分以上で早苗娘と呼んだ。4反を5人位でやったよ。

## 洗い場

個人のもので共同のものがあつた。共同のものは、岩戸児童館近く、狛江第二中学近くなど（資料20）のように三ヶ所。洗い場は、湧水も湧いていたので飲み水、米とぎ、野菜あらい、洗たくなどに使つた。

## 魚つり

大川やどじょう川、水路もたくさんあつたので、子供はそこで魚（どじょう）を採つた。それが夕飯のおかずにもなつた。しじみの採れるところもあつた。家の近くに用水、水路と川が従横に流れていたのだから、多摩川に行くよりも、これらの川で子供は遊んだ。このころの子供は、家の手伝いがあつたのだから遠くへは行かず、魚、しじみとりなど遊びも仕事を兼ねていたと考えていいだろう。

## 橋

六郷用水は武蔵野台地の多摩川沿いの洪積層を切り開いた人工掘りであつた。当時の狛江は六郷用水流域沿には直接水田が開かれている所は少なく、田中池、泉龍寺弁財天池、揚辻稲荷池等の豊富なわき水を利用して水田が開けていた。わき水を利用した水田の水不足対策として六郷用水からの取り入れ口が3ヶ所（右岸、多摩川側）設けられここからの水が水路へ流れ込み、不足の水を補いさらに新田の開発がなされた。六郷用水とこれら無数に枝分かれした水路にはたくさんの橋がかけられた。六郷用水にかけられた橋は旅人の往来もあり他の村とのつながりを持ち、水路にかけられた橋は無名の橋が多く人

々の日々の生活に大切な役割をはたした。

現在はこれらの用水，水路も埋たてられ交差点名として名前を留めている所が3ヶ所（田中橋，一の橋，二の橋）あるのみである。

（資料20）洗い場と橋の説明

- （A水門） 多摩川から流れ込む水の調節
- （B取り入れ口） 猪方用水に流れ込む
- （C取り入れ口） 駄倉を通り清水川に合流し大川（岩戸川）へ
- （D取り入れ口） 内北谷を通り大川（岩戸川）へ
- （E水車） 六郷用水の上を通った彦根堀を利用
- （F水車） 泉龍寺弁財天池，揚辻稻荷の水を利用（六郷用水の水も）

1. 田中橋 小字名を橋名としたもの。橋柱が残っている。上流に取り入れ口B
2. 駄倉橋 アーチ型の橋で小字名を橋名とした。橋柱が残っている。上流に取り入れ口C。
3. 岩戸橋 板橋。下流に取り入れ口D
4. 一の橋 石橋。土地の人は土橋と呼んでいた。交差点の隅に供養塔があり道しるべもかねていた。供養塔には、北<sup>はりの内</sup>高井戸道，東<sup>六々</sup>江戸道南家村道とあり文政6年のものである。はりの内は杉並区堀の内にある妙法寺参り，高井戸は甲州街道高井戸宿であろう。
5. 二の橋 板橋。けやきの丸太を二本架け板を置いたもの。
  - 1～5は六郷用水にかかっていた古くからの橋である。
6. 水道橋 都道（世田谷通り）が出来てからの橋
7. 湘南橋 昭和12年日本フィルモン会社（フィルモン橋）ができ戦争中は湘南製作所という軍需工場になった。相之原（現岩戸南3丁目）にはその社宅があり岩戸の洗場（地図b）で社宅の人達も洗たくをしたそう。
8. 神田橋 板橋
  - ◎6，7，六郷用水にかかっていた橋。1～5より新しい橋である。この他に田中橋と駄倉橋の間に井上家個人の橋，二の橋下流に西山家の橋があった。
9. 境橋 丸木橋。岩戸と和泉の境にあったのでこう呼んだ。
10. 二つ橋 駒井の人は二つ橋。岩戸の人は眼鏡橋と呼んだ。橋が二重になっていたとも言われる。ここは水の流れが二本になっていた。現在水路は埋められているが二本の流れのあとは，はっきりとわかる。
11. 大川橋 大川（岩戸川）にかかる橋。橋下はわき水があり洗場（地図b）となっていた。この流れが世田谷宇奈根まで続くが狛江と世田谷の境には鎌倉橋（慶元寺の下）があった。
12. どじょう橋 水車堀にかかる橋，すぐそばに水車があり現在堀がから堀として残っている。

◎網の目のように流れていた水路には8～12の他に板を渡しただけの無名の橋が数多くあった。

a, b, c 洗い場

a. 清水川, b. 大川, c. 猪方用水堀の水路にあり三ヶ所とも豊富なわき水がわいていた。a. c. は水路が埋められてはいるがそれらしき跡地はある。b は下水道工事で10年前にわずかにわいていた水もかれ, あたりは整備された道路となりその場所は跡かたもない。

子供たちに橋や川について話をさせると多摩川の話になる。狛江に六郷用水やたくさんの水路があったことなど知る子供は少ない。ましてやわき水がわいていて, ほたるが飛びしじみをとれたことなどはどこか遠い田舎のことに思わらしい。ただ三小の子供たちが通る道に一の橋, 二の橋という交差点があり, 子供は橋がないのにどうして一の橋, 二の橋なのだろうと疑問を持つ。交差点にある二つの橋名が狛江の昔, 用水, 水路を子供たちが知る糸口になっている。

321

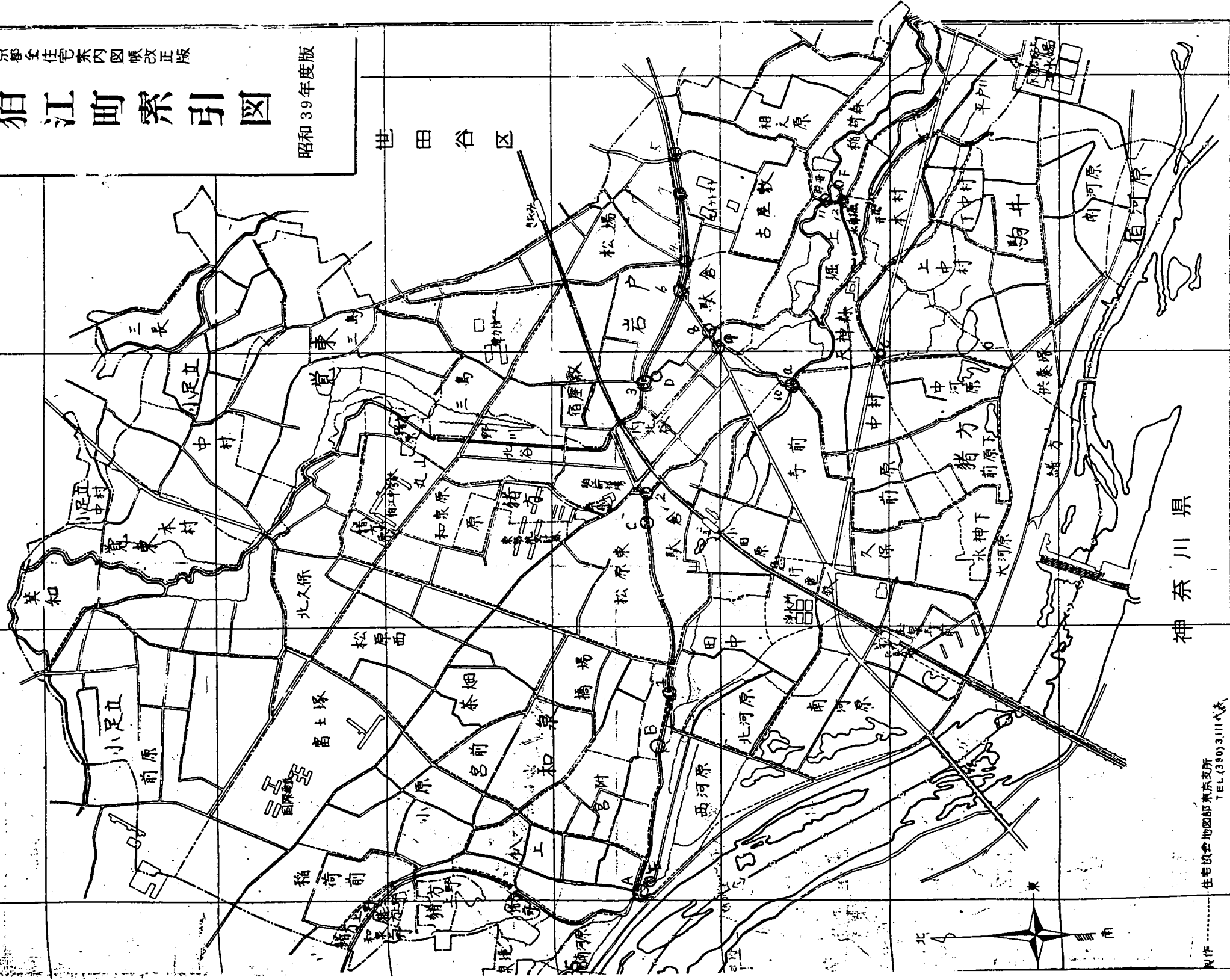
調布市

東京都全住宅系内図帳改正版

# 狛江町索引図

昭和39年度版

世田谷区



神奈川県

住吉堂地図部東京支所  
TEL.(03)5033114代  
製作

## (2) 養 蚕

狛江市史によれば、多摩郡というのは、小川(乎加波)・川口(加波久知)・小楊(乎や木)・小野(乎乃)・新田(爾布田)・小島(乎之万)・海田(安万田)・石津(伊之都)・狛江(古万江)・勢多というように平安時代の日本最古の百科辞書“倭名類聚抄”に挙げられ、「狛江郷」と呼ばれる行政単位がすでにあったそうです。「狛江郷」というのは現在の狛江市・調布市・三鷹市・武蔵野市の一部を含む3~4里ぐらいの範囲の行政単位だったろうと推定されるそうです。

とすると、調布市と布とは関係ありそうです。狛江市のすぐ隣の調布市染地—これは染め物に関係がありそうですし、調布そのものが、調(みつぎもの)の布の産地ということだと「地名の語源」(角川書店)にのっています。

「のびゆく狛江」には、カラムシが多くとれる多摩川流域の村々では、調としての布を朝廷に納めていた。これが「みつぎの布」すなわち「調布」である。このカラムシの布を一般に「麻」といったところから、このあたりを麻の多いところ「多麻」と呼ぶようになったともいう。

カラムシは普通山野に自生している。それを刈りとり、皮をはぎ、布に絡む。織った布は多摩川の流れでさらすが、繊維がかたいため板(きぬた)のうえであたいてやわらかくする。多摩川の流れにつかり、布ざらしをしている娘をよんだ万葉集の歌碑が、多摩川にほど近い民家の庭続きに建っている。

「多麻河泊爾 左良須互久久利 佐良左良爾奈仁曾許能兒能 已許太可奈之伎」一首の意味は「多摩川にさらす手づくりの布のように、さらにさらにどうしてこの娘がこんなにかわいいのかしら」と書かれています。

私達はカラムシを捜してみました。似たような葉は多摩川にありましたが、これがカラムシであるとは断定できませんでした。麻縄を使うことがありましたが、今は、アフリカからくるサイザル縄であると業者の人から教えられました。狛江の場合、いつ頃まで麻がつくられ、又、いつ絹が出てきたのかは、まだ私達にはわかりません。狛江市史の江戸時代の初めの年貢をみても、麻や絹は書かれていません。畑という中に麻畑や桑畑が含まれていたのかもわかりません。

私達にわかっているのは、大正時代には絹糸を作るために繭を購入する仲買人の様な仕事をしておられる方がいたことと、桑の木が畑の境に今も所々みられること、聞きとり調査をしていく中で、蚕を飼われた話が出てくること等から近年まである時期養蚕をしていたことがわかります。狛江市史によると、大正ぐらいから昭和にかけての養蚕取引の帳簿が残っているようです。

朝日新聞東京本社社会部・「多摩の百年下」絹の道の中に — 「絹」は太平洋戦争にいたるまで、



からむし *Boehmeria nipponica* 一名マオという。葉の白い卵形の葉を互生し、茎から繊維をとる多年草。イラクサ科。本州以南および中国に広く分布し、また畑に栽培される。茎は群出し、直立して高さ1.5mあまりになる。葉は上面がざらつき、長さ10cmばかり、長い柄で互生する。8~9月ころ葉腋(ようえき)から花穂を出し、小さい花が密生して、上のほうには淡緑色の雌花、下のほうには黄白色の雄花がつく。茎からじょうぶな繊維がとれ、織物に用いられる。繊維は水に強いので、船舶用のロープ、漁網、消火ホースなどに使われる。

(奥山 春季)

平凡社  
「世界大百科事典」  
より

(資料17)

わが国輸出産業の花形として「大日本帝国」を支えてきた。— と書かれています。

先日、厚木市に行ったが、桑畑が今も所々に残っています。多分、狛江市にも、ここ百年前位には、桑畑が沢山みられたのではないだろうか。太平洋戦争で食糧難・燃料不足の両方で伐採されていったことが考えられます。

同じ本によれば、

4月、村を流れる川の水はまだ冷たい。その水を使って養蚕農家では、蚕室を大掃除、消毒し、いとだて、網、蚕座などの道具洗いにひと月を費やす。多摩川べりでは干したいとだてや網が千畳敷きのように並んだ。種屋が、蛾の産みつけた卵(種という)を売りにきた。それが孵化する5月養蚕が始まる。孵化したばかりの小さな蚕(毛蚕)を、細かく刻んだ桑の葉といっしょに、3・4本束ねた柔らかい鳥の羽で、そっと掃きながら蚕座に移す。蚕が大きくなるにつれ、蚕を置く枠の数がふえ、桑の量もぐんぐん多くなる。二階を蚕室にする家が多かったが、やがて家中が、桑や蚕で占領され、寝る場所にもこと欠く状態になる。

蚕は、眠って脱皮しながら大きくなる。それを4回繰り返す。4歳の種から4貫の生繭をとるのに1齡のときは8坪(養蚕の1坪は30cm×30cm)の広さで足りるが5歳の時は77坪の場所を必要とした。1日に10回も給桑することもあった。

絹織物1反をつくるには、三千匹の蚕が必要だった。与える桑は実に約110kgにもものぼった。と、書かれています。

明治40年11月26日生れの岩戸北の西山さんは、こう語られます。

大正の初め頃、絹糸の縫い糸を作った。狛江にも、大部養蚕家がいる、長野県の岡谷製糸の代行をしていて、向うのお金をもらって買って乾燥をして、ほうぼうの製糸場へ出した。乾燥室から火が出て3年生の時に焼けて、物置きで生活して小学校に通った。繭を買ったり売ったりしているうちに、縫い糸を作るようになった。幼稚な燃り方で糸を50m位引張って片方ずつ燃り、又燃るという感じで縫い糸を作っていた。その頃は、横浜から糸の原料を仕入れ製品にした。東京の浅草とか神田の間屋さんへ卸した。糸を燃るのは、男の人が3~4人、機械を入れてから(昭和14・5年)女工さんがきた。

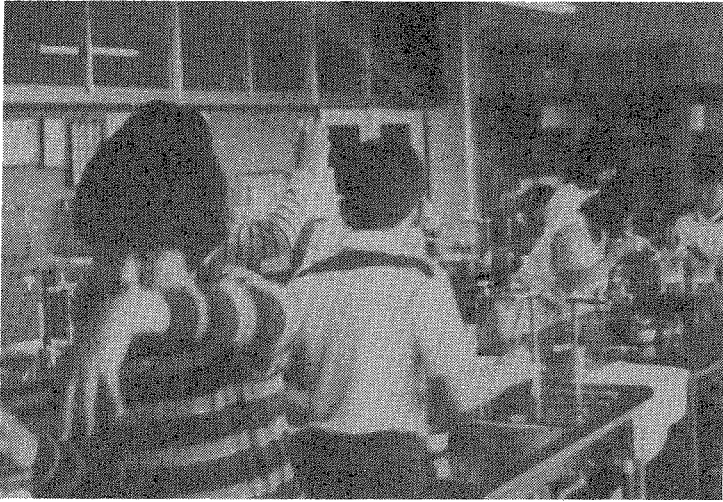
戦争当時は海軍の靴を縫う糸をおっていた。戦争が終わっても、やっていたが、紡績会社の大きいにはやはりかなわなくなってやめた。

蚕の仲買は親父の代からやりました。商売をやるので奥の方へいたのではなんだから、越そうよというので世田谷通りの方へ越して来ました。狛江の他の桑を知っている人達からの蚕を、お寺を借りて、ほうぼうへ繭を見に行き、目方をかけて、あれしました。宇奈根あたりからののは、ほとんど籠に入れて荷車に積んで持ってきました。蚕を見るのは親父が判断しましたが、大体持ってみて何奴デールというのは、一貫目でわかっていないと値段をつけられませんでした。

家の建物によって湿気の少ない家の繭がよかった。口から糸を出してやるので、湿気っていると、糸にヘルソンという粘々したものがあるが、乾かないうちにお互にくっついてしょうがないので糸を取る時切れてしまう。節をみつけるとき無駄ができてしまう。陽気のいい時、繭ができたほうがいいみたいだった。

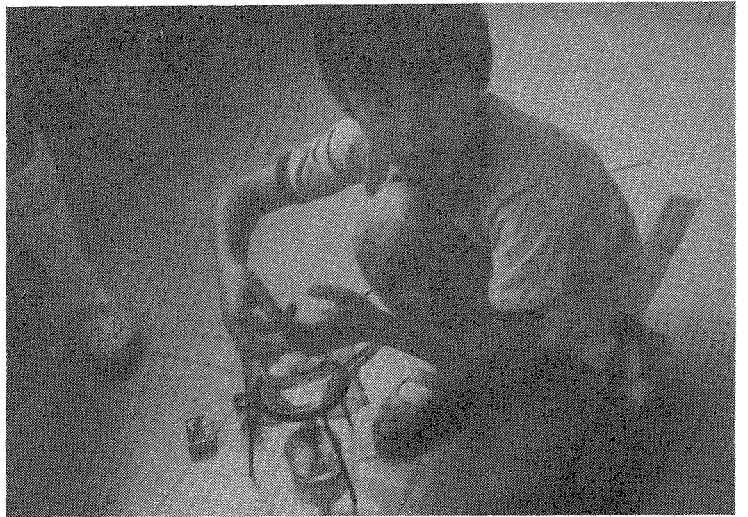
蚕は少し手伝った。農家の方が持ってきたのを目方かけたりした。兄貴がいたのでわずかししか手伝っていない。16の頃まで田んぼを少しやったりしたが、親戚の人の進めで三軒茶屋の炭屋へ奉行に行った。その後、独立して炭屋になり、今はガソリンスタンドを営んでいる。

(繭から糸をとる)



(繭から糸をとる)

(繭から糸をとる)



## 西山さんの本家の話

生糸を撚り上げていた工場を近年までやっていたが、染色は委託していた。何故、絹糸を扱うかという、繭の仲買人をしていた。副業に養蚕をしていた。繭を集めてきて撚りをかけて又巻きとる。

25間(40m)位張って轆轤ろくろというのにかけて、綱を引張って行って「紡錘つむぎ」というのに引掛けて糸が撚れる。逆撚りなどして大きな枠に巻き取っていたが、雨が降っては駄目、風が吹いては駄目ということで、機械が入った。

1985年3月1日、私たちが昨年8月にお訪ねした西山さんの工場が、そろそろこわされるらしいと聞き、勉強のメドもついたので1組と一緒に見学に行きました。

大正15年から昭和58年9月まで絹糸の仕事をなさり、古い機械は昭和20年から使い続けたこと、絹糸を仕入れてきて適当な太さにしてよりをかけること、糸によりをかけることで着物をぬう糸をつくること、ミシンにかけやすくなり、太さが標準化してけばだたなくなること、などを説明してくださいました。

上のボビンはゆっくり、下のスピンドルは早く回ることによって、まきとられながら、よりがかかること、愛知県の一宮市で機械を作られたといわれて、もう動いてはいませんが、見学させていただきました。子供の感想を読んで、やはり実物をみせることは大事だと感じられました。

### 西山撚糸工場見学の感想

(85.3.1)

伊藤敬子 私が見てびっくりしたのは、すごく大きい機械でした。一人でどうするののかも見たかったです。なんで今は機械を動かさないんですか。

古宮大輔 何人の人をやとうのか聞いてみたかった。糸は1日にどれだけできるのかなあと思った。

西山雅己 ぼくのしんせきの家なのにはいったことがなく、行ったらとてもおもしろかった。この棒は1933年のだから昭和5年。今から55年も前のものがあるなんて、知らなかった。

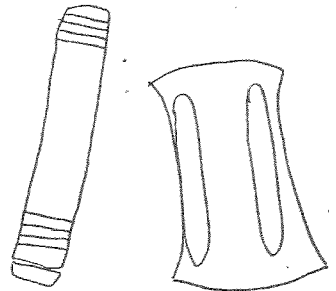
坂井まり たくさん機械があって、とてもおもしろかった。動いているところを見られたら、もっとおもしろかったらと思ういました。

山下智昭 楽しかった。動いているところを見たかった。

高橋大成 あんな機械があるのだから、人もたくさんいたのかなあ。

小森美千代 もし、動いているのを見せてもらえたら、どんな音がするのかが聞いてみたかった。お話を聞いたけど、やっぱりつむぐ腕前がどうなのかみてみたい。一番はじめお金はどれくらいかけて工場を作ったのか？

信田祐子 今日は勉強してとてもおもしろかった。もし、今動いていたらみたかったな。



カット 沢田



## 駒井の秋元さんの話

腐れ蚕が出て困ったが、桑田が多かった。震災の時、20歳で桑をやっていた。晩秋によくなかった。市会議員をしている間鍋さんがこの辺では一番遅くまでやっていた。

## 岩戸造園の秋元重光さん

終戦の時までやっていた。警戒警報の時も、ろうそくで桑をやっていた。繭のまま売っちゃい、春一回、秋二回出していた。一番とれた時は、115貫で（他の家では31～40貫しかとれなかった。）1貫めは値がよくても1円30銭～50銭、小金井の方から製糸家が買いに来た。仲介の人が買いにきていて相場があって、いい繭はいくら、悪い繭はいくらと決まっていた、ひとつの繭で糸が沢山出ると出ないのがある。

秋元さんちでは、いい場所に桑を作っていたので、一番いい値で売れた。

1985年、6年生になった子供達は、歴史を学ぶ中で、体験できそうなことはやってみたくてつかを並べました。その中に蚕を飼って絹糸をとり、できれば糸を燃やしてみるものがあげられました。

## <蚕>

4月半ば、昨年度の蚕が生まれてしまったが桑の葉は1mm位の芽が出ているだけである。「学校でもあるよ」と持ってきてくれたのがあじさいの芽であったりして全滅。農林水産省に問い合わせると、分けてくださるとのことで、5月初めに到着。5月半ばに生まれ、1ヶ月あまり子供達は毎日楽しみに暮らしていたようで、糸をとる時には泣いた子も出た。糸をとり出し、それをちっちゃな織り機にかけた。同時に綿の木も一人一鉢で栽培しだした。

## <カイコを育てる>

### ◎小林 哲弥

5月1日、カイコのたまごがきた。1ミリあるかないかの、小さいかわいたまごだ。色は黒い。かたまりがついた紙が二枚まわされた。みんな「ちっちゃいなあ」とか「かわいい たまご」などと言っている。それから11日間、まい朝学校へきたら卵を観察した。

5月11日の朝、とうとう無数の卵から蚕の幼虫が生まれた。

からは白かった。

ほんとに、小さく、かわいい。

この小さい虫が、何倍も大きくなるとは思えなかった。少しのかいこは、みんなにまわされた。「気をつける」「手の油がつく」とだれかが言った。真剣に回した。落とさないように。次の日、ほとんどの蚕はかえった。

まわりには、もう桑の葉がそえてある。4月に先生が持ってきたかいこは生まれたがまだ「葉」が出て

いないので、おしくも死んでしまった。でも、こんかいは、桑の葉は出ていて、その不自由はない。もうまえの日のかいこは、きざんだ「葉」を食べていた。蚕は少し、きょろきょろしていた。まるで尺取り虫みたいだった。

次の日は、全部生まれた。でも、卵の中で死んだものもあったようだ。ぽつんと黒く残っている。もうみんな、がつがつ桑の葉を食べている。赤ちゃんかいこは、何人かに十びきくらいづつくばった。葉をかえる時、めだたないので、葉といっしょにすてかねなかった。そのため、げんじゅうにさがした。蚕はどんどん成長を続けた。一週間もたつと、捨てる心配はもうなくなった。はっばもたくさん食べるようになった。みるみるうちに大きくなった。

でも、成長不良していて、小さいのもいた。理科の時間、かいこをかいた。今、思い出すとなつかしい。ある朝、何匹かが糸を出していた。でもまゆを作る光景はなかった。先生は、まゆべやを作った。蚕は、朝ごとにかわっていった。首ふり運動をはじめた。その蚕は、べつの箱に入れた。はっばも少し入れた。糸をはき、まわりにわくを作りはじめた。はげしい動きだった。中のわくも作り、できたものも、何かあった。

ある朝、先生が日光へ行った日、ぼくは蚕を見て、びっくりした。ひさんな姿だった。黄色いものをはき、ちぢんで死んでいるものもいた。ほかの箱のものは、ふつうだった。たぶん水だと思った。

#### ◎谷口 泰道

5月1日、卵が6年3組にきた。最初、白くて小っちゃくて生まれるのを、みんなまっていた。何日かして一部分の卵が黒っぽくなってきた。

みんな楽しそうだ。クラス中で回した。

5月11日、はやいかいこが生まれた。でもごまぐらいでよくわからない。みんな喜んだ。大体は5月12日にかえった。

桑をあげるとみんな「クチャクチャクチャクチャ」と食べる。葉っぱにどんどん穴があく。そうして、みんな大きくなっていく。先生は、いつもかいこのえさをとりかえる。その時、かいこもいっしょに捨てそうだ。そうしてようやく白っぽくなった。白っぽくなったといっても、まだ小さい。だからまだかいこをさわってはいけない。「早く大きくなりなかなあ。」とみんないう。

そのうち、かいこは、すぐ桑を食べてしまう。桑がたりない。先生は、すぐとってきてくれる。その時は、みんなやさしかった。まだ、さわっちゃいけないと言っているのにさわる人がでてきた。

でも、その人は好きだから、さわっているのだろうと思う。

だんだん、みんな興味が出てきた。

月曜日の朝、来るのが楽しくなった。それは、かいこの大きさ、それが目的です。

かいこは、2日の間にどれだけ大きくなるか。

この後、野麦峠のビデオをみましたが、蚕の煮た臭のわかっている子供達は自分達のこのようにみただけです。でも記録を残して置きませんでしたので、もう少し続きをのせます。

◎八幡 慎一

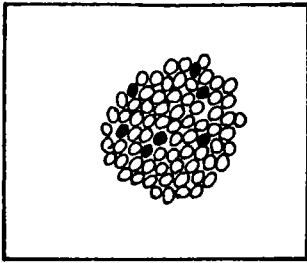
みんながかいこのまゆから、糸を取ってみたいということで、先生が農林水産省、蚕糸試験所に手紙を出したら、5月1日頃、蚕の卵がおくってきました。

はやいのは、5月11日ごろ、でも、大体12日にかえりました。卵は1ミリくらい。ふかすると体長4~5mmくらいの毛虫みたいのが生まれました。

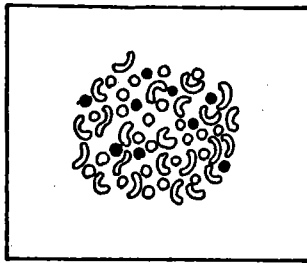
最初は葉をよくかわかして小さくちぎってやっていました。あまりにも小さいせいか大きくなるまで影などにいるとみわけがつきません。小さいわりにはよく食べてまたよくふんをします。ふんはとても小さくてある場所に固まると粉みたいでした。日がたつにつれて食べる量もふえてようやく葉とみわけがつくようになりました。でも、そのころはまだ黒くて白い体ではありませんでした。だっ皮したあとは、なにかの死がしみたく黒いのがぺっちゃんこになっていました。

それから一週間近くぼくは水ぼうそうだったのでわかりません。一週間くらいして学校に来て蚕をみたら、体長が5cmぐらいになり、白い体で肉がいっぱいついていました。約10日の間に10倍近く大きくなったことになります。となりの箱はもうまゆになった蚕が入っていました。へえーと思いました。食よくがなくなるという感じでした。もうこのころは、葉をちぎって入れていません。よくかわかしたのをどぼっと入れるだけでした。日のたつにつれてもようもはっきりしてめずおすも見分けられました。めずはもようなし。おすはもようありです。しばらくして、ききんが起こりました。だれかが水を上からかけたのです。またふんもたまっていたので暑い日だったからふんがくさってぼうちょうして、かいは黄色の液を出して体がしばみ体全体までが黄色になりました。おそろしいものです。かいはこの病気はいっしゅんのうちにして約 $\frac{2}{3}$ ぐらいまで病気がうつってしまい、じょうぶなのは少なく $\frac{1}{3}$ ぐらい。あとは全部がぴんぴんしているうちにあげた友達のだけでした。それから少ししてめずらしいことが起きました。それは病気の方が早くまゆを作りはじめたのです。白い方はまた葉を食べているのに不思議に思いました。口から白い糸を出してどんどんまゆを作り始めていました。大体がまゆになって少しすると、最初の方にまゆになった蚕はもうかえってしまいました。又、少ししてかえった蚕が七ひきくらいになったじてんでようやくまゆをとることになった。まゆは約百個くらいあり、1人2個でお守り1個、糸をとるほう1個でした。まずぐつぐつにます。少し煮て中身が完ぜんに死んだらお守りの方は取ってかわかし糸を取るほうはピンセットで糸を取りはじめます。一本一本でいねいに出して、わりばしまたは紙にまきつけることは意外にたいへんなものです。すぐに切れたりこんがらかったりして苦勞します。

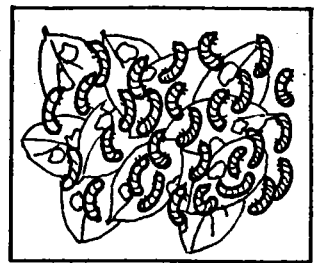
ぼくの班はうまく1本をとることが出来ずに1個のまゆから5本くらい出してすごく太くなります。どんどんまきつけてどんどんこどもゆがへってしまいました。でも3~4時間近く時間がかかります。1個のまゆから1本の糸を出すようになるとなかなかへりません。蚕のかえった方はこうびしはじめてしまいました。かいは1個からすごい糸を出すのでびっくりしました。



とこざとこざ黒い。

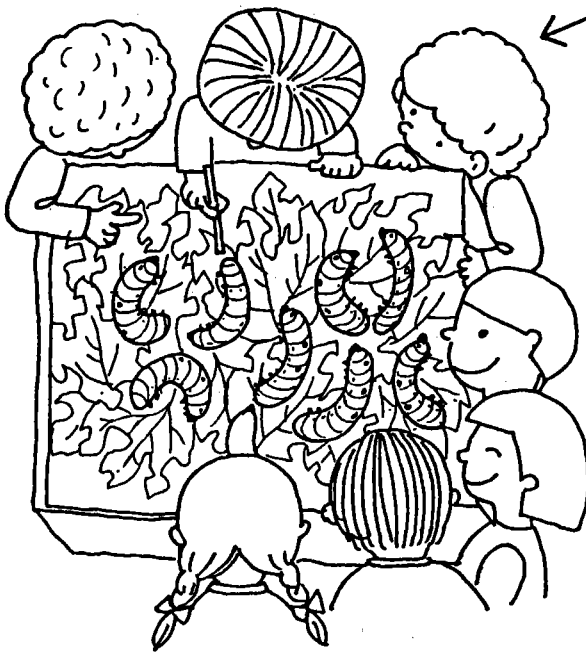


だいたいふかした。



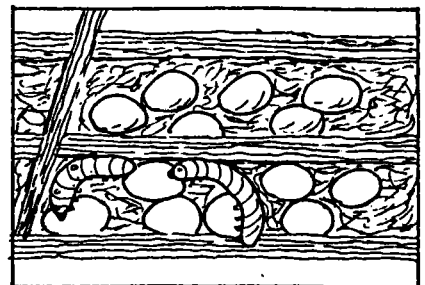
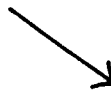
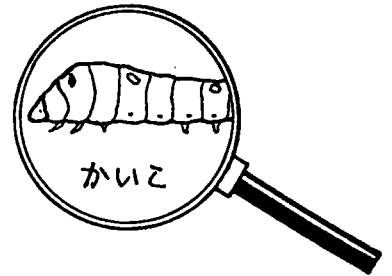
みんなふかした。

みんな葉をよけたべる。



みんなで観察をする。  
えさをやり別し……  
つついたりしてみた。

あーあたのしかつた。



まゆをとった。  
みんなにまゆをあげた。

1986年、この前年の種を冷蔵庫からとり出して毛蚕が生まれたのですが、4mmぐらいで何故か桑を食べずに全滅していきました。その後、妹の家で夏蚕が、春蚕から生まれたのを7月15日ぐらいに貰いました。春蚕に比べて成長がはやく、どんどんと育っていったのですが、今回は800匹を越えていましたので、桑とりも日に何回となく、又、多量にとってくると冷蔵庫に入りきらなかったりして、蚊にはさされるし、たしかに大変な仕事だと思っているうちに、蚕のいる部屋で、蚊退治にベープマットを入れてしまったところ、翌日、元気がなくなってしまい半数近くが死んでしまったのです。

## カ イ コ

品種改良と飼育技術の進歩で、蚕は今でこそ、簡便

でも飼える時代でもある。

な屋外飼育ができるようになった。しかし昭和の三十年代まで、養蚕は重労働であつた。季節になると農家の子供たちは、蚕に自分の部屋を奪われ、ザコ寝をし

て実用化されているもので、クワと大豆の粉末、消化を助けるセルロース、砂糖、でんぷん、ビタミンなどを寒天でかため

ながら、早起きしてクワとりの手伝いをした。

これは稚蚕の人工飼料として実用化されているもので、クワと大豆の粉末、消化を助けるセルロース、砂糖、でんぷん、ビタミンなどを寒天でかため

りながら、早起きしてクワとりの手伝いをした。

これは稚蚕の人工飼料として実用化されているもので、クワと大豆の粉末、消化を助けるセルロース、砂糖、でんぷん、ビタミンなどを寒天でかため

りながら、早起きしてクワとりの手伝いをした。

これは稚蚕の人工飼料として実用化されているもので、クワと大豆の粉末、消化を助けるセルロース、砂糖、でんぷん、ビタミンなどを寒天でかため

りながら、早起きしてクワとりの手伝いをした。

これは稚蚕の人工飼料として実用化されているもので、クワと大豆の粉末、消化を助けるセルロース、砂糖、でんぷん、ビタミンなどを寒天でかため

りながら、早起きしてクワとりの手伝いをした。

これは稚蚕の人工飼料として実用化されているもので、クワと大豆の粉末、消化を助けるセルロース、砂糖、でんぷん、ビタミンなどを寒天でかため

りながら、早起きしてクワとりの手伝いをした。

これは稚蚕の人工飼料として実用化されているもので、クワと大豆の粉末、消化を助けるセルロース、砂糖、でんぷん、ビタミンなどを寒天でかため

りながら、早起きしてクワとりの手伝いをした。

これは稚蚕の人工飼料として実用化されているもので、クワと大豆の粉末、消化を助けるセルロース、砂糖、でんぷん、ビタミンなどを寒天でかため

りながら、早起きしてクワとりの手伝いをした。

これは稚蚕の人工飼料として実用化されているもので、クワと大豆の粉末、消化を助けるセルロース、砂糖、でんぷん、ビタミンなどを寒天でかため

りながら、早起きしてクワとりの手伝いをした。

これは稚蚕の人工飼料として実用化されているもので、クワと大豆の粉末、消化を助けるセルロース、砂糖、でんぷん、ビタミンなどを寒天でかため

りながら、早起きしてクワとりの手伝いをした。

これは稚蚕の人工飼料として実用化されているもので、クワと大豆の粉末、消化を助けるセルロース、砂糖、でんぷん、ビタミンなどを寒天でかため

りながら、早起きしてクワとりの手伝いをした。

これは稚蚕の人工飼料として実用化されているもので、クワと大豆の粉末、消化を助けるセルロース、砂糖、でんぷん、ビタミンなどを寒天でかため

りながら、早起きしてクワとりの手伝いをした。



生糸ができる。

のは難しい。(大)

それ以外にも、ねばねばの液体を出して一箱突然全滅してしまったりして、蚕を多量に飼って経済がそこへかかっていった人々に思いを馳たのです。新聞記事に書かれた通り、ただ一・二匹を飼うだけでは、優しい美しい虫を飼っていたことだけは伝わるけれど、蚊にさされながら自分の寝る場所もとられて朝早くから夜遅くまで桑とりと、掃除に追われる生活、へたをすると半分も繭を作ってくれない生活は理解できないのは、確かだなあと思うのでした。

### (3) 信 仰

信仰は、農業に関係するものと、病気に関係するものに分けられます。

<農業>は、自然現象(日照・水枯・嵐・ひょう)など人間の力では、どうにもならないものであり、神様にお願ひし農作物収穫を願いました。江戸時代の総人口約3,000万人。その80から85パーセントが農民でした。1828年に書かれた「新編 武蔵風土記稿」によりますと、産業に関して、農業以外のことは、まったく書かれていませんので、住民の大部分は農民だったでしょう。彼らは、米・麦・粟・大豆・野菜などを作り、年貢として米を納めていました。

このようなことから、神々にたくさんの収穫を願いました。そこで神頼み、神信心となり講に発展しました。信仰のための講中が情報交換の場となり、娯楽化し社交の場と変質していきました。

<初午・稲荷講>



稲の神、春の農耕はじめにこの神を迎える。  
(田の神)

— 岩戸の秋元重光さん —

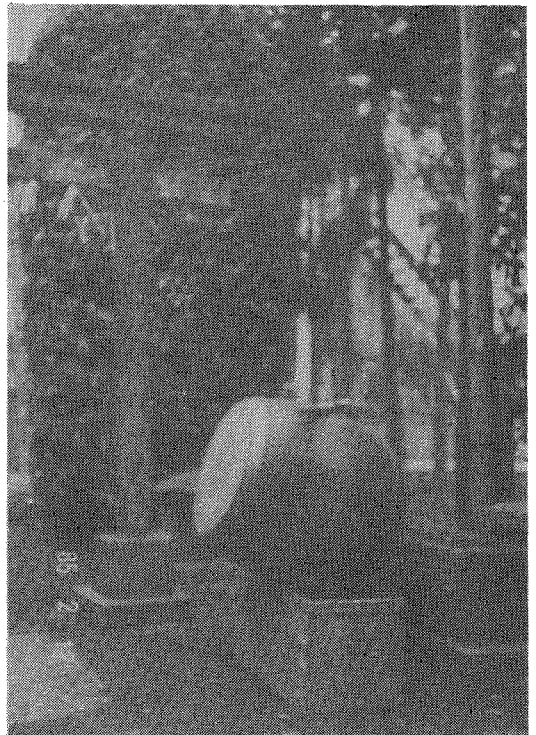
御稲荷様の講社ってのがあって、講社の人が寄って、初午は交代で、家でやれば来年は隣りと、一ヶ所によらないでやりましたね。現在は、八幡神社に社務所を作ったので、そこに岩戸中の稲荷講、西にしろ、東にしろ、原にしろね、みんな交代で(役員2人か3人で)初午をやります。あそこに神主を呼んでね、代表がたのんで、社務所ができる前は、個人でやりました。

<御岳講>

狼のお礼は田畑の猪鹿の客除き。火災・盗難よけ。

<榛名講>

群馬県榛名山神社へ参詣する講。ひょう除けの神。



— 岩戸の秋元重光さん —

岩戸では、もうありませんわあ。昔ハンナワ講（榛名講）で、わたしも榛名山や御岳山へ行ったりしましたよ。代表で行くんですよ。岩戸なら岩戸代表2人か3人で。

大山さまは、雨乞の時水ももらいに行ったわけなんです。お宮（岩戸八幡）の下に木で作った燈籠があって一ヶ月立てるんです。（立てる日が決まっている。）

岩戸八幡の下に立てる場所があって、火は燈油を持って行ってつかったんです。

お寺（明静院）の下にえらい清水があったから神主がそこに来て雨乞の祈とうをした。もらう時は、さい銭をあげて神主さんから大山さんのお水をもらうんです。狛江市のうちでまだ御岳講、ハンナワ講をやっているところがあるようです。

<大山講>

大山阿夫利神社に参詣する講。大山は雨ふり山ともいわれ降雨に靈驗がありとされている。大山から水をいただいて来て雨乞いの儀礼を行なった。

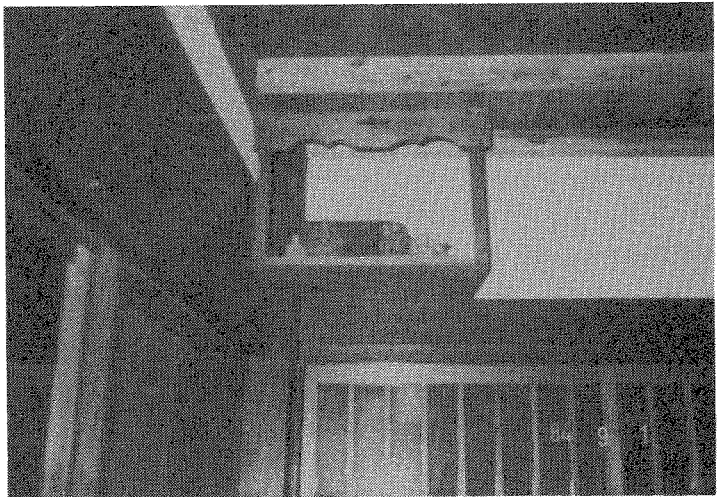
<秋祭り>

	少し前まで	現在
伊豆美神社	9月20日	9月15日
岩戸八幡神社	10月4日	10月第一日曜日
日枝神社	10月7日	
白幡菅原神社	10月13日	10月10日

現在のものが全て、日曜日が祭日になっているのも、都市化した証ではないでしょうか。村域内の五穀豊穡、安全を見守るためでした。

<荒神様>

カマドの神・火の神・火除け。



栗原宅の大黒様

病にかかった時は、医者がいなかったので、神幸、地藏様などにお参りし病氣治癒を願っていました。

<泉竜寺子育て地藏>

通称を子育て地藏といい「和泉の地藏さん」「まわり地藏さん」などと呼ばれていた。この地藏さんは、江戸時代中頃から昭和20年頃まで、立川市、埼玉県入間市方面、練馬区、北区方面、日本橋、神田などの旧江戸府内など近郷の信者の家を一夜ごと巡行していました。

岩戸の秋元重光さん

泉竜寺のまわりの地藏は、話しは聞いたけど見ませんでした。

<玉泉寺のおしゃもじさま>

百日ぜきにかかった時おしゃもじをいただいて来てそれを使ってごはんを盛った。全快した時は、いただいて来たおしゃもじと新しいおしゃもじ二本にして返した。

<北向き地藏(夜泣き地藏)>

子供の夜泣きに御利益がある。

<慶岸寺塩なめ地藏>

安産祈願の地藏さま。地藏堂で余った塩を一つかみ持ち帰り、これを風呂に入れて入浴すればかぜが治るといふ。二の橋、稲毛屋の所にあったが道路を広げるために慶岸寺におさめた。

<伊豆美神社のお百度石、鳥居>

石の鳥居を七つくぐると中気にならぬといふ。

<お釈迦さま>

あま茶を飲むと無病息災、作物にかけて虫のつかない呪いとする。

<庚申講>(庚申待)

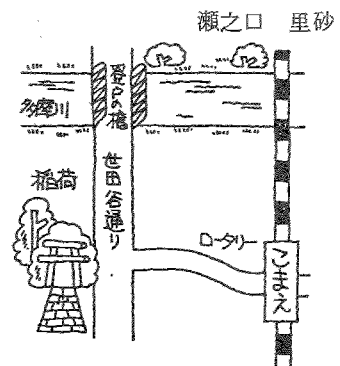
庚申の日に講仲間どうして集まり、庚申様の掛図をまつりながら、身を慎み、夜を徹して語りあう。人体にひそむ“サンシ”(三尺)という虫が、庚申の夜ごとに天に上っては、天帝にその人の罪を告げて早死にさせるが、その晩眠らないで慎んでいると、サンシが天に上るのを妨げて長生きできるという。

このような古くから受け継がれた信仰も行事と同じように消滅したり、形をかえて受け継がれたりしています。いつの世にも人間が生きていく上で、自然との関わり、人間同志の交わりの中で、なにかを期待する心理が働いているうちに、このようなものを作り出したと思われまふ。

<十幹森稲荷>

私の家の前にある神社を調べことにしました。その神社は入ったところに鳥居が二つあって、その前にこういうのと、キツネの像があります。キツネの像は四つあって、親子の像が二つ、それになにか口にくわえているのと、まりを持っているのです。

そのまた奥に、建物みたいなものがあります。これまでの所へ通るには、コンクリートの階段があって、三段く

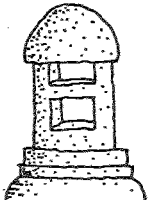




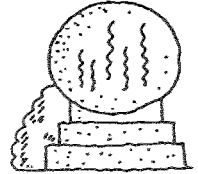
らしい小さな階段を登ると建物があります。多分、その中に神様がいるのでしょう。

中をのぞくとたいこや、おさいせん箱が入っています。たいこというのは、この神社のできた日(?)に出して、大きな長細い赤茶色の旗も何本か出ます。それは私の家のま前で、ドアを開ければ一番最初に目につくぐらいです。

朝ごはんを食べるとき、必ず“パン/パン/”と手を2回たたく音が聞こえます。見てみると、元市長の吉岡さんが毎朝、毎朝きて、神社の前で手をあわせているのです。これにはおどろきました。



この神社は古くからあるらしく、キツネの像なんか欠けている部分があります。また人の名前と、なにか文字が書かれてあるのがあります。たぶん、この神社を作った人の名前だとも思います。



私は、なにげなく見ていた神社がそんなに古くからあるのか。とか、なぜこの神社を作ったのか、ということはさっぱり知りませんでした。

これからは、そういう狛江のことを調べてみたいなあと思いました。

<八幡神社の昔> より

榎元 春也

11月の木曜日、私たちは「狛江の昔」を調べるので、八幡神社へいきました。なかなかお屋敷がみつからなくて困っていたけど、やっとみつけて話を聞きました。

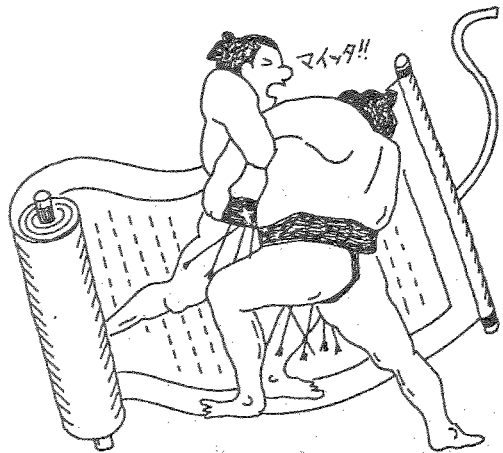
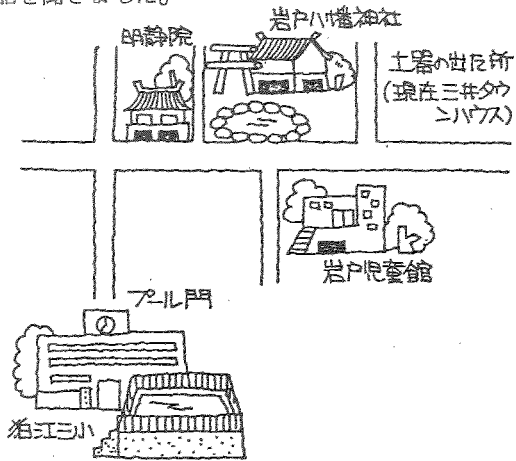
「八幡神社は、5つの神様がいて・・・。」

と話しはじめて、大きな巻物をもってきてくれました。巻物はたて3mくらいで、横も2m位の本当に大きい巻物でした。

秋元仁左衛門と、小田原のさまのかみよしうじとが、すもうをとり、秋元仁左衛門が勝って、八幡神社付近の土地をもらった。410有余年の年月を重ねて、今日にいたるまでこの名をとどめられた。

この後は、テープがなかったからよくわからなかったけど、そのおじいさんは80才位なのに、足が不自由なのと耳が遠いだけで、長い巻物を眼鏡もかけずに、むずかしい字や小さい字を読んでくれました。みんなシーンとして聞いていました。

おじいさんの話が終わって、外へ出たら辺りは真っ暗けっけ/八幡神社に置い



である自転車まで行くのに細くて暗い道だから思わずチカンを思い出してしまい、かけていきました。みどと私は急いで自転車をこぎ、わかれたあともブレーキもかけずに、急いでこいで行きました。それにしても巻物を読むだけで、一時間もかかるとは思わなかった。

#### (4) 伝統行事・年中行事

年中行事は、季節の変化の中で毎年決まった時期に繰り返し行なわれる伝統的行事であります。狛江市は前述したように、小足立・覚東・岩戸・和泉・猪方・駒井などの旧六ヶ村からなる、古くからの農村地帯でありました。Ⅲ-1人口の項でもわかるように昭和2年の小田急電鉄開通によって移住者が増加し、昭和39年以降団地の造成がおこなわれるに及んで、狛江市は近郊住宅都市へと変化しました。宅地造成による農地の減少は、農家の生活様式を変え、年中行事にも変化をもたらしました。

狛江市の農家で明治・大正・昭和を通してつい最近まで行なわれていた年中行事は、次のようなものです。

岩戸・駒井・猪方の三小学区域の方々にお話をうかがいました。

1月 1日 元旦

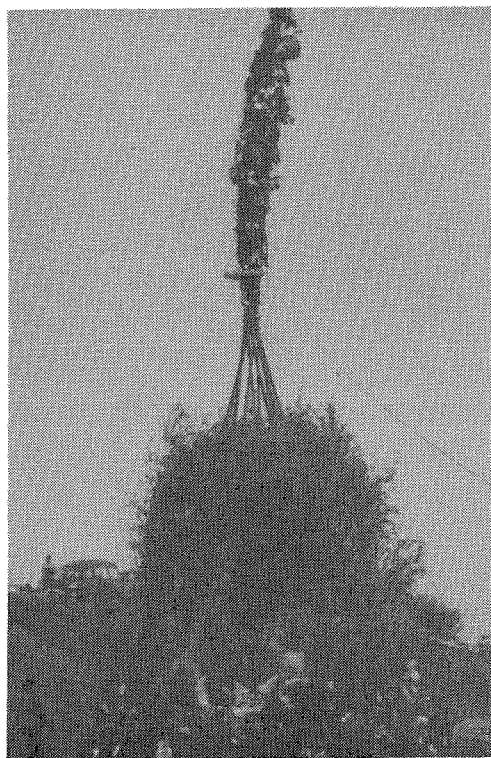
初詣（岩戸八幡，和泉神社へ）

雑煮（三カ日）

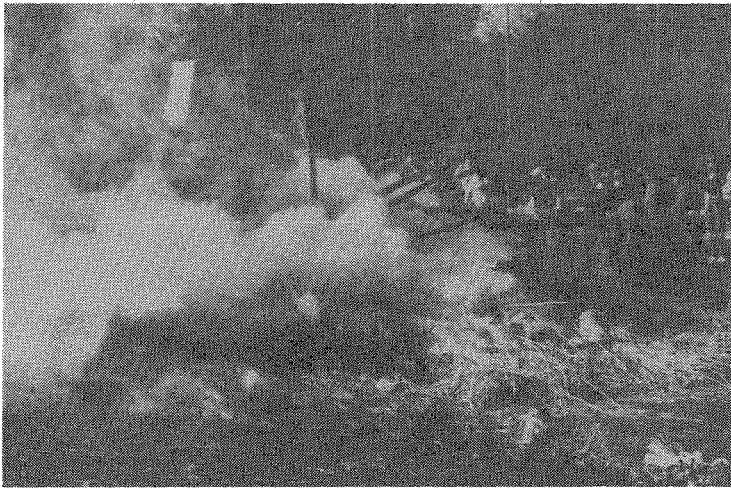
4日 お飾りを下げる。

（6日のところもあり，7日の風に当てるものではないと言って，7日の陽があがらない内に下げる。）

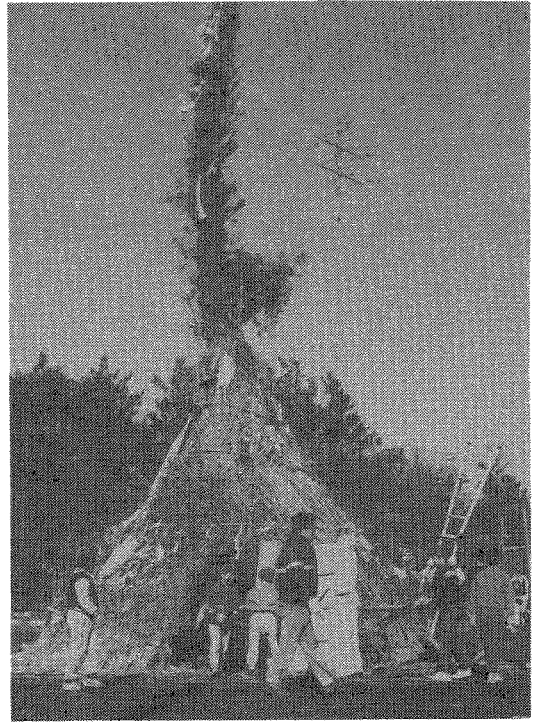
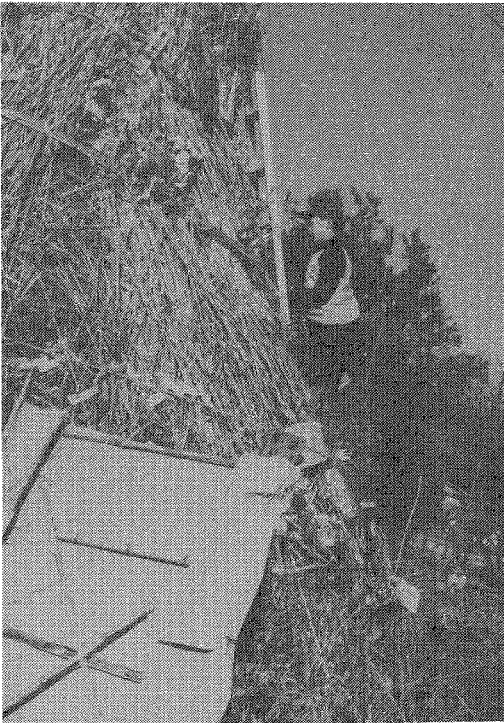
川  
仙  
前  
の  
塞  
の  
神

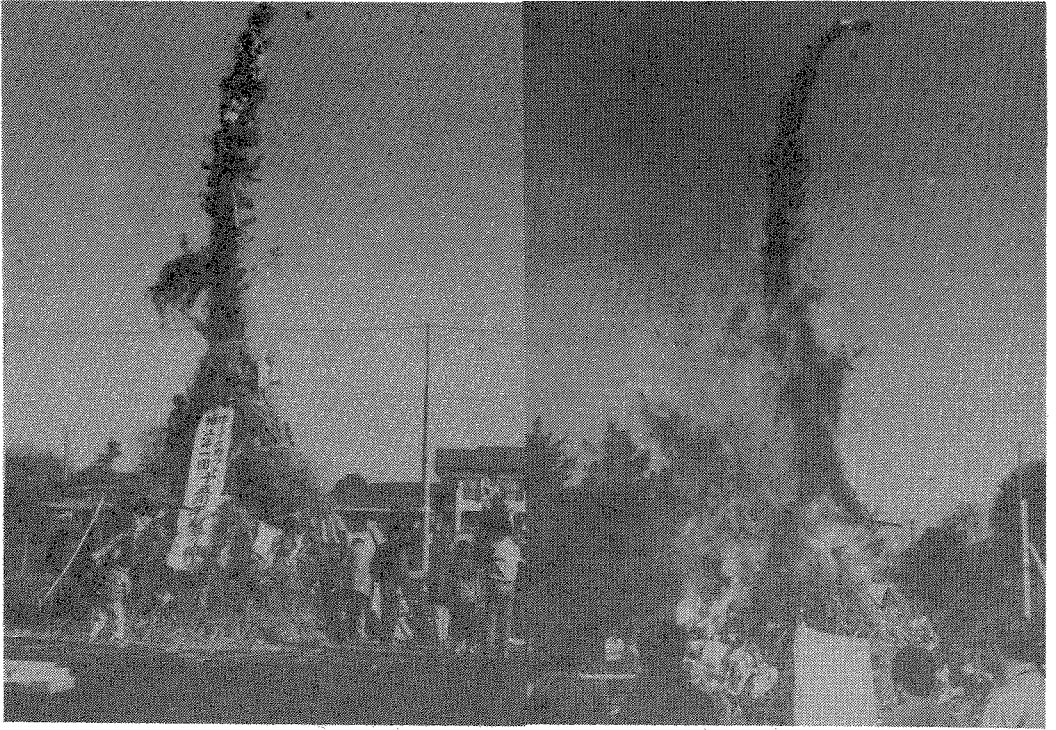


- 1月 6日 6日年越し  
 (神棚に御明り, 御神酒, うどんを供える)
- 7日 七草がゆ  
 七草爪(ナズナを浸した水に爪をつけて切る。松の内は爪を切ってはいけないのでこの日に切る。)
- 11日 蔵開き(汁粉を作る)
- 14日 塞の神(セエの神)(4日に下げたお飾りや松を一カ所に集めた塞の神に火をつけて燃やす。この火で餅を焼いて食べると悪病にかからない。三小学区域では, 岩戸と猪方に塞の神堂があった。)



塞の神





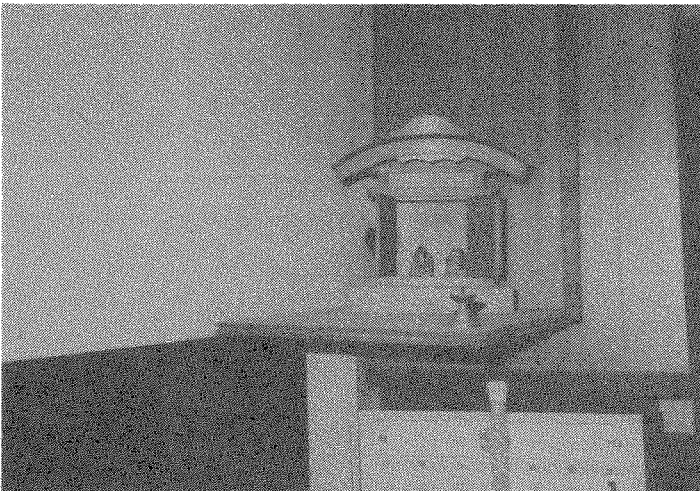
まゆ玉（かしの木を切って、みかんやだんごをさす。猪方の小川家では二年位前までやっていたようですが、家の改築によりやめたそうです。）

15日 小豆粥

16日 オサイニチ（小豆飯におもちを入れる）藪入り

20日 二十日正月

恵比須講（高盛りの御膳にうどんを山盛りにもってお頭つき〈鯛または鯖〉を恵比須様にそなえる。一升ますにお金を入れたのも供える。



栗原宅

えびす様

2月上旬 節分(鰯の頭を豆がらにさして焼き(ここまでを焼きカガンという)ヒイラギの枝につけて戸口にさす。火にかざして焼くとき米の虫の口を焼こう、野菜の虫の口を焼こう、よろずの虫の口を焼こうと唱える。  
 唱えごとは作っている作物の名によって色々ある。五穀の虫の口を焼こうと唱えるひともある。五穀とは、豆、麦、米、粟、きびでこれが昔の重要な作物であった。  
 焼きカガンが主人の仕事で唱えごとを知らぬ主婦もいる。  
 豆をいるとき、豆を左右の手でかきまぜる。こうするとひょうそうにならないといわれている。

2月上旬 初午・稲荷講

三小学区域では個人持ちの稲荷様、共有の稲荷様共に数が多い。共有の稲荷様のところでは、和泉神社の神主にお祓いをしていただく、その後年番の家に集まり御馳走をする。油揚げ煮物などで食事内容も書き物にするし年番にまわす。今は個人の家で集まらずお店を利用している所もある。和泉神社神主様はこの日一日で狛江中の稲荷様をまわるので大変ないそがしさであろう。



3月 2日 宵節句

3日) 節句・ひな祭(初節句の時は2  
 4日) 月の中頃から飾った。長女が産まれて初節句の時、嫁の実家・仲人・親戚はお内裏雛を届ける。

お返しは菱餅・蛤・きなこを届ける。)

上 旬 初寅(初寅にくじを引く。代参で御岳山でお札をもらってくる。現在は2,000円、昔は米と麦でおさめ、これを売ってお金に代えた。)

中 旬 彼岸(中日、ぼたもち、明けだんご)

4月初旬 榛名講(榛名山に榛名講でおまいりに行く。4・5人代参でお札をいただいて来る。いただいたお札は竹の棒(篠竹)にはさんで一番大切な畑の真中に立てる、杉の葉も一緒にさす。嵐よけ、ひょうよけ)

8日 お釈迦さまの日(草だんごを作る。)

5月 5日 端午の節句(長男の初節句の時に嫁の実家、仲人・親戚から武者人形や鯉のぼりが贈られた。その返礼には柏餅(重箱につめて)千鱈(カサゴ)2枚をした。)

菖蒲をかざり柏餅とマルタという多摩川でとれる魚をそなえた。この魚は大きくて形はよいが骨が太く味の方はあまりよくなかったそうです。柏餅は今みんなお店にあつらえる。)

7月初旬 農上がり(田植え終了後の休み、ひるんぼ(蛭)の腰のばしとって座しきで昼ねをしたという思い出を持った方もいます。)

7月 7日 七夕(この日なす畑に入ってはいけない。子供の頃わら馬を作ってもらった記憶をしている人もいる。サトイモの葉にたまった水で墨をすって天の川とか願いごとを書いた。多摩川に翌日流す。お赤飯を炊いたりしたが、たなばたはこの料理という決まりはなかった。)

7月20日 夏上がり(農作業休みの日、嫁の里帰りの日、お赤飯を炊き、新しく作ってもらった着物を着てお赤飯を持って里に帰る。お嫁に来て初めての年だけにする。家の中元のようなものと話してくれた方もいます。)

8月初旬 施餓鬼会(各寺院で)

13日 盆棚を作る。

迎え盆(迎え火は日がくれた時、おがらをたき、正面玄関から入ってもらう。水むけは、里芋の葉になすきざんだものへみそはぎを半紙にくるんだもので水をかける。水はドンブリに入れておき、この全てを玄関脇辻にそなえた。)

15日 送り盆(夜10時か10時半、道路で送り火をたく)

9月 1日 八朔の節供(嫁の里帰り、今は親戚の人があいさつに来るといふ家もある。)

中・下旬 秋の彼岸

㊥8月15日 15夜 } (月見には、御明り、御

9月13日 13夜 } 神酒とかならず豆腐を供えた。酒の肴に豆腐、栗、柿、梨等、秋の取獲物も供えた。十五夜

には団子は15個か5個、すすきは5本。十三夜には団子は13個か3個、すすきは3本。片月見をするものではないと言い十五夜十三夜両方やった。片方だけなら変わりごとがある。身内に葬式などがある場合は、月おくれにした。月見の時は、子供たちが他の家のお供物をぬすんでも見て見ぬふりをした。畑の物までぬすんだ子がいたそう。小学校2・3年生は5・6年生におともしてついて歩いた。

9月 1日 駒井風祭

10月 4日 岩戸八幡神社祭典(岩戸)



- 10月 7日 日枝神社祭典(駒井)
- 10月13日 白幡,菅原神社祭典(猪方)
- 10月30日 荒神さまのお発ち<おかまさま>  
(31日) (荒神さまは36人の子供がいて,この日,出雲に行かれる。お土産に36個のだんごを一升ますに入れて供えた。だんごは米をうすでひいて作った。)
- 11月 9日 亥の子(亥の子のぼた餅,蛭がぼた餅を背負って大根畑へ行くので,それを食べたくて大根が首を伸ばすのだという。)
- 11月15日 七五三
- 11月20日 恵比須講(1月20日と同じ)
- 11月30日 荒神さまのお帰(赤飯,小豆粥を一升ますに南天の葉2枚を敷いてあげる。茶わん一ぱい位のごはんをあげるところもある。)
- 11月(麦を  
まいたあとの  
日) まきあげ(稲刈りを終え,麦をまきあげた後の骨休み)
- 12月 4日 4日大師(小豆粥)
- 12月 下旬 冬至(南瓜を食べ柚子油に入る。柚子の木を庭に植えると後家になるので柚子の木を植えていないという家がある。)
- 20日頃  
から 煤払い(煤払いの後ケンチン汁と新米を食べた。ふだんお米は食べないのでケンチン汁と新米は大変なごちそうだった。)
- 25日頃  
から 餅つき(卯の日を忌む,田植え,麦まきも卯の日はのぞく。大晦日まで東京へ餅つきに行く人もいた。三人ひと組で行き,2人つく人,1人手あい,1日に10俵位ついた。昭和7・8年頃までしていた。餅には粟やきび,とうもろこしをまぜたりした。)
- 30日 松迎え,お飾り<大黒じめ二注連縄,門松>(稲を作らなくなってからわらを買って作る家もあったが今は出来あい物を使っている人が多い。今は輸入ものですよと話した方もいた。)
- 箸作り(雑煮用の箸をカツノキで作った。岩戸の小川さんは岩戸児童館近くの木の枝で作ったそうだ。)
- 31日 大晦日・みそか祓(和泉神社よりみそか祓いとどく。みそか祓いは主人が家族全員を祓う。寝てしまった子どもは枕もとで祓う。)
- みそかそば  
茄子の木,豆の木,菊を燃す。(借金ナスからマメでいいことキクように。)

以上が聞き取り調査での狛江の年中行事でした。

これをもとに昭和59年狛江第三小学校5年3組で狛江に残っている年中行事を知っていますか,またあなたの家でやっている行事を教えてくださいと調査をしてみました。

調査行事は12月~5月までのものです。

			知 っ て い る	家で行なっている
12月	4日	4日大師	3名	0
	8日	メカリババアヨウカドウ	1	0
	31日	みそかばらい	3	3
		茄子の木、豆の木	2	0
		菊をもやす		
1月	6日	6日年越し	2	1
1月	15日	塞の神	3	
	"	小豆粥	12	14
1月	20日	20日正月	7	1
		恵比須講	5	1
2月	上旬	初午	8	0

上記以外の行事は狛江の年中行事として知っている人はゼロ、冬至、お飾り、大晦日、節分、ひな祭、彼岸、子供の日（端午の節句）は、一般家庭の季節行事として行なわれています。このクラスは、農業を営んでいる家庭はゼロで、ほとんどサラリーマンで行われている行事も都市型です。狛江の年中行事は姿を消しそれぞれの家庭の季節の行事となってわずかに残っているだけで、昔はこうだったという過去形のものになっています。

民具とか、民俗芸能が民俗文化財として保護されている中で、農家の年中行事の伝承が、伝承者の高齢化、核家族化、家の生業の変化、都市化等により、消滅しつつあるといえましょう。

しかし、時の流れ、伝承の流れの中で新しい形で甦ったものもあります。

#### <甦った年中行事>

塞の神（どんど焼き）は、すず払いに使った竹を立て、わら等で囲んで作った。子供達は、その中で食べたり、遊んだりした。当日は早朝に火がつけられ、各家から持ち寄ったしめなわ、門松、だるま等も焼かれた。昭和9年に宇奈根で前夜泊りこんだ子供が焼死するという事故がおきてから禁止された。この行事も時の流れと共に消滅していたが、駒井青年会OB（駒美会）の人達の手で数年前より復活し、ジッコ（昔からの人）ばかりでなく新しくこの町の住人となった人達も門松やお飾りを焼いている。1月15日、川仙前の河原で行われている。

61年1月18日、ボーイスカウト狛江一団発団15周年の記念行事として塞の神が行われた。狛江にある行事を子供達に伝えようとの目的で行われたもの。17日朝より栗山安正氏（東野川・旧小足立）指導のもと、子供達の手で作った。塞の神の中はいろいろがあり、たたみが敷かれ、鍋料理をくするま座になって食べながら、大人・子供が泊まりこみをした。18日の塞の神には、狛江市の広い地域から子供達が集まり燃え上がる火と竹の爆ぜる音におどろきの声をあげていた。

このように行事を守ろうとしている人達の心が、子供達に伝わり、子供達は自分の住んでいる町の歴史に触れる、時代と共に変化する行事であるが、行事によって季節の移り変わりを感じる子供達であってほしいと願っています。



5年生の2月の国語教材に、伝統行事を調べる箇所があります。1週間近く調べる時間を与え、図書館や地域センター、おじいちゃん、おばあちゃんに話を聞いたり本で調べるように指示しました。これは地域の公共の場所に慣れる意味も含めたつもりで、その点では良かったのですが、どうも聞いて調べたのは2人で、後は出版物からとなってしまうました。

せいのかみ(歳の神) = どんどやき

<地域センターで>

根岸 太郎

毎年正月を迎えると思い出すね。

楽しい正月の遊びも10日ほどすぎた1月11日、朝早くから村内(今の校外グループ)の男の子たちが一軒一軒「歳の神です。」と声をかけると、前の年の神社のお札やしめ飾り等、暮れの大掃除の時にすすはらいをした笹の葉をわたされて、始末をする御礼の心付けやお餅などを頂いて、それを田んぼのまん中に集めるんだよ。

まず、直径15cmぐらいの青竹を柱にして炭俵やわらをのせて小屋を作るんだ。その小屋の中に御身体と称する、その村内で代々定めた石(子供の頭ぐらいの大きさ)を入れておいてお供え物を供えたり、おしるこや甘酒を作ってみんなで食べたりするんだ。そして、14日目の明け方、火をつけて燃やすんだ。焼け残った御身体をまた使うために、どこかの木の下を深く掘ってうめておくんだ。歳の神の夜にいたずら好きの子供たちが、よその村内にしびこんで御身体を盗みっこするんだけど、その夜は盗むほうも盗まれるほうも楽しみだったね。又、せっかく木の下にうめておいた御身体も次の歳の神にとりだそうとしたらアスファルト道路になっていたり、家が建っていたりして、場所が分からなくなることがあって笑い話になったね。

でも、その風習も昭和9年に宇奈根(現在の世田谷)で子供が焼け死ぬという事故があって、それ以後とりやめになったけどね。

どんどやき

<おじいさんに聞いて>

西山 雅巳

正月のかざり(まつかざり)などあつめて小正月にもやす。やりかたも、いろいろあるけどおもしろいのは、まず竹を集めて半日で小屋を作り、おしるこを作り、小屋のすきまをふせぐわらを集めて、すきまをなくし中で火をたく。あつたまって、あつたかーいおしるこ。想像しただけで「・・・」が。今はやらないのか。

半日続くと夜おかざりを集めて小屋の中と、まわりをかこむようにおいてそれをもすのが、どんどやきだそうです。

なぜ? なぜなくなったのか。どんどやき。それは、狛江市の人口がふえて今は住宅だらけで場所がなく、やって燃え移ったら大変だからだそうです。

あー、それでどんどやきがなくなったんだ。やってみたいなあ。やると若がえる・・・。じゃあ、年よりや中年がやるんだ。ぼくは若がえったってしょうがない。若い、若すぎるんだから。子供がやってもしょうがない。でも、おしるこたべたい。

## どんどやき

<お母さんに聞いて>

黒沢 友和

夜になってしまったので、仕方なくお母さんに聞きました。でも、お母さんは忙しくてなかなか教えてくれませんでした。教えてもらったのが「どんどやき」でした。

どんどやきは、お正月の行事です。どんどやきは門松、しめなわ、つまり神をまつるものをいっきに集めていっしょに燃やすことです。狛江では、市民プールのあと地でよくやるそうです。今では、神を祭ることだけでなく、子供たちのためにしめなわ、門松とともにいもを焼いて、やきいもを焼く子供の行事としてやるところもあるそうです。

なぜどんどやきをやるのかは、やはりしめなわのような神をまつるものをおさめるように燃やすそうです。

「今年もいいことがありますように、お願いします。」

とやるためです。

ぼくは、「どんどやき」は、なにか食べ物のことかと思っていた。でも、ぜんぜんちがいました。とてもおもしろい名前だ。やはりこれは、「どんどんやけ」からなったんじゃないかとぼくは思う。

## まゆ玉

<地域センターで>

古谷 有起

マイダマ・メエダマとよばれた。大正時代は養蚕が盛んで、お蚕がよく出来るようにと小正月の前日1月13日に、まゆの形のおだんごを作りカンヤナギの木の、下の枝にさして部屋にかざったが、みかんをさしたり野菜をかたどったおだんごを作る家もあった。

20年前までは、このまゆ玉の行事をしている家も少なくなかった。このまゆ玉はどうして今はないのかと思う。

## 初 午

<市民センターで>

大塚 国弘

2月のはじめの午の日。春農耕はじめに田の神をむかえ、秋の収穫後に山に送り出す。里へおりると田の神となり、山へ上ると山の神にかわる。多摩では「イナリ」の字の通り「トウカ」とよんでいる人も多い。なぜ、秋に祭りをするのか。

## 梅若さま

<市民センターで>

坂井 まり

3月15日梅若さま（小豆飯を炊く家、梅の花を神棚や荒神さまに供える家もあった。）という行事は、もう行なわれていないそうです。でも「小豆飯を炊くなど、とってもおもしろそうだな。」と思います。小豆飯なんてどんなものかしらないけど（おいしそうな名前だな。）と食べてみたくなりました。

## 荒様さまのおだんご

<市民センターで>

川崎 順子

荒神さまは、馬に乗って出雲に行かれるので、おたちの夜もお帰りに、馬につけた鈴の音が“シャ

ンシャン”するのだという話を20年ほど前、小足立や覚東で聞いたが今ではこの伝承を知る人はいない。

荒神さまのおだんごは、丸いものなら何でもよいと姑にいわれてあめ玉を36個供える人もある。家を建てなおしてからは、荒神さまのおたちにもお帰りに、なにもしていない家が多い。荒神さまは縁結びの神さまだといひ、息子も嫁をもらい縁付いたので、私の代にはもうお世話になることもないし、若い者たちにはこのしきたりを守っていく様子もないので、末娘が嫁いだのをしおにやめてしまったと、話す人もあった。

### 麦のガム

<地域センターで>

伊藤 敬子

ちょうど春4月ごろまだ麦の穂が青い頃、穂をひとにぎりにとって両手でもんで皮をとり中の麦を口の中に入れてよくかむんだ。そのうちに白いかたまりになって、ちょうどガムみたいになるんだ。

でも、相当長い時間でないとできないので、あごがつかれてくるんだよ。むかしの子供のおやつがわりの一つになっているんだね。

### 稲荷講

<地域センターで>

沢田 俊祐

初午にその宿に集まり飲み食いし、むしろで小屋がけをして甘酒を作り、楽しんだ。お稲荷のお神酒、銭をくれと子供がタイコをたたいてまわり、大人たちは1年に1回のきまりごとをこの日に決めた。

### お釈迦さまの日

<地域センターで>

宮腰 真理子

花まつりともいう。4月8日にお寺に行き、甘茶をごちそうになったり、お釈迦さまにかけたりした。昔はこの甘茶をわけてもらい、まむし(へび)よけのおまじないとして、家のまわりにまいた。今では、花まつりは泉竜寺で行なわれており、お釈迦さまをまつったお堂に、つばきの花をはじめいっせいに咲きだした春の花をかざった。この日家では草だんごを作った。

### 灯籠流し

<地域センターで>

平井 誠治

狛江市の灯籠流しは昔からの行事で、かなり古くから行なわれているそうです。15年位前から花火大会も一緒に行なわれるようになり、狛江市の観光の一つになっています。

### おせがき

<地域センターで>

大木 みどり

遊びと言えば四季おりおりの盆や正月が一番の楽しみで、親せきが集まった時に小遣いをもらって、それで買い食いをしたり、お施餓鬼について行ってお寺さんで、精進料理をめいめいぜんで食べるのが楽しみだった。境内には露店がいっぱい出て、お小遣いに3銭もらうとホクホクだったな。

これは昭和7、8年頃のことです。

## 十五夜

<地域センターで>

沢田 明子

お月見というのは旧8月15日、旧暦で行なわれる。御明り御神酒をあげ、必ずとうふを供えている。又、月見だんごを供えず、ぼたもち・まんじゅう・さつまいも・さといも・なし・くり・かきなどを供え、煮炊きしないものを供える家などさまざまです。

### 伊豆美神社のお祭り

<中央図書館で>

工藤 礼子

毎年、9月15日に行なわれる伊豆美神社のお祭りのもとは、おじさんの話によると—— 狛江は、昔は田畑のひろがる農村だったそうです。だから、田畑の仕事がうまくいきましたと、神様に御礼をいうために秋にお祭りをしたそうです。

そのしょうことして、お供えにお米や野菜が多いんだそうです。「このようにりっぱなものが、たくさんとれました。」と神様に見ていただくためだそうです。

又、お祭りにおみこしをかついでまち中を歩くのは、神様に乗ってもらい、まちの人の暮らしぶりを見てもらうためだそうです。

このように、昔の人は自分たちのまちや村は、神様が守ってくれていると考えていました。赤ちゃんが生まれると「お宮参り」をするのも神様に「この子が今度、まちの一員になりました。じょうぶで元気に育ちますように見守ってください。」というお願いをあらわしているのだそうです。

こうして、昔の人たちは神様と心をかよいあわせるために、いろいろな行事をつづけました。

### 亥の子のぼたもち

<地域センターで>

野田 絵美果

荒神さまのおかまを開く頃、蛭がぼたもちを背負って大根畑に行くので、大根は背伸びする、大根は大きくなるという。わたしは荒神さまのおかまというのが何なのかわからない。あと、蛭がぼたもちを背負えるのかなあと思ったり、亥の子ってなんだろうと思ったけど、ぼたもちというところが気に入りました。

### 伝統行事を調べての感想

谷口 泰道

ずいぶん伝統行事があるんだなあと思った。なぜ、そんなに伝統行事がなくなるんだろう。せっかくご先祖さんが作ったのに、どうしてやめちゃうんだよー。かわいそうだ。多分みんなで考え、ちえをしぼって作ったのにかわいそうだよ。

それは、みんながちゃんとやらないからだ。せっかく作ったのにやらないと、どんどんへってなくなっちゃうんじゃないかなあ。もっと、みんなで大切に、大事にあつかって、全国でやめないでほしい。今はあまりやらないから、どんどんへって、しらない人が多いから、もっとはやらせて昔と同じにやってほしい。みんなは、どうしてやめたんだろう。どうしてこのごろやらないんだろう。

あと何年かで、みんなに忘れられちゃうだろう。だから、もっとやってほしい。忘れたらもうやることができない。

ばくの考えでは、ひまがないとできない。でもやりたい。なんでやめたか、わかる本がどこかにないかなあ。でも、またやってほしい。

## (5) どんぐりだんご

今では三小の学区には水田はありません。たまに陸稲はみられるそうです。

5年生では食料問題について一学期学習しましたが、日常の食料の大部分が外国に依存していることに驚き、日曜参観の授業では子供達から政治問題まで絡んでいるという指摘まで出され、この後、将来は農業をやらなければという声まで出ましたが、最終的には土地もないし、仕事は自然を相手に大変そうだ。誰か女性よ農家に嫁に行けなどという結論を出す子も現われました。私たちは6年生になって陸稲を蒔き、収穫したものを白のあるお宅で委員の父母の方が餅にしてくださりお腹に入れました。NHKのテレビで導入に古代人がどんぐりを食べていたことを知り、三小の近くには岩戸八幡に毎年多量に落ちているので、実際にやってみたいという声が多数あってやりました。

10月の初め、絹山さんが、福音館の科学絵本「どんぐりだんご」を持ってきてくれた。クラス一同、ますますやる気になった。私も、今までパン・とうふ・べっこう飴・かまぼこなど子供たちと作ってきて、それぞれ失敗もあったが、なんとかなるだろうという気持ちもあったし、古代人のしたことを味わいたいとも考えた。ただし5年ほど前、土器を焼いて、その土器でごはんをたいたり、じゃがいもをゆでようとしたら、まず土器を焼く段階で、3分の1はこわれ、水を沸かしはじめたらパンパンこわれていくのを見ていた。でも、今回困難なことは、皮をむくことぐらいだろうと考えていたのだ。

どんぐりが八幡様に落ちていたと、前週報告があったので、9月25日の自主活動の時間に拾いに行くことになった。みんなでワイワイ、ガヤガヤと、軍手やビニール袋を持っていったが収穫は0。池の鯉を眺めておしゃべりをただけ。そのうち内藤さん、古谷さん、吉田君、六角君、高橋君などが、いっぱい拾ってきた。小さなダンボール箱にそのまま入れておいた。学芸会・三小祭りとなり、三学期になってから「どんぐりだんご」を作ろうという声もでていた。

12月末で、望月君と小島君が転校することになり、その前になんとか「どんぐりだんご」を作りたいとなって、早く作業の終わった人が皮むきを始めた。ところが、ビニール袋の中は全部カビ。しかも皮をむいてもむいても、出てくるのは黒く変色した虫食いのようなのが多く、半分くらいに減ってしまった。ビニール袋から、出しておくべきだった。風通しをよくして干しておくべきだったと反省。マテバシイ・ウバメガンだけはカビにくいことが分かった。

実を入れてある箱の中が、見るまにへって行く。子供たちの集中力はものすごく、休み時間というところでも10数人が群がって皮むきをしていた。ところが不思議なことに、翌日になるとそれがない。生のままかじっている者がいたのだが、それにしても量が多い。どうしたことかと首をひねっていたら、びっくりするような発見をした。皮をむいた実は、翌日になると黒く変色するのである。それを見つけた者が、せせせと捨てていたという訳。これは皮をむいたリンゴが変色すると同様に、酸化するのだから水にでも漬けておけば防げるのではないかと、後になって助言を得た。仕方がないので、残った10分の1程の実を半日がかりで皮をむき、大量の水を入れた鍋で煮た。

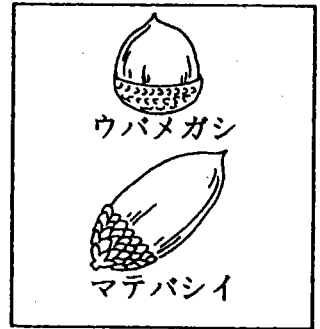
1時間おきに湯を代えながら煮た。1回目は、ブラックコーヒーさながらの色が出たが、4回目にはアメリカン程度になった。職員室に残っていた何人かの先生は、「どんぐりなんて一生に一度くらいしか食べられないから」と、1個ずつつまんでいた。中には「食中毒をおこすと嫌だから。」と拒否した人もいた。

全員でだんごにする程の量もないので、私ที่บ้านに持ち帰って、すりばちでつぶし砂糖と白玉粉を入れ、ふかした。黄名粉をまぶして出来上がり。

25日、通知表と共に「どんぐりだんご」が1人1個ずつ配られた。

夏休み、どんぐりを食べましたかとお年寄りに聞かなかった。今まで戦中、戦後、これを食べたという話も聞かない。あれだけアクを出すのでは、燃料のない時代では無理かもしれない。

古代人はどうしたのだろうか。先ず保存である。皮をむくのは、時間に十分余裕のあった生活だから可能だろう。でも虫食いや、カビにどう対処したのだろうか。米はこの点、たしかに便利だ。モミのついた米は保存したことがないが、一年以上押し入れの中に置いて、うまくいくと虫も、カビがつかない。なんの薬もなしで、保存可能なのだ。確かに米というものは、社会形態に一大革命を起こすものであったろうと、身にしみてわかった。来年みんなと一緒に学べるようだったら、もう一度挑戦してみようということになった。(1984・12/25)



### どんぐりの保存法

採集したどんぐりは、虫に食われないためと発芽をさけるために、その日のうちに30分程ゆでて、日陰で十分乾燥した後、天井裏などの風通しのよい場所に保存すると100年でも保つ。

<朝日新聞社・色川大吉編「多摩の歴史散歩」>

### どんぐりの名の由来

団<團>栗 = くぬぎ、なら、かし、かしわなどの椀形のからにはいっている実

<三省堂・「明解国語辞典」>

團 = ダン、ドン、トン、まどか、まろし、まろめる、あつまる、あつまり、かたまり、よりあい、聚合す、

栗 = リツ、栗は古字、

果樹の一。葉は長楕円形。初夏に穂状の花をつけ、秋とげのある殻に包まれた褐色の実を結ぶ。つつしむ、かたし、いかめし、おごそか、

<角川書店・「字源」>

くぬぎ = 「くぬぎ」は、桃の木、柿の木のように「くの木」が本来の呼び名でしょう。「く」はにがい。苦い実をつける下等な栗、すなわち「どんぐり」の実る木が「くぬぎ」です。

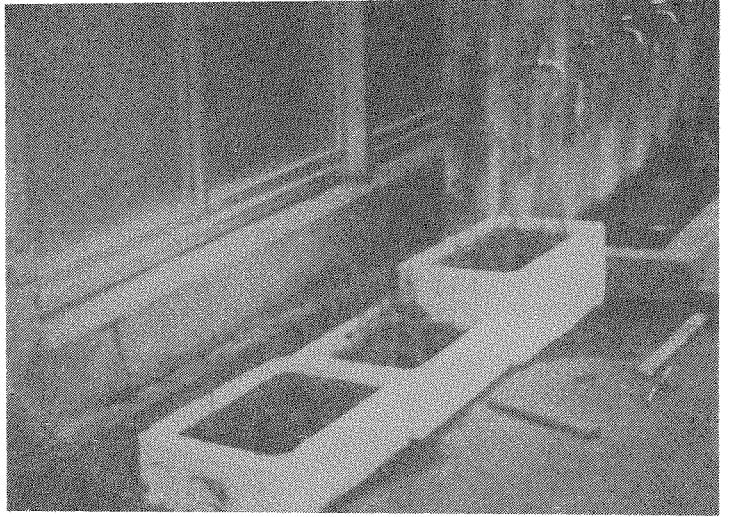
櫨<クヌギ>国男・「多摩の歴史散歩」>

くり(栗) は大和ことばであろうか。ドンはダンだとすると、中国からの伝来かも知れない。だとす

ると、古代人は何と呼んでいたのだろうか。

わたしたちの失敗談を聞いていた他のクラスのお母さんが次の年の5月岩手に旅行した際、掌の大きさのどんぐり団子を40個も買ってきてくださった。これを157名に分けて味わって、わがクラスも満足して、この試みは終わりました。

(陸稲と一緒に  
やった水田)



## (6) 狛江前史・化石掘り

6年生では日本の歴史を学ぶので、狛江の歴史を教材にしつつ日本の歴史を学ぶように組み立てていく予定で、地球の誕生から始めましたが、実際に狛江について取りあげられたのは、極少数のものになってしまいました。

まず、子供達は三年生で狛江のことは一通りやっているのですが、今までに何回か添付してきたが、5年生の国語で地域のことを調べた際に出てきたもので、ここより以前の箇所ではふれなかったものを並べてみます。

### 化石

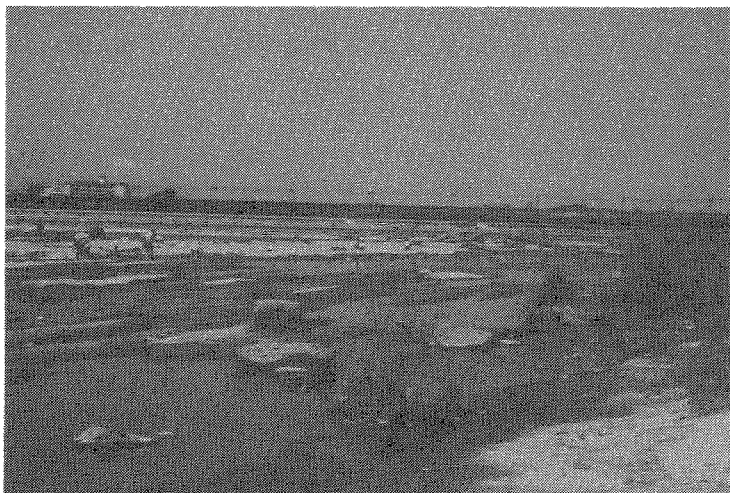
吉田 浩貴

狛江市の多摩川に化石がある。3000年から4000年くらい前の化石がある。化石としては、まだ子供みたいなもの、完全には石になっていない。

その化石は、貝・木・葉っぱがうきでている。

これは多摩の歴史の狛江の項に井上先生も次のように書かれています。

今から百万年以上前の狛江は海だった。多摩川の河口も青梅市付近にあって、上流の山々から押し流されてきた土砂は、前方に広がる海底にどんどん堆積し、海を次第に浅くしていった。このころできた地層は砂や礫からなるが、そのなかには蛤など浅海性の貝の化石を含むこともある。多摩川の宿河原堰堤のすぐ下流の、古い岩盤の露出しているところからも、貝類の化石が出ることはよく知られている。



(化石掘り)

私達は理科で地層の勉強も兼ねて多摩川へ化石を見に出かけました。



(化石掘り)

(化石掘り)





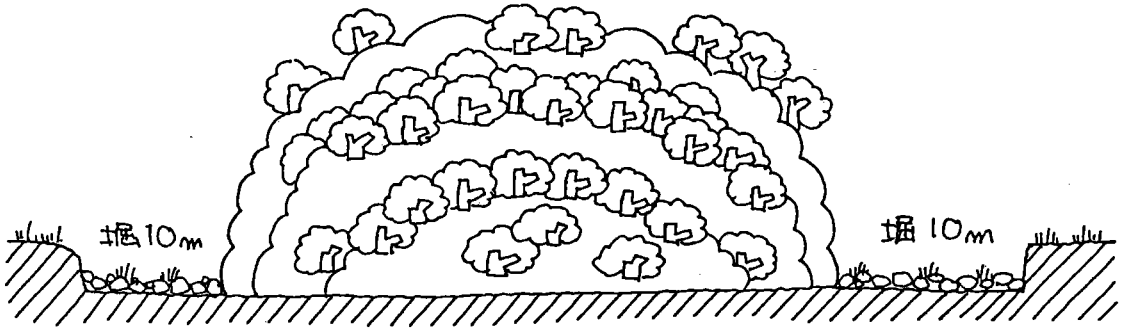
川はその日によって水の高さが異なり、私達の出かけた日は、一番深い所は股まで水が来ており、綱を張りましたが、足は水にすくわれ、大冒険でした。カラス貝のような直径30cm以上もあるのもみつけ、協力して掘りました。この日から気をつけてみると5・6年前より水位が高い日が多いような気がします。これも毎日調べてみて記録をとってみるのもおもしろいと思っています。

### かぶと塚

<石井 干城>

西山 雅巳

昔は、狛江のほこる古墳と言われてきたそうです。まわりに堀まであったのに、こわすなんてもったいないと思います。



今、そこへいってみると、ゴミや空かんがごろごろ捨ててあります。あまり、ひどいと思います。

かぶと塚は、りっぱな古墳です。もっときれいにしたらいいと思います。

三小は、古ふんだったそうです。円ふんで、赤松が古ふん一面に残っていたけど、三小をつくるので、とりこわされ松は切られてしまったようです。まだ、一・二本残っているのが、その証拠なのです。

かぶと塚には4年生の社会科見学で出かけたそうです。三小については、3年生ぐらいになると「三小はお墓の跡だっていうけど、本当？」という質問が始まります。でもそのお墓が今から千年よりもっと前で、土器も埋められていたものをみせてあげると、怪奇熱はさめて、石器捜しが始まります。図鑑と石をみくらべてみたり、休み時間というと畑にとんでいってみる。こうして卒業していった何人かは将来考古学者になりたいと卒業の日に誓っていますが、実現したらすばらしいものです。

私は、これを歴史くいずに作ってみました。

4月27日(土) 歴史くいずの中に付録として

1. 狛江というのは、どういう意味でしょう。
  - ア. こまわしの人たちがたくさんいたから。
  - イ. 狛犬がたくさんいて絵になる景色だから。
  - ウ. こまの人達が住みついた入江の意。
  - エ. こ(ちいさい)人が「まい」をするから。
  - オ. その他

3. 狛江には170ぐらいの古墳がありましたが今、ここだとわかるのは、どのくらいでしょうか。

ア. 150ぐらい      イ. 101ぐらい      ウ. 53      エ. 12      オ. 2      カ. その他

(1)に対しては、

山下 (エ) 小さい人がいた。

根岸      狛犬の狛は狛江に同じだ。

小林 (ウ) 中国から来た人、入江にすみついた。

黒沢 (ウ) 多摩川がある。住みつきやすいので逃げこんできた。

平井      狛江という名字の人がいた。

大塚 (ウ) 狛人が住んでいた。

土橋 (イ) よく神社でみかける犬みたいのがある。

沢田俊 (オ) 白いけものが入江の中におちついた。

(3)に対しては

鈴木 (エ) 2じゃ少なすぎるし50じゃ多い。

八幡 (エ) 目立つようなものを抜かすと。

根岸 (ウ) 170もあったんだから53ぐらいあってもおかしくない。

小林 (エ) 家とか道路ができたから。

平井 (オ) カブトヅカ、カメヅカ。

大塚 (オ) 同じ

土橋 (ウ) 感である。

沢田俊 (ウ)

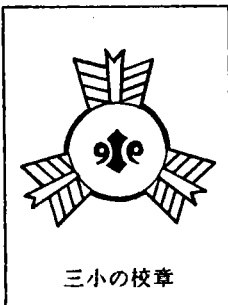
(1)の答えはウ、(3)の答えはエです。

狛江三小についても調べました。

<昔の三小>

小島 崇之

昔の三小は矢崎山という所にあったそうですが、そんなに大きな山ではなかったそうです。矢崎山には、松の木がたくさん生えていました。秋には、山のまわりに水田の稲が黄金色にかがやきました。八幡神社は昔、水がたくさんわき出て、冬には湯気がたっていたそうです。



32年の秋に三小ができて、同じ年の12月3日には校章ができたのです。校章の鏡は「正しく」、中のつるぎは「強く」、まがたまは「明るく」を表現しています。校歌にもそういうことばが使われています。

三小は昔、雨がふると田んぼみたいに草が生えて、カエルが出てきて校庭はぐちゃぐちゃになったようです。三小ができる前は、田んぼだったからでしょう。理科室にあるアオダイショウの標本は、山口先生がつかまえて、アルコール漬にしたのだそうです。

三小は狛江で一番最初に給食をしたそうです。三小には決まった服はあったけどいつのまにか帽子だけになってしまい、今ではその帽子もありません。

昔の三小の運動会は、かっこいいと思います。だって一番最初にハトをいっせいに飛ばして運動会という感じがでるからです。

三小には、こてき隊というのがあって三小の記念日には町中をパレードしたそうです。学校園にできたもち米で、もちつき大会をやってみんなで食べたそうです。また、体育館のそばには観察池という池もあって、アヒルがいたのでみんなはアヒル池と言っていたそうです。多摩川の上流の方に観察に行ったりもしたそうです。

三代校長先生の時に、地学園ができました。地学園は理科の実験で、川の流れなどに使われました。夏には、スクールキャンプなどもあったそうです。キャンプ・ファイヤーをしたり、自分たちでごはんを作ったりするのです。でも、今はありません。

ぼくはこれからも、三小をいい学校にしたいと思います。

<三小のむかし>より抜き書き

望月 貴史

プール工事もありました。プールができあがって、水を確保するために井戸を、プールの近くに掘ったけれども、すぐ岩盤に当たってできませんでした。小川の水は衛生上問題があるので、消防車のホースを借りて八幡神社の泉の水を入れたこともあったそうです。それで、プールの水はいつもきれいだったそうです。

学校給食は、狛江では一番はじめにやりはじめました。はじめは、料理を作るのは給食のおばさんたちですが、材料は先生たちが注文しにいったそうです。

いつまでも、三小がなくなることをないようにしたいです。

<三小の昔> 石井さんの話

沢田 明子

昭和32年に三小ができたそうです。

できるまでは、狛江では一小と二小しかなくて、30年頃、石井さんのおじさんが、三小をつくる場所を見にいった時に、はにわの破片をひろったそうです。それで、お墓だったとわかったそうです。あと、噴水門にある池は、昔田んぼだったそうです。

まだまだ子供たちは興味のあるままに聞いて書いてきました。

名字<姓>

<石井 干城さん>

伊藤 敬子

昔から岩戸のあたりに住んでいた人の姓は

西山・小川・久野・三杉・秋元・土屋・須田・石倉・高橋・曾我などが多い。

小田急線

<小林君の・・・>

大塚 国弘

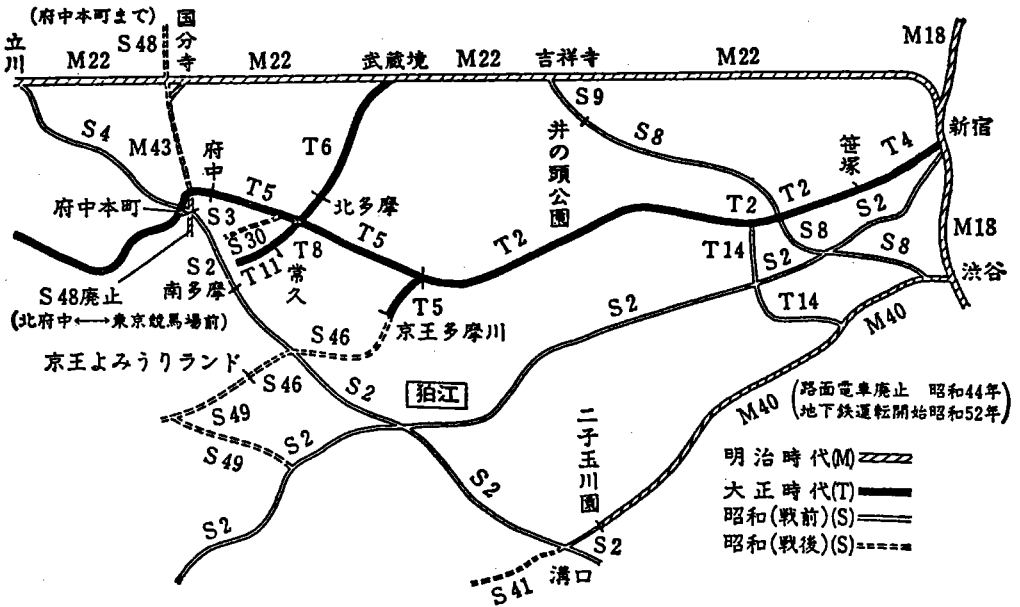
小田急線もむかしの車輛は貨物列車になっている。小田急線がしかれる前はとても不便だった。都心

へいくのに、用賀まで6Kmの道のりを歩いて玉川電車を利用していた。京王線が調布まで開通した頃は、国領まで2Kmほど歩いて、電車にのった。

小田急線が開通したばかりの頃は、まだのる人が少なかった。それで、小田急は沿線に住宅をたて、勤め人に貸して、通勤に電車を利用させた。

村のようすも、少しずつかわった。駅前にもお店ができた。農家の中には、土地を売ったり、貸したりする人も出てきた。また新しくできた住宅地に、作った野菜を売りに歩くようにもなった。農家の人は、遠くまで野菜を売りに行かなくなった。

(資料 2 1) 狛江周辺の鉄道建設年代(のびゆく狛江より)



昔 の 道

<小林君のおじいちゃん、おばあちゃんの話>

土橋 誠

昔の道は183cmぐらいだった。今はコンクリートだけど、昔はジャリだった。

<小林君のおじいちゃん、おばあちゃんの話>

沢田 俊祐

当時の道は石がしいてあって、その頃は自動車がなかったし、人力車もゴムのタイヤじゃないから、鉄のタイヤで走りました。だからガタガタ音がして夜ねているとうるさくてその音で目が覚めてしまうそうです。

それに、多摩川をわたるのに今のように橋はないから、その人力車を船にのせます。しかし、それをのせるのには相当力があるそうです。

<小林君の・・・>

柏木 祥文

ジャリ道が多く、雨がふるとぬかった。駅から家までくるのに、暗いところを通ると、おいはぎ(物とり)が出たそうです。

建 物

<小林君の・・・>

小林 哲也

家はやぶき、かわらぶきで出入り口はトンボロといって、土間でそこにネギなどをおいていた。

家とつながって、となりに牛小屋、馬小屋などがあり、はえがブンブンとびまわっていた。

子供の遊び

<小林君のおじいちゃん、おばあちゃんの話>

土橋 誠

今とちがって種類が少なかった。男子は、コマとかタコあげ。タコあげなんか、北風のビュービューふいてる中で、ふるえながらやっていた。女の子は、はねつきぐらいだった。

子供の服装

<小林君の・・・>

沢田 俊祐

その頃はもちろん洋服ではなく、着物でした。はきものなどはひどいものです。わらぼうりをはいているのは、まだましなほうです。はだしの子もいたそうです。ぼくは、雪がふった日はどうするのかと考えてしまいました。

お 正 月

<小林君の・・・>

沢田 俊祐

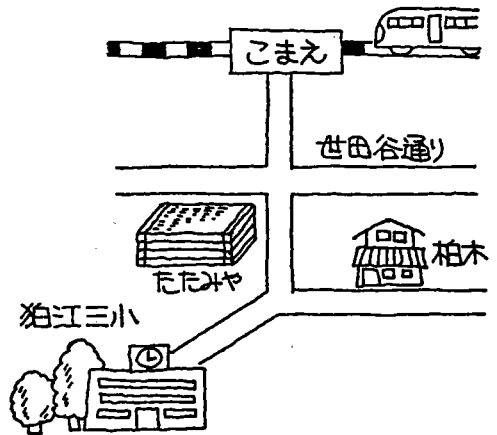
その頃と今とはあまりちがいませんが、コマ回しをしたり、タコ上げ、女の子は、はねつきなどをしたそうです。

おもちも、食べました。

<小林君の・・・>

野田 絵美果

狛江に生まれて、ずっと狛江にいるおばさんに話を聞いたら、1月15日に田んぼのなにもないところに、竹をとってきて小屋を作って、一晩泊まったりするということです。



この5年生の時に調べたことを土台にして信仰のところに添付しておいた岩戸八幡のことを鎌倉時代に授業の中で使いました。弥生時代は福音館の絵で見る日本の歴史でしっかりと狛江が田や畑に囲まれていたことを確認しました。

(7) 堅穴住居造り（この項、写真はミゾエ企画による。）

4月20日、大昔のくらしで、岩戸八幡のあたりにも沢山、堅穴住居のあることを知った時、橋塚君の口から「ぼく達も堅穴住居を作ってみたいな」という声が出ました。それにつられたように、あちこちから「作りたい」の声が出てきました。5月連休にかけて一週間ぐらいの時をかけて、堅穴住居について調べる宿題を出しました。その後、父母会でも話し会われ、学年全体として取り組んでいく方向で進められましたが、学習時間のこと、火事の心配、父母の手伝いのことなど、いろいろと問題に追われました。

たまたま、調布市立大町小学校で1983年に作られた高橋先生を紹介され、助言を受けに押しかけていきました。先生方に理解していただくために経過報告は必要とのことで、私もあわてて印刷しました。次にその一部分と子供達の作文を載せておきます。

— 経過報告 —

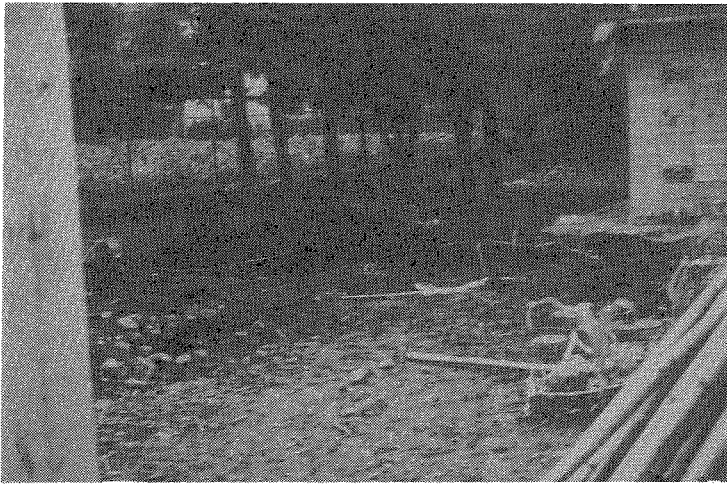
— 6年になって — 地球ができたところをやっていくうちに、この狛江に堅穴住居のあったことがわかった時、「石器を作りたい。堅穴も作って住んでみたい。」という意見が出ました。実は郷土の工業ということで西山君の糸工場の跡をみた時いただいた糸巻き器で糸をとる話が出て、綿を植えたり、蚕の手配をしました。堅穴住居や石器はえらく大変そうで、やりたくなかったのです。でも、子供達は、やる気充分、本でくわしく調べてきました。石器も田作りの際、工夫して作っていました。どんなに鉄が便利か身をもって理解しました。そこへ民族学の先生がきてくださり、お話とともに、美しい本物の石器をみせてくださったのです。

いよいよ彼等はとりつかれました。マンガ日本史という番組もみつけ出し視聴者がふえました。でも、人の名前がドンドン出てくる授業はテストの際は、理科や算数ほど点がとれないのは悩みでした。

カイコを飼っても桑を手に入れるのも大変でしたし、用務員の多田さんにはえらくお世話になりました。ますますおじさんに親近感をもったようです。

堅穴作りは大がかりなので校長先生のところへ委員長たちがお願いにいきました。許可をくださると同時に本物を見てくださいという助言もいただきました。町田の博物館までPTA行事として学級のお母様方が協力して連れて行ってくださいました。ここでえらく人間勉強もしてきました。

今、穴を掘りはじめ、4クラスが協力していよいよ作りはじめます。小屋を建てたことのある佐藤先生、多田さんという心強い方々がおられます。竹材や縄も父母の方からいただきました。模型を作ってください方もおられます。手伝いにきてくださる父母の方もおられます。麦わらをくださる方、タタミをほぐしてくださる方など数えきれない支えの中で、今始まろうとしています。今まで心配しつつ見守り応援してくださった方々へ開幕のベルの鳴るのをお知らせします。ありがとうございます。



(穴を掘る)



(材木の高さをそろえる)

<ねらい>

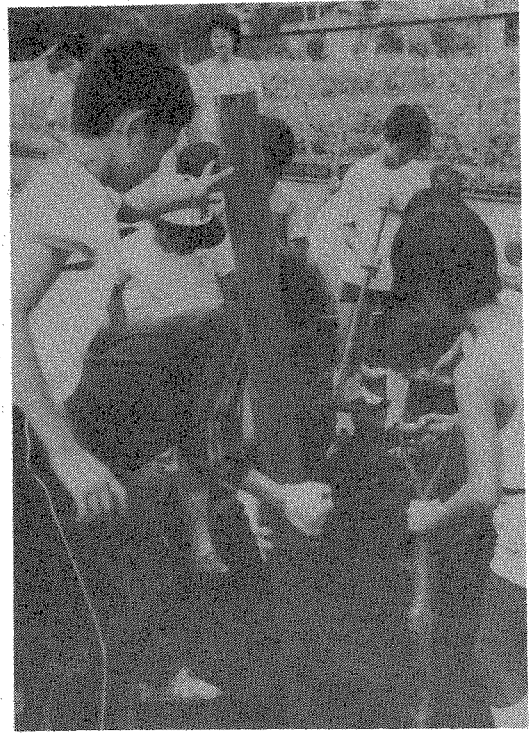
- ◎家を作ってみる。
- ◎家を作ることを通して当時の人々のくらしの様子を想像してみる。
- ◎最後まで責任をもってかかわってゆく態度を身につける。
- ◎一つのことをするのに沢山の人が協力して支えてくれていることを知る。
- ◎いろんな困難のある中で希望を失わずあきらめず道をみいだしていく。

<指導計画>

- |                             |       |
|-----------------------------|-------|
| 1. 大昔の人々が住んでいた竪穴住居について調べる。  | (1週間) |
| 2. 発表                       | (1週間) |
| 3. 実物を見学 (一部のクラス)           | (1日)  |
| 4. 竪穴住居の作り方を考える。 材料 大きさ 作り方 | (1時間) |
| 5. 作る                       | (8時間) |



（柱の穴を掘る）



（柱を立てる）

<前日までの準備>

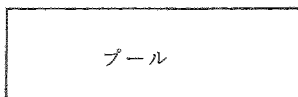
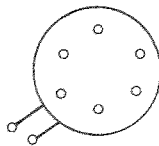
- ◎穴ほり （直径4m）
- ◎材料
  - わら — 吉岡君の家の麦わらをいただく。
  - たたみ — 尾崎さんからいただく。
  - 丸太 — 多田さんが木から提供。
  - 場所の設定 — 校長先生決定
  - 竹 — 平井さんがくださる。
  - 縄の注文 — 事務

<作業手順>

[1] 7月8日（月）

骨組み

[2] 作業場



木 竹

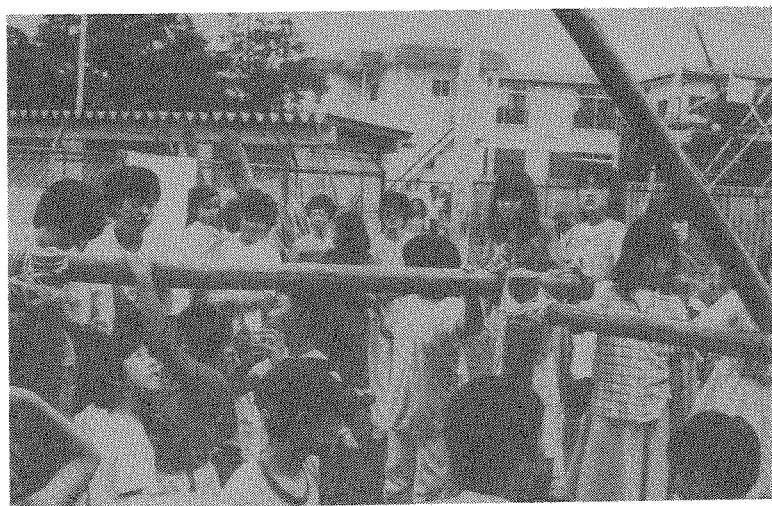
前日までの準備

穴ほり

木材  
竹  
綱

用具材料の確認





倉庫・ひも・わら

用具

- ノコギリ (6本)
- まき尺・竹びき (6本)
- ものさし・スコップ  
(6丁)
- 黒板, チョーク・木づち  
(3コ)
- 木バサミ・ハンゴ  
(1丁)
- 脚立 (3立)
- 紙バサミ (8丁)
- ライン引・カナヅチ  
(3本)
- リヤカー・材料箱・ベンチ



(細い柱を入れていく)



(入り口を作る)



(縄をかける)

7月9日(火)

わらをのせていく。

わら運びをする。

<材料と用具>

(1) 太い柱

長さ 1.9 m

直径 15 cm

本数 6本

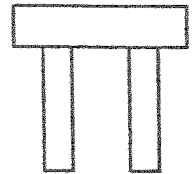


(2) 「はり」用の木

長さ 2.0 m

直径 10 cm

本数 6本



(3) 太い骨格を作る木

タル木(たての木)

長さ 3.5 m

直径 10 cm

本数 6本

ヤナカ(横にわたす木)

長さ 2.0 m 1.0 m

直径 8 cm 8 cm

本数 6本 7本

(4) 細い骨格を作る木(竹)

長さ 2.0 m

本数 73本

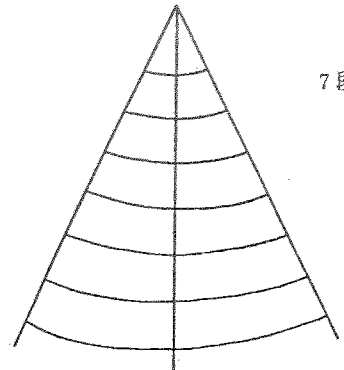
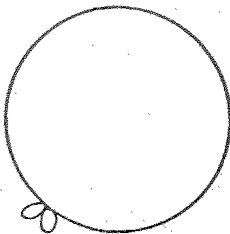
(5) ひも(麻ひも)

太いもの 400 m

細いもの 400 m

(6) わら

1束(直径10 cm) 円周30 cmくらい 500束以上

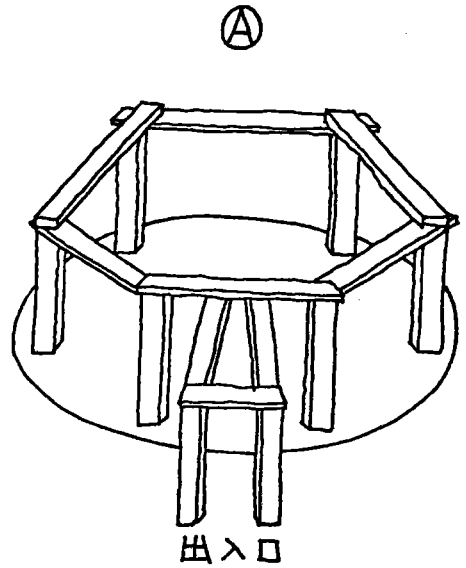
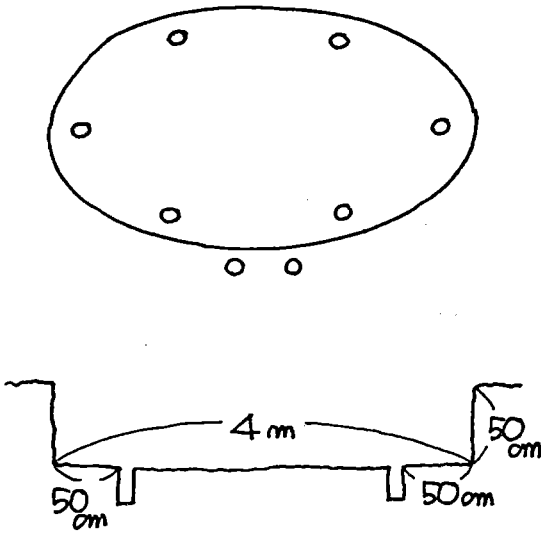


7段

# 堅穴住居の作り方 (縄文・弥生いりみだれて)

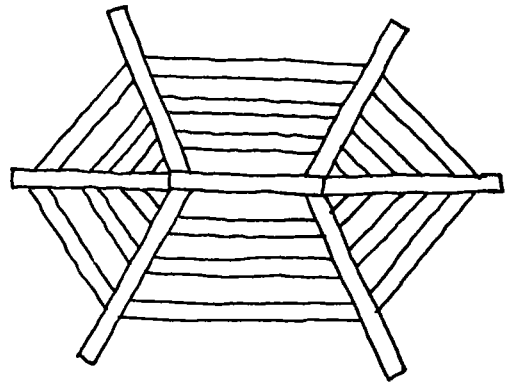
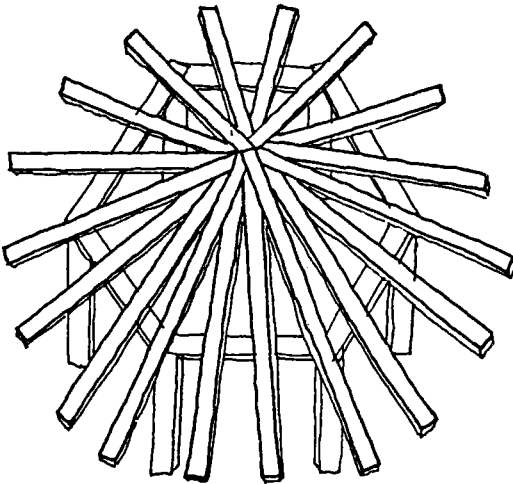
1. 穴をほる

2. 柱をたてる(柱の長さ1m40cm)



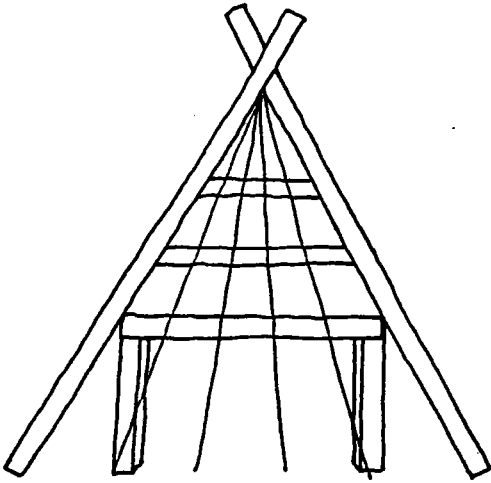
②

② を上から見たところ

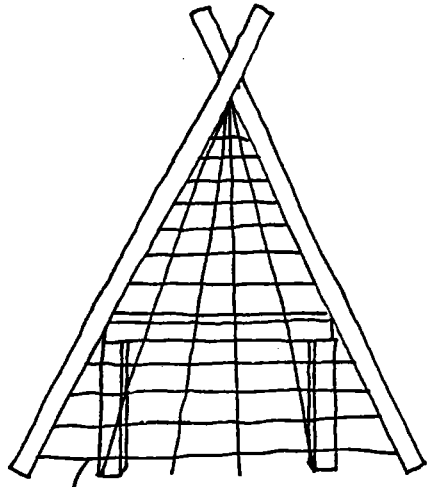


主な骨組をつくる

③

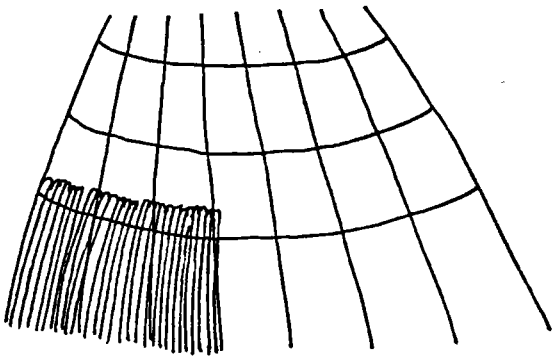


主な骨組の間に細かい竹を5本~7本(30cm間隔)にいれる(たての木をタシ木)

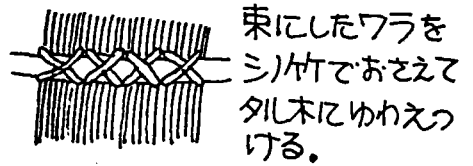


シノ竹をたたきわって横にとおしていく。(横にわたす木 ヤナカ)

3. ワラの束を下から川頁に上にふく。

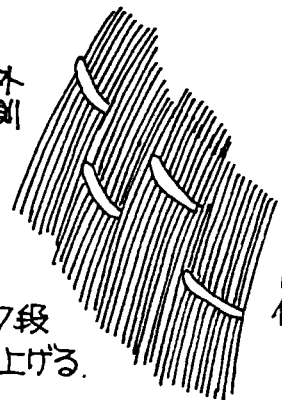


ワラの厚を20cm~30cmにふく。



束にしたワラをシノ竹でおさえてタシ木にゆわえつける。

外側



内側

ワラを6~7段かまねてふき上げる。

こんな具合に始めましたが、ワラは梅雨が長く多かったため腐り、思ったほど手に入らず畳をもらい歩き5軒ぐらいから三十畳近くをゆずってもらいました。縄の方も結局五倍近くの量になったのではないのでしょうか。きつくきつくしぼろうとして何重にも回したため、買い足すことになりました。日程のほうも7月9日(火)は途中までのワラかけに終わり、13日(金)に続きをやり、後片付けをしておわったのが7月17日(火)でした。この頃には炎天下ということもあって頭の痛いものも出始め、参加者も減ってきました。屋根の上も原始的なまま終わりましたが、三学期に最後の仕上げをすることにして一応終わりました。

### <堅穴住居作りについて>

#### ◎坂井 まり

私は、たて穴住居を作るのは本当にたいへんだと思うけど作りたいです。穴をほったりして、みんなあせただらでるのを想像すると(おもしろそうだな)と思います。それにやっとできた時の喜びなんていいんじゃないですか。私は、やらせてくれることはやらせてもらって、きん肉もりもりになり、たくましい女になりたいです。というのうそです。私は、たて穴住居、絶対つくりたい。上にのぼるのだってやってもいい。だけど、そういうのぼることは、ビビンパフミの方がうまいと思います。

#### ◎工藤 礼子

まず、私としては、とても面白そうなのでつくりたいです。ただ材料(柱、わら、かれ草、しぼる縄など)を集めるのはとても苦勞するとおもいます。

穴を掘るのだって、スコップは約40個もないと思うし、ほれない人もでてくるし、ほれない人にほってる人が文句いうと思います。約50センチってのは人間の手ではかんたんにほれません。その他にもいそがしいことはやまほどありますが、自分たちで決めた事だから文句はいえないとおもいます。

#### ◎土屋 れい

私はやりたい仕事は、わらをはこんでくる仕事です。たて穴住居とか作るのはだいすきです。一人でもさぼると、ぜったいに予定までできないと思います。私は今はりきっているけれど、後からだいじょうぶかなあと思っています。

力仕事はまかせてください。

#### ◎瀬之口 里砂

私は、最初作りたいたい人といわれて手をあげた。何も考えないで、ただ手をあげた。たいへんだと聞いて、いやになった。作りたくない。いやだ。そう思った。でも、また少しして野村先生が、こういうのだと教えてくれたので、こんどは作りたくなかった。おもしろそう、たいへんそうだけど。私は、穴掘りはやりたくない。物をはこぶのとかをやりたい。高いところに登るのもやだ。吉岡君の家にリヤカーで行くのもやりたい。でも、できるだけ協力したい。

### ◎六角 耕治

ぼくは、もけいとかを作るのが好きだからつくってみたいと思っています。でも高い所にのぼるしごとだけはいやです。なぜかという、ぼくは大の高所きょうふしょうだからです。

〈たて穴住居を作り終えてからの作文〉

### ◎西山 雅己

今日の児童集会でたて穴住居のことの注意がありました。「ぼくたちはたて穴住居を作りました。」などといっていました。「ゆめみたいに思っていたたて穴住居をつくった。」などなど。

ぼくは、そういえばとても苦勞したなぁと思い出しました。まず穴を40～50cmほりました。石やレンガ、ガラスくずなどでできました。そして、なんともいえないのが、お金がでてきた。しかし、まっ黒でこれがお金なの？ など思っていました。でも、よく見るとなんとなくお金というかんじがでてきました。でもなんで、お金なんかうめたんだぁ、などと考えていました。と思うところでは、水が柱をたてる穴にでてきたのです。ウヒー、いろいろな物がでてきました。このごろ暑くなってきて前より汗がだらだらぁ。暑くてたまらないなぁ。あついな。それに力がとてもいるなぁ。などと暑さのせいでぼーとしてきた。柱たてがおわって、ぼくは塾があるので帰りました。塾へ行っても、たて穴住居はどこまでいったかななどと考えていました。次の日、どこまでいったかが心配で急いで学校へいきました。学校についたとたん、ひえーとおどろくのもむりはありません。たった四本の柱が立ったのはしってるけど、こ、こりゃーすごいや、四本の柱が二十本ぐらいになっていた。いそいでいってみました。よくみると、ひえー出入口まで、できてらーとびっくりしました。たった一日でこんなにかわるなんて、ずいぶん苦勞しただろうな。あとは、わらかけぐらいかなぁ。あぁ楽しみだ。はやく完成しないかな、楽しみだ、楽しみだ。次の日、わらかけだぁ。わらかけはとてもむずかしいとは、思っていたけど、わらかけかー。またまた、ためいき。「はー」「はーあ」などとあの時は、とてもとても苦勞したことがかりだった。今考えても、とても苦勞した。そして、いちばんむずかしい、あの、あの、むずかしいわらかけだ。「何事も、ちょうせん、ちょうせんだ。よーし、がんばるぞ。」この時、やっとならふとファイトがわいた。ここから、熱心にやろうといっしょうけんめいになりました。

「たて穴住居が作れるなっ。」て思っていたのがもう完成間近かになった。

6の3だけでなく他のクラスも協力してくれました。わらかけも、もうちょっとというところで新聞までできました。朝日だってだれかがいいました。

### ◎内藤 光恵

六年生の歴史で出てきた、たて穴住居を私達六年三組は作りたいと言いました。まず校長先生のところへ行って許可をもらおうと、三組の代表の人が校長室へ行きました。校長先生は作ってもいいですよと言ってくださいました。私達はまず、わらを集めたり、木を集めたりしました。

用務員の多田さんが木を用意してくれました。わらは、タタミ屋さんや、いろいろな人に協力してもらってたくさん集まりました。材料は集まったのですが、わらを結ぶ結び方を覚えなければなりません。私なんか全然わからなくて苦勞しました。古谷さんもわからないらしく、苦勞していたので、やっとならふと覚えた私は、「ええー、わかんないのー」とか、きどっちゃっておしえてあげました。準備がととのって、

作業にとりかかりました。まず、大きな穴をほりました。この作業は、雨がふったりしてなかなかすすみませんでした。雨がやんで、今度は、みんなで木を切って柱を作りました。この時、写真屋さんや、多田さん土屋さんのお父さんも来て下さいました。おかげでずいぶんたすかりました。

次の日、竹をくんだりしいのですが、私は残らなかったため、その時のことは、よくわかりません。次の日は、細い竹をつけました。私は、昨日行かなかったので、「わー」とか思って、竹に登ろうとしました。すると、男の子に「おまえがのったらこわれるからのるな！」と言われました。このこと、とってもいやだったので、これから言わないでほしいと思います。それからどンドンたて穴住居はできてきました。わらをつけて、とうとうたて穴住居ができました。

私は、中に入ってみたけど、くさいし暗かった。昔の人たちは、こんなところに住んでいたのかと考えると、うそみたいです。だって、こんなに暗くて、こわれやすくて、夜なんかこわいだろうと思います。私なんかこんなとこで住めないと思ったりもします。こんなふうにしてみんな、とても苦労して作ったたて穴住居、いつまでもとっておきたいです。

でも、私は、こわさなくちゃいけないかなとか思います。だってプールにわらがういてたりしているから、他の先生方にめいわくだし、虫がわいたりすると思う。でもできるなら、とっておきたい。せっかく作ったんだもん。もうすぐ卒業だから三小に思い出のこしておきたいし、来年の六年生の勉強の時に役だったらうれしいし。だから、たて穴住居は、とっておいたほうがいい！

でもそのためには、こわれたら修理しないといけないし、小さい子たちとかがケガしないようにしないといけないし、いろんな人に迷惑かけちゃいけないから、いろんなことしなくちゃ。

たて穴住居は、とっておくべきかこわすべきか。これからは、作るのではなく、このことでなやみそうです。

## ◎榎元 春也

### 最初

「昔の人の家を作りたいネ。」といったのかな？なんか、みんなが作りたいというから、先生が、校長先生に許可をもらってくれたんです。それから作るには、作り方がわからないとできないので、先生は「？曜日までに、国語のノートにたて穴住居の作り方を書いてくること。」とみんなの宿題にしました。だから、みんな「図書館にいこうよ。」とか、「ねー、みんなで調べよー。」とか、いろいろいってました。その日になり、うっかり忘れていた人は朝、たて穴住居の作り方を、学級文庫の本からさがして忘れた人たちが書いていました。それから、町田の美術館に日曜日に行くことになりました。たて穴住居を見に行くためです。でもその人が、おじいちゃんとおばあちゃん、ちょっとのことでおこるみたいでみんな不気げんでした。私はその時、いとこの集まりでせっかくのとこ、いけませんでした。それから何日かたち……。

「いよいよたて穴住居の穴ほりをします。」と先生が言って、何人かの人が、ヤッター！と言って、放課後のこれる人たちで、穴をほることになりました。

最初に、どのぐらいほればいいのかわからないので、ひもでくぎりをつけ、そこからずうっとほっていききました。石をどけたり土をおいたり、信田さんなんか、ミミズ集めをして、おもしろがってました。私も時々、穴をほらしてもらったりして、どろだらけになりました。もうくつはぐちょぐちょ、足はどろだらけで、帰ってすぐにシャワーをあびました。次の日も穴ほりで、くつがたりなくなる！同じく

らいによごれてしまいました。次の日かな？ つゆで穴の中が水びたして、雨がふってるのでぜんぜんできませんでした。雨はザーザーふって次の日もふってました。やっとくもりの日になっても、穴の中がびしょびしょなので、やったのかやらなかったかは、わからないけど……。

はれの日、校舎の裏に植木があり、その植木についている竹をとる作業をしました。すごくがんじょうで竹をとるのに、ひと苦勞でした。ひもと、はりがねで結んであるし……。そのころ、穴ほりの人もシャベルで一生けん命やっていたようです。次の時の仕事は、骨組みの仕事でした。大黒柱を作るために、土屋さんのお父さんが、手伝いをしてくれて、仕事ははかどりました。でも、下の土がまだやわらかくおもちのようだったので、プニョプニョして、かためにくかったです。そして“おみき”をすることになり、だれかがお酒を買ってきて、大黒柱に一本ずつにお酒をかけました。おみきが終わり、骨組みに入りました。私は少し不安で少しドキドキしながら、竹をひもでむすびました。そういうことが何回もやっているうちに、なれてきてやっていた。帰ったら、手がものすごくいたくて、手ははれていました。うでは、ミミズばれができ、とてもいたかった。何日かすぎ、骨組みが終わりました。たて穴住居らしい形になってきました。私は少しうれしくなりました。でもうかれてはいけなくて、わらをたばねて、骨組にくっつけなければいけない。だから、わらをたばねてひもでむすび、おいていきました。多田さんが、わらのつけ方のお手本を見せてくれました。「これは、ここにとおしてー。」と一生けん命おしえてくれました。私は、野村先生がやる手伝いをしました。

「いーい？」

「いーよ。」

「下の方」

「はいノ」

「ひもとった？」

「とった。」

「まだとれてないよ。」

「あっ、とれたノ」

と、こんな調子でやっていたけど、私はへたなので上手な小林君とかわりました。でも、それは無言に「もうちょっと上の方にやるんですってノ」と言ったから全部ぬったわらははずして最初からやりなおしました。

7月18日(木)

校長先生が朝のお話で子供達にたて穴住居について話して下さる。その後子供達のたて穴住居委員会が全校生に説明するが、ものすごい拍手で迎えられ、シーンと静まりかえった中での発表で、えらく6年全体は感動していた。布に書いた縄文人をみせながらの説明であった。その原稿は下記の通り。

黒沢 友和

みなさん、たて穴住居を知っていますか？このたて穴住居は今から二千年もの前、児童館の先のほうにいっぱいあって、この様な人がいっぱいすんでいました。

ぼくたちは、授業中に習ったことをやりたくって先生方にたのんで、たて穴住居を作りました。昔の原始人は、体格もよく力持ちでぼくたちが一ヶ月もかかって作ったものを一日で作ったといわれるほ



どです。

ぼくたち六年生は、たて穴住居をプールの裏に作りました。校長先生に場所をもらったり、なわをかたり、土をほったり、木をさがしたり、わらをもらいにいったりたいへんなことがいっぱいありました。

次のことだけは守ってください。

1. むだんでたて穴住居に入らないこと。
2. たて穴住居をこわさない。
3. たて穴住居にのぼらない。

たて穴住居はこわれやすいので、これらのことをまもってください。

一生けんめい作ったたて穴住居を大切にしてください。

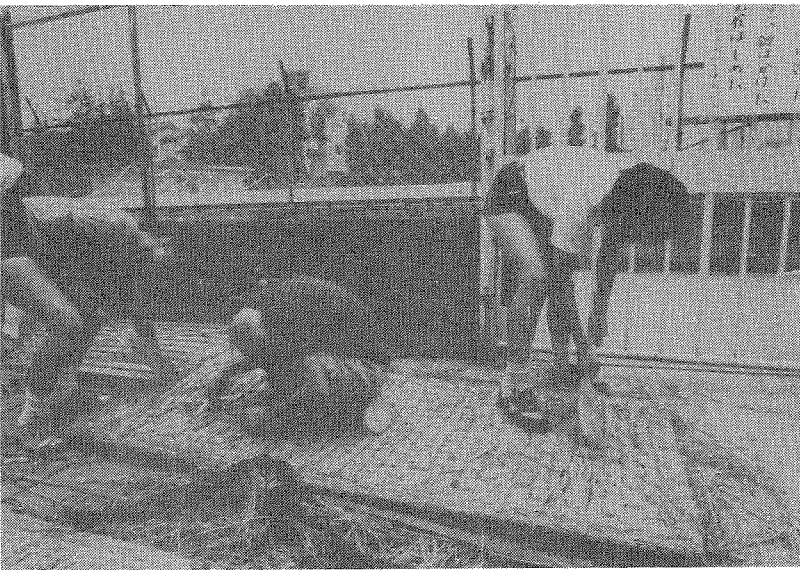
6年たて穴住居委員会からでした。

6月の末から7月いっぱい全クラスで取り組んで「古代人のしたことは簡単ではない大変なことだったのだ。協力して作りあげられたので、一人だったらできなかつたろうし、一クラスでも無理だったろう」というようなことも実感しました。又、くらしの窓や読売新聞、十二チャンネルで朝のニュースワイドなどに取り上げられたことも、子供達にとっては珍しい経験でした。この時のくらしの窓の記事を添付しておきます。

(わらのしばり方を教わる)



(わらをかける)



(わらが不足して)  
畳をこわす。

(わらをたばねる。)



(竹針に縄を通す。(中と)  
外で声をかけあう。)



(下からわらのたば)  
を投げ渡す。



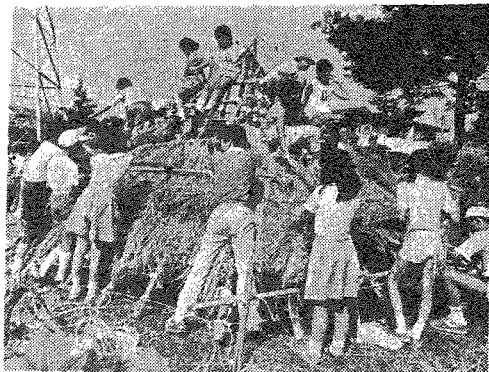
てっぺんを  
(まとめるの)  
が大変

(いよいよ入り口)



# 校庭に「夢」建てる

## ワラにまみれて縄文の住居再現



みんなと一緒に屋根ふき(9日、第3小で)

「縄文時代の家作りつたいへんだったんだね——泊江市緒方二二二の市立第三小学校(高橋賢校長、児童七百六十七人の六年生たちが、縄文時代をモデルにした穴式住居の再現に取り組んでいる。この住居は卒業記念として校庭裏側のプール横に建っているもので、直径約六尺、高さ約一八尺の本格的なもの。夏休み前の完成をめざし四クラス百五十六人の児童たちは毎日早朝の最中だが、同小では保存も利用の方法を検討しており、後進たちへのかしプレゼントになりそうだ。

### 泊江3小の6年生

## 先生や父母動かし でっかい卒業制作

計画が持ち上がったのは去る五月。社会科の授業で市内に縄文時代の穴式住居があったことを知った児童が「実物を作ってみよう」という意見がとび出した。本で調べるなどの自主学習を続ける子たちの熱意に先生や校長も動かされ、卒業記念として制作することが決まったもの。早速、準備に入った児童たちには父母や地域も協力、「実物を見たい」という高橋校長の提案で、町田市本町田の市立博物館の穴式住居へ見学に連れて行ったり、住居作りにかかせないひもの結びかたの指導、ワラなどの材料集めを行った。

準備が整った六月下旬から児童たちは交代で毎朝の朝練を縫って作業に着手。まず、床になる直径四尺、高さ〇・五尺の穴を掘った。短縮授業になった今月八日から本格的作業を始め、児童たちは手分けして骨組みに使う木や竹を切り、深い柱を掘った。後、柱が家の骨格を組み上げた。

しかし、半分ほどを終ったところで、材料が不足。あわてて探したが、取壊しは許されるためワラはなく、ようやく探して古畳を掘屋に習ったまじに解体したが、この日は時間切れで、材料がそろわずで作業を打ち止めた。普段味わえない体験、手つきはあはれつかなかったが、子どもたちは夢中。交代で参加するようになった。

九日から工事のポイントである屋根ふきになり、先生や父母の応援を得て取り組んだ。町田市立博物館で「屋根ふき」はプロでなくては無理」と言われたが、児童たちは熱心にチャレンジ。農家や機店からもつたりヤカー三分のワラや、古畳二十枚をほくした材料を運んで束ね、下から順にふき上げた。

学校側では、一年生以来、みんなが協力して夢を実現する作業は、平常の授業ではなかなかできない貴重なチャンスと評価、児童たちは得意がかったら、この家を使って古代人の生活をしてみたい」と早くも次の夢をふくらませている。

(8) 子供達の遊びについて

堅穴住居作りに追われて、社会科の授業へはこのあと、狛江の歴史を教材として取り入れていくことができませんでした。ただ作文の時間に遊びについて書いてもらったので、聞き取り調査をした方達の方と合わせてお読みいただければ幸いです。

・西山さん(明治40年11月26日)

子供の頃、魚採りは好きだった。今の岩戸川の下の方、喜多見よりの所に「どう」をかけた。ガラスのをかけて、こっちから入って、こっちは出られないようにきれがついている。お昼に行ってはあげていた。

多摩川は鮎つりに行った。夜中に行つて場所を確保した。釣れるときは、6月1日が解禁だったので、12時すぎると合図の花火があがって網打ちをする人がいた。鮎はよく釣れて家族皆で食べるくらいであった。岩戸川にはしじみがあった。どじょう川にもしじみがあった。ザリガニもよくいました。

・石黒さんと谷津田さん

男の子は多摩川で釣をしたが、谷津田さんは、朝鮮の人が砂利を掘った後にしじみがあったのでそれをとった。

<子供達の遊びについて>

7月11日に、国語で遊びについての作文を書いた。正月にした遊び調べでは下の様な結果になっている。ついでに、おぞう煮調べの結果も一緒に入れておく。確かに変化はしつつあるが、さりとて私が子供の頃、今から30年前とそれほど変化があるとは思えない。子供の作文を入れておく。

1985年お正月にした5年生の遊び

サッカー	18人	テレビ	7人	バドミントン	3人
トランプ	9人	こままわし	5人	百人一首	1人
たこあげ	9人	カルタとり	3人		
はねつき	7人	ローラスケート	3人		

1985年1月1日おぞう煮調べ 38人

おぞう煮を食べなかった人 10人

おぞう煮の中身は、

黒沢君	
ごぼう	かまぼこ
人参	おしょうゆ
いも	とり肉
おもち	

八幡君	
もち	
かまぼこ	
はっぱ	
のり	

小林君	
しょうゆあじ	
みつば	
もち	
かまぼこ	

川崎さん	
大根	
さといも	
とり肉	
おもち	
こんにゃく	

西山君	
もち	
おつゆ	
大根	
人参	
さといも	
ごぼう	

◎絹山 朋子

今、とっても興味があるのは、おかし作りとか、ラジをを聞くこと、ほとんどひまな時にはおかしの本を見ながらラジオをきいたりする。そして、今度は何を作ろうか考えるの。おかしを作る日は、たいてい日曜日。大好きなラジオを聞きながら。このあいだはマシュマロを作ったのです。もちろんラジオを聞きながら。日曜日にいつも聞くのは文化放送の歌ようせんぱつ・生放送で3時間半もやるのです。その間に、電話リクエストをとって最後の1時間にベスト50を発表します。電リクをとってる間、いろんな歌手の新曲などを流します。ですからとても、じょうほうがはやいのです。いつコンサートをやるとか、レコードの発売日がいつとか。おっと、大事なマシュマロのこと。マシュマロを作るのは2回目。このあいだは、レモン味のものを作ったけど、今度はココアです。マシュマロって作るの難しいと思ってたけどけっこう簡単。いつも作ってるのは、私1人だけけど友達を呼んで作ったらもっと楽しいんじゃないかな。このあいだは、少し暑かったせいか、なかなか固まらずに、少ししっばいしました。でも、しっばいを重ねてこそおかし作りのうでは上がるのです。それに家の人も、おいしいって聞いていたし。ラジオを聞いたり、おかしを作ったりとかって、たくさんの人とあそぶほどおもしろくないけど、とっても楽しいこと。テープにとったりっていう時は、ステレオ放送のFMにかぎります。一週間の放送予定を見て「あっチェックカーズの特集」なんて時は、ぜったいにテープにとるし、出かけるからとれないとかいう日は、タイマーでしっかりとってます。

◎黒沢 友和

ぼくのすきな事といえば、まず「いたずら」だ。たとえば、空き地で昼間友だちと花火をするだとかへいにのぼって忍者ごっこするだとか、かたくり粉のねんどを作ってみたりまだまだいろいろある。

やっぱりそういう事をしてると、おこられる。でも、そのスリルといつかなんといつかわからないものがおもしろい。それによくけがもする。草で足を切ってしまったたり、多摩川で足を切ったり、すっころんですりむいたり。中学生とよくけんかもする。たいてい女子とだ。すごいっばってて、二中や喜多見中などとよくやる。たいていむこうから文句を言ってくる。それに口ごたえするとけんかになる。

中 「おまえら、ちょっとさわぎすぎだぞ」

ぼく 「うるせー、おまえらもうるせーぞ」

中 「なんだ、このやろー」

たいていこんなようだ。たいてい二中の三年と二年とやる。相手が近くにいる時は、あまりやらないけど。遠くにいるときはすごいこともいう。「ふざけるなー、ガリガリのハンパ者。」といった時もある。「てめーら、くるならきてみる。」といった時もある。ほんとおいかけてくることもある。つかまったらさいごだからいちもくさんににげる。しらない人の庭に入った時もある。自転車をたおされた時もある。そういうことはよくないことだけど、スリルがあったり。

また、おこられるのにもスリルがある。又こんどは、新しいいたずらにもチャレンジ。

◎柏木 祥文

ぼくの好きな遊びはサッカーです。なぜなら、ぼくはキーパーかバックをやっています。キーパーの

場合だったら強いシュートをとったりすると、なんとなくいい気持ちが出てきます。四年生の時スカイブルーというチームに入っていてキーパーをやっていました。PKのとき運がよく真正面とかポストかで勝ち進んできました。だけど準決勝の時4対0で負けてしまいました。五年生になってもキーパーを6年でもやっていました。だけど他にも、ぼくよりうまいキーパーが出てきて、あまりキーパーをやることなくバックをやっています。だけど、バックもやっているとわりかしおもしろくて今やっています。バックはとめるとすごく気持ちがいいです。ぬかれると、このくそと、おもってまたおいかけて止めようとします。けどもうだめだとおもってあきらめたら、その人はシュートを打ちました。キーパーがガッチリ、キャッチしました。ぼくはキーパーでもバックでもやっていました。フォワードはたまにやります。けど、ほとんどはバックです。

#### ◎沢田 俊祐

ぼくがよくやる好きな遊びは、吉田君や、土橋君とヌンチャクで「ブルースリー」のまねをして遊ぶ事や、ブルースリー主演の「死ぼう遊び」をみて勉強する事です。たまにやる遊びは、「けいじごっこ」です。大体やるメンバーは決まっています、吉田君、浅沼君、ぼく、井口君の4人です。モデルガンとトランシーバーをつかってあそびます。4人がグーパーで2人組になってけいじつドロボウを決め、ドロボウはビルや林とかにかくれます。それを、けいじはピストル、トランシーバーをつかってさがし、つかまえます。たとえば、ドロボウがかくれています。けいじはトランシーバーをつかって「おい、ドロボウが今、林の方にむかったぞ。お前は公園の方で待ちぶせしろ。はさみうちだ!!」とかいって、みかたに情報を送って見つけたら、「いたぞ!」とかいって、モデルガンで「パン」とうったりしてつかまえます。やっているともう無我夢中になってしまいます。ヌンチャクごっこは、吉田君がうまいので、ぼくは、松竹梅のコースの竹を選んで教えてもらっています。吉田君は、とてもうまくて、うなりをあげてまわします。それをまねして勉強します。「死ぼうゆうぎ」の方は、ビデオでとってあります。それを「コマおくり」でみてまねをします。吉田君も「勉強になる」といってみえています。まねをしてる時、ひじにあたっていたいおもいをします。

ぼくの遊びは、こんなとこです。

#### ◎古谷 有起

私の、とても好きな遊びは、絵を書くことです。雨の日だってできるし、自分で好きなものを書いてると、とても楽しくなります。まんがや本を読むのも好きだけど、書いたりするのが大好きで、小さいころからそうです。一人で書く時もあるけど、友達同しでかくのは、相手の書いているのをみていると、おもしろくなってきます。やることなくなくなってきても、紙とえんぴつとけしゴムさえあれば、いつでもかけます。部屋で、トランプやゲームも好きだけど、やっぱり私は、えんぴつをもっている時がいちばん落ちついてます。時々、「うまいねえ。」とか「何これ。」とか、友達でかいた絵を見せあったりします。うまくできるとうれしいけど、うまくできないとかけるまで何度もれんしゅうします。国語が苦手じゃないのは、まんがをかいているのと関係あるのかなあとと思います。でも関係なくもないみたいなんです。みんなから自分の絵をほめられると、とてもうれしくなります。その時、もっとがんばってかこうと思います。これからも、もっとかこうと思います。マンガや絵は、私のしゅみです。ふだんは、いつもなにげなくかいてるけど、やっぱり考えなおしてみると、ひまな時は、しょっちゅうかいてるん



だなあとつくづく思いました。

◎信田 祐子

ドミノを作って遊びます。家には本当のドミノがないからブロック(レゴ)の穴が8個の長方形、6個の長方形、4つの正方形を小さい順に色わけでならべ、輪にしたり、直線にしたり、カーブを作ったり、ある物をよけさせたりして1時間ぐらいで作ると、一番初めのこまを手で(ポン)とかるくおすのです。こまとこまの間がせまいと早く広いとゆっくりたおれます。神経を使うのでいいと思います。レゴだけでなく5×3の紙をいっぱい切ってそれをまるめて直線にならべます。直線でないときはとちゅうでこわれてしまいます。そんな時、「あァア、せっかくここまでがんばったのに」と言い思います。

将ぎでもします。大きい順、小さい順、まん中にスタートからゴールからも大きい順にそれか小さい順にならべたりいろいろ工夫しています。人間ドミノ、えんぴつドミノ、マンガをならべドミノナーンてたつものだったらドミノはできるんだ。私がドミノをやるうと思ったきっかけは、「ドミノだおし世界一」という番組を見たからです。なんだかとても楽しく感じて弟に「ねっ、ブロックでやってみようね。」と行ってさっそくやりました。初めは失敗だらけで、やだなァと思っていただけだんだんうまく早くなりました。そう思うと楽しくなりました。

◎大塚 国弘

ぼくの最近の遊びは、ファミリーコンピューターというゲームです。ファミリーコンピューターは略してファミコンと言います。それはテレビゲームでカセットを入れてセットするとテレビにうつります。ボタンをそうさして主人公を動かして楽しむというわけです。カセットはいろいろあります。だからいろいろなゲームであそべます。外で遊ぶのもいいけど、人が集まらなないと、ファミコンをやります。たまに大ぜい集まるとランナーばさみとかサッカーなどやります。公園でおいかけっこをやったり、かんけりもします。おいかけっこなどは、「かなあみ」や「ブロックべい」などを利用してやっています。広い所でなんにもない所でやっても、ぜんぜんおもしろくないです。たまに雨がふったときでもあそびます。雨にぬれるけどおもしろいです。外で遊ぶときは、古宮君や大成君とよく遊びます。たまに市役所などいっておもしろい本など読みます。歴史くいつのために「おだ信長」とかの歴史の本を読みます。アニメの本も読みます。アニメの本はテレビなどのことが書いてあってカラーだからカラーのことがよくわかります。遊びではないけど、時々狛江中の銭湯へいっています。

◎川崎 順子

私の好きな遊びは、いい事じゃないけどマンションなどで、おにごっこをして遊ぶことです。1つだけではありません。かわいいお店で、かわいい品を選んだりも好きです。友達と遊ぶ約束をして、ひまでブラブラしていたら私が相手が「マンションでおにごっこやらない？」と聞きます。だけど人によって「おこられるんじゃない？」と聞く人がいるので「大じょうぶ、キャーキャーさわがないでふつうに歩いていたら、分からないよ！」というと「それもそうだね」といってエレベーターを使ってよく遊ぶものです。見つかっておいかけられたら、すぐにエレベーターにのって、おにと分かれ、おにはエレベーターがどこで止まるのかまって3階だったら3階まで階段で行くのです。そのはく力が大好きです。つかれたら、と中で休んでまたやります。「キーン、コーン……」5時の鐘がなったら「そろそ

ろやめよっかノ」といってマンションをでます。そのあそびがとっても好きなのです。遊びの中の、かけまわる遊びは、これが一番ノ女の子らしく、駅とかいってロビンー丁目一番地などに入って、クーラーですずしい時に、ヘアピンとか、歌手のプロマイド、その他ノート、えんぴつ、ポシュエットなど色々えらぶのが好きです。お金が少ししかなかったら、あまりいいのはかえないけれど多くもっていればその分いっぱい買えるから、ショッピングみたいで、大人の気分のように好きです。今だったら、マンションにおにごっこ、かわいらしいお店で、かわいい物をえらぶ事です。

お正月にした遊びにサッカー・ローラースケートがあるが、このあたりは私の子供の頃とは少々変わっています。しかし、マンションという建物を使っての鬼ごっこ・ラジオを聴いたりお菓子作りなど完全にもう都会の遊びでしょう。狛江はもう農村ではなく都市の中の一機能・一細胞といえるのでしょう。

## (9) 布芝居

当初の計画では、地図の中で用水を確かめ、実際に用水を観察し、用水がどのように出来たのかを調べ、その変化の原因を捜ると共に教材化し、子供達に用水やその土地の昔の話を集めさせ興味をもたせ、最終的にはカルタや紙芝居にしようということでした。4年生を念頭に置いていたのです。ところが担当が5・6年生になってしまい、カルタ作りの時間がとれそうもなくなってしまいました。図工の時間に版画でやる計画だったのですが、5・6年生は専科の先生がおられたのです。そこで、たまたま読書会のおかあさん方が、「大きな木」の布芝居をみせてくださり、あれもでかくていいね、ということになり、狛江の歴史を3年生ぐらいがみて分るように書いて置いていくことにしました。これは4月の初めにもう予定したのですが、堅穴住居作りに1学期は時間をとられ、2学期は水泳記録会、運動会、陸上記録会、社会科見学、三小祭り、全校遠足と最上級生としての係の仕事も沢山あり行事がたて続けにありました。そこへ、昨年度の反省で十年以上続いてきた校内サッカー大会が、先生方の職員会議中にするのは危険ということで再考ということになって、子供達はやりたいし、やるために彼等なりに知恵をしばり出しました。先生方がみにくる研究授業のその場での討議という方向へ進み、先生方もその熱意におされて会議中はしないとの制約つきで、サッカー大会が実現というようなこともあって、教科も進めつつ、卒業記念に作る予定の布芝居も、絵の作成は楽しみ、じっくり取り組んだのですが、その計画段階では自分達の力を出しきったという感じは少なかったのです。

### (日程)

6月 構想の確認を各クラスからの委員で構成されている布芝居委員会とし、夏休み中に狛江の歴史を調べてくることになっていた。

10月3日(木) 運動会が終わってすぐ布芝居委員会が集まり、1クラス8枚、8班にわかれて4クラス時代区分をする。

10月16日(水) }  
10月29日(火) } 各班ごとに、テーマにそった絵を捜し、模造紙に描く。

11月 5日(火) }  
11月12日(火) } 布に絵を描く。  
11月19日(火) }

12月 5日(木) 三年生にわかるくらいに説明の文を書く。

1 2月16日(月) 写真屋さんでスライド用の撮影をお願いし、卒業用アルバムにもものことになる。布芝居委員会でビデオ作りをする。

3学期になって 卒業式前に全校生の前で演じられ、卒業式会場を飾った。

この布芝居について、委員の1人の高江洲君に書いてもらった感想文と、新聞でも報道されたので、その記事載せておくことにします。

#### 布芝居

#### 6の4 高江洲 潤

伯江と地球(日本)の歴史をテーマとしたこの布芝居はとても作るのに苦労しましたが、なんとか、きれいに、そしてすばらしくできました。やはり、6年生全員と先生方の協力がそれを発揮したと思います。これを作り上げ、しかも、ビデオ作りまでするという、なんともすごいことを、たった二ヶ月ちょっとですというの、考えてみれば、とてもすごいことだと思います。しかし、ぼく達のクラスは、6の4の布芝居委員会のぼく達6人がしっかりしていなかったため、ずい分もめました。

まず、どこの班がどの絵を書くのかということを決めたには決めたのですが、あまりゆきとどいてはいませんでした。しかも、やっとのことで決めたのに資料がないのです。野村先生に、資料を集めるといわれたのに、ぼくたちは、てっきり忘れてしまい、みんなに大変、めいわくをかけてしまいました。しかし、その後はなんとかこの班も協力し、いっしょうけん命がんばってくれて、ぼく達はとても有難く思いました。そしてぼく達もどの仕事もがんばってきました。そして、やっどできあがったのです。この時はひじょうにうれしく思い、またホッとしました。

最後に、布芝居を作る時のやり方です。最初に、書く絵を4クラス分担します。それを、各クラス8個の班に割り合えます。次にその割り合えられた絵を、資料をもとにもぞう紙に書きます。そして、先生の許可を得ます。許可を得たら、やっど布にそれをそめ物用のえのぐで書くのです。8まい書き終わったら、これからが布芝居委員会の大事な仕事です。

はじめに布の上の方に4つひもをぬいつけます。次に1まい1まいについての解説をくわしくかきます。そして、布を校庭の金あみに結びつけ、ビデオとりとカメラにおさめます。ビデオどりの時に、自分達のかいた解説を読むのです。

これらの仕事をやり、そしてやっど、32まいの布芝居ができるのですから、やはり、みんなの協力が大変重要なのです。

今後、この布芝居を社会の歴史の勉強にやくだてて、いつまでも三小に残っていてほしいものです。

61年1月12日

こんなわけで出来あがったのですが、三年生を対象にしたはずで30分以内に終わるようにと当初は考えたのですが、くわしく書くことが頭からはなれず、かなり長いものになってしまいました。

# 狛江の歴史を絵巻に

## 市立三小 卒業記念で製作 の六年生

狛江市の市立小学校で卒業を控えた六年生たちが、ふる里・狛江の歴史を長さ六〇斤の布の絵巻物として完成させた。自分たちで歴史をたどり絵に描いた手づくりで、卒業記念に後輩たちに贈る。この絵巻物は開校記念会や運動会などの際、生きた教材として披露するほか、市内の幼稚園や小学校にも貸し出しをするという。

このジャンボ絵巻物は市立三小（高橋実校長、児童七百五十九人）の六年生百五十七人が半年がかりでつくり上げた。

た。社会の授業で「日本歴史」を勉強している時に自分たちの住む町の歴史をまとめようという意見が児童たちから出た。どうせつくるなら自分で見る絵巻をと、昨年九月から準備にかかった。地球誕生から平安時代、鎌倉時代から江戸初期、江戸中期から明治維新、明治から現代までの四ブロックに分け、五人一組になって狛江にまつわる歴史を調べ、一枚の絵を描くことにした。

児童たちは社会の時間や放

課後、担当の年代の話を地元の高老から聞いたたり、図書館で調べたりして説明文と絵づくりに取り組んだ。一枚の絵は縦九〇センチ、横一八〇センチの布にえんぴつで下書きしてその上を絵の具で塗った。

「狛江むかしむかし」と題した絵巻物は、地球誕生から最近の多摩川まで三十二編。大將軍の徳川綱吉のころ喜多見にあった犬小屋、下田にきたペリーが持ち込んだメタセコイアの大樹、明治時代の多摩川の渡しなど、ちよつと変わった狛江の歴史も盛り込まれ、この三十二枚を縫ぎ合わせると約六〇斤の長さになる。

このジャンボ絵巻物は、二十日に予定される「卒業生を

送る会」で、六年生代表から在校生に贈られ、体育館に張りめぐらして、六年生が説明文を読み上げる。同校では、この絵巻物を開校記念日や体育祭、文化祭などの児童、父兄が大勢集まるときに展示することになっている。



郷土の歴史絵巻物の仕上げをする狛江市立三小の六年生たち



発行所  
くらしの窓新聞社  
川崎市多摩区三田1-7-7  
郵便番号 214  
電044(933)5867(代)  
©1986 くらしの窓新聞社  
印刷 東タイ印刷株式会社



布芝屋「狛江むかしむかし」のひとコマ

### ふるさとの歴史を絵と文32枚でつづる

狛江3小の6年生

# 60ページのジャンボ絵巻

「後編たちに郷土の歴史を つた三十一編の話にまよ 学ぶ、教材」を残そう」と 狛江市立第三小学校(高橋実校長、児童七百五十九人)の六年生たち四クラス百五十七人が、卒業製作として「狛江むかしむかし」と題したジャンボな絵巻物を作り上げた。

地球誕生から現代までの歴史を、市内に残る塚や寺、神社などの史跡にまつわるエピソード、多摩川の渡し、ペリリの開港記念植樹など、狛江を中心としたできごとをつままとした。先生と各クラスの

「後編たちに郷土の歴史を つた三十一編の話にまよ 学ぶ、教材」を残そう」と 狛江市立第三小学校(高橋実校長、児童七百五十九人)の六年生たち四クラス百五十七人が、卒業製作として「狛江むかしむかし」と題したジャンボな絵巻物を作り上げた。

地球誕生から現代までの歴史を、市内に残る塚や寺、神社などの史跡にまつわるエピソード、多摩川の渡し、ペリリの開港記念植樹など、狛江を中心としたできごとをつままとした。先生と各クラスの

児童の代表とが話し合い、郷土の歴史を絵で表現し、「狛江のお年寄りから話を聞いた」といって、約一カ月をかけて絵と説明文を製作した。

絵は泉蔵寺を再興した石谷貞清が島原の乱で活躍する様子や、神社のご神体をかけた相撲大会、大將軍綱吉の時代に多見にあった犬小屋など、ふるさとにまつわる歴史を大画面いっぱいに表現して、子どもたちは「漫画世代的」な絵を製作した。

同校では十一日に行われる「卒業感謝の集い」で布芝屋委員長秋葉達生君から教師や六年生の父母に披露され、二十日の卒業生を送る会では、作品の両端をつないだ約六十枚のジャンボ絵巻にして体育館の壁に飾るといふ。

学校側では「子どもたちが汗を流して作りあげた貴重な教材。大切に生かして使いたい」と話している。

「後編たちに郷土の歴史を つた三十一編の話にまよ 学ぶ、教材」を残そう」と 狛江市立第三小学校(高橋実校長、児童七百五十九人)の六年生たち四クラス百五十七人が、卒業製作として「狛江むかしむかし」と題したジャンボな絵巻物を作り上げた。

地球誕生から現代までの歴史を、市内に残る塚や寺、神社などの史跡にまつわるエピソード、多摩川の渡し、ペリリの開港記念植樹など、狛江を中心としたできごとをつままとした。先生と各クラスの

児童の代表とが話し合い、郷土の歴史を絵で表現し、「狛江のお年寄りから話を聞いた」といって、約一カ月をかけて絵と説明文を製作した。

絵は泉蔵寺を再興した石谷貞清が島原の乱で活躍する様子や、神社のご神体をかけた相撲大会、大將軍綱吉の時代に多見にあった犬小屋など、ふるさとにまつわる歴史を大画面いっぱいに表現して、子どもたちは「漫画世代的」な絵を製作した。

同校では十一日に行われる「卒業感謝の集い」で布芝屋委員長秋葉達生君から教師や六年生の父母に披露され、二十日の卒業生を送る会では、作品の両端をつないだ約六十枚のジャンボ絵巻にして体育館の壁に飾るといふ。

学校側では「子どもたちが汗を流して作りあげた貴重な教材。大切に生かして使いたい」と話している。



(狛江むかしむかしの  
写真は、ミゾエ企画  
による撮影)

## ① 地球誕生

地球は、約45億円ぐらい前に冷たい隕石のつぶの集まりでした。隕石とは、宇宙にとんでい

る大きな石です。約5億7千万年前ぐらいから、三葉虫・タコ・イカなどがあら

われ出し、海に生きていきました。

約3億7千万年前、生物がはじめて上陸し、シダやゴキブリの仲間から恐竜のたくさんいる時代になっていきました。

およそ二百万年前ぐらいになると、日本は今と似たような形になりました。人間もこの時に生まれま

## ② 石器時代

石器時代の終わり頃のどうくつに住む人たちです。左の2人はたき火にせっせとまきをくべています。右の1人は石を使って石をといでいます。このように石器時代の人はどうくつに住んで石を使って、かりをしたり漁をしたりしてました。この頃はもう火を使うようになり、物を焼いて食べるようになりま

した。着る物も、もうできるようになっていました。石器時代というくらいで、日常よく石を使って生活を



### ③ 縄文時代

縄文時代は1万2千年前から2千年前までの1万年間です。この頃の食事は、かりや、りょうをしてとったものを食べていました。木の実などをつぶして団子のようなものにして食べてい



ました。住む所はたて穴住居に住んでいました。たて穴住居というのはわらで作った簡単な建物です。

又、この頃作られた土器は、縄文式土器といって、縄のもようがついていて、この時代の特徴を表わしています。狛江市には、縄文時代の遺跡が残っています。

けれども、多摩川の流域には食べ物がたくさんないなどの理由であまり人は住んでいなかったそうです。

### ④ 弥生時代

約二千二百年前に大陸から稲作が伝わりました。朝鮮半島を経て北九州に伝わりたちまち近畿地方より西に広がりました。このころの水田は、低い湿った土地に作られたため、人々は低地に移り住みました。

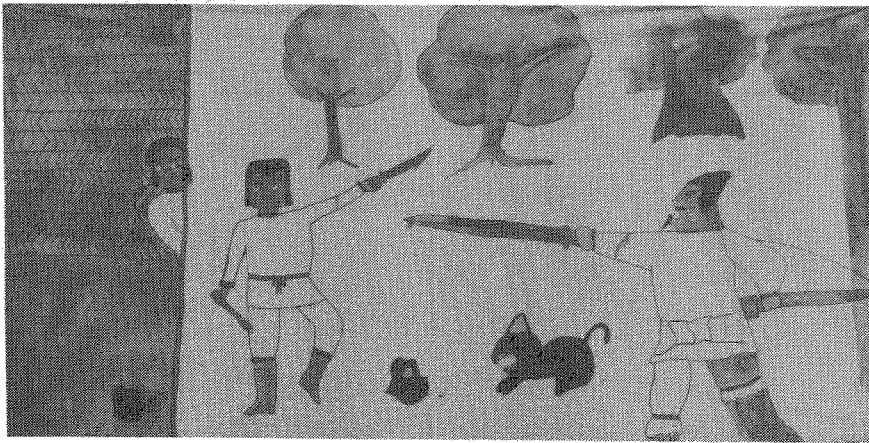
やがて弥生時代の中頃になると、稲作は関東地方から東北地方中部にまで広がりました。

道具は石器・土器・木の農具などの他に、鉄器や青銅器も使われるようになりました。そのほか、水田作り・種まき・取り入れなどのための集団のまとまりが強くなり、「むら」ができ強力な支配者も現

れ、貧しい人と  
豊かな人との差  
ができはじめま  
した。



⑤ 狛江のオギ



むなさしのオ  
ギという乱暴者  
がいました。

埼玉のカクハ  
ラアタイのオギ  
という人が、「お  
のれ狛江のオギ」  
と言って、2人  
ではげしい戦い  
をしました。

狛江のオギ(む  
なさしのオギ)

がカミケヌギミのオミに助けを求めました。それをカクハラアタイのオギが知って、朝廷に助太刀を求めました。朝廷は裁判で、狛江のオギを殺せと命令しました。朝廷は殺し屋に狛江のオギを殺すように命令しました。狛江のオギは殺しやに殺されて、死んでしまいました。くわしいことは、日本書記にのっています。

この絵の一番左はじにかくれている人が、狛江のオギで、中央の人はカミケヌギミのオミで、右はしの人は殺しやです。



### ⑥ 矢崎山の古墳



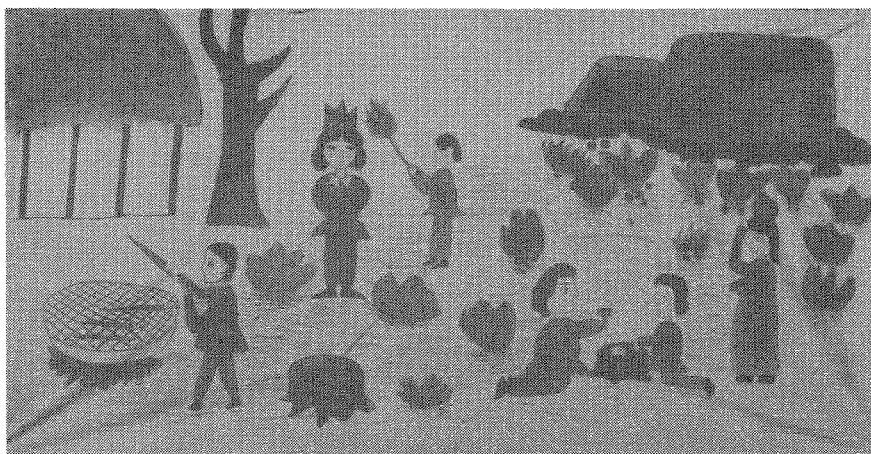
今から1,500年前、お墓として土を盛り山のように作ることがはまりました。ここ粕江には百個以上の古墳が作られました。三小の矢崎山も古墳だそうです。今も粕江には、かめ塚やかぶと

塚など十個くらい残っています。

### ⑦ 高麗の一族

朝鮮にあるコマという国の一族は、戦争から逃がれて日本に住んでいました。

ある日、コマの一族は天皇に呼ばれ、「ずっと東に広い土地がある。開発が  
おこなわれているからみつぎ物が少



ない。どうだろう。東の国へ行っていろいろな物を作る事を教えてくれないか。」とたのまれました。一ヶ月以上たって、コマの一族はやっと東の国へ着きました。そこは低くうねりながら続く山々、清らかな川の流れの地でした。

コマの一族は、うで輪、首飾り、食器作りなどを東の国の人へ伝えました。それにおどろいて、弟子入りした人も多いそうです。

### ⑧ 平安時代

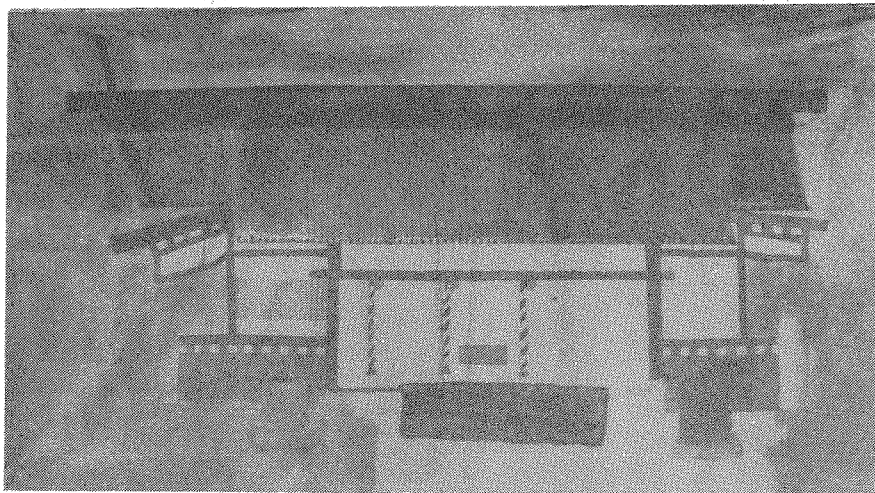
1200年前ぐらいのことです。貴族の中には、たくさんの土地を持ち、多くの財産をたくわえる人達も出てきました。彼等は大きな屋しきに住み、祭りなどをとりおこない、天皇にかわって、国を動かすようになりました。

商売をする人、  
手で物を作る人、  
どろぼう、乞食  
など、都にはい  
ろいろな人が住  
んでいました。  
大きな道には、  
祭りの行列など  
が、よく通り過  
ぎて行きました。  
このように都は  
にぎやかだった



けれど、火事や地しんがおきたり、悪い病気がはやりたりして、たくさんの人が死ぬことも、ときどきありました。やがて武士と武士が争うようになり、最後に勝ち残った武士が全国をおさめました。

#### ⑨ 伊豆美神社



伊豆美神社と  
いう名は、「六  
所明神」と言う  
名を改名したも  
のである。

1871年から  
1874年ごろは、  
「伊豆美乃神社」  
と書いていたが、  
やがて「伊豆美  
神社」という書  
き方も混じって

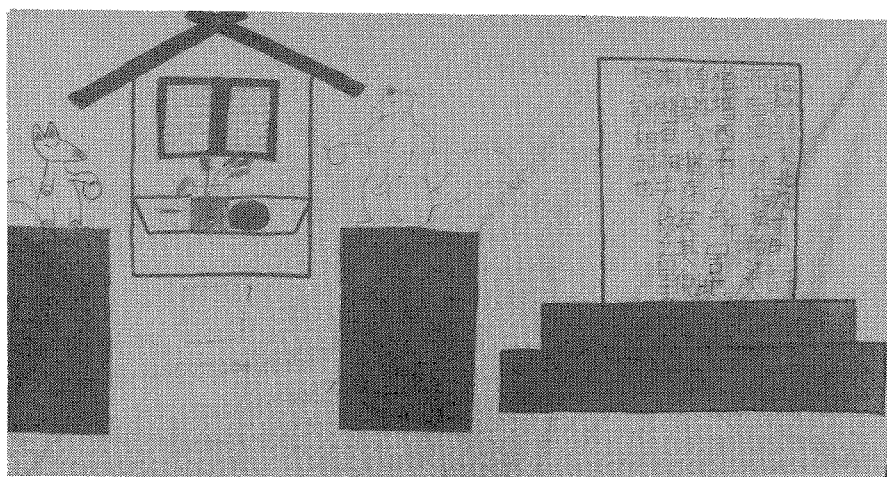
きて「伊豆美神社」に固定された。

この神社には、武蔵国の六つの神社の神を祭り、和泉大塚山（今の福祉会館の東側の地に建てられたが、1550年の多摩川の洪水で流され、1552年に今の地に建てられた。）

又、一説ではこの神社は江戸時代の始めにこの地を持っていた石谷氏が旧領三河国の六つの神社の神をまつて建てたものだともいわれている。

⊕ この石谷氏は、泉龍寺住職の話によれば、泉龍寺の開基にあたる人でもあり、天草騒動の際の徳川方の副大将、又、浪人の就職などを深く考慮した江戸町奉行などもこの一族から出たそうであり、6年生の歴史教材に取りあげたいところである。

### ⑩ 狛江入道増西

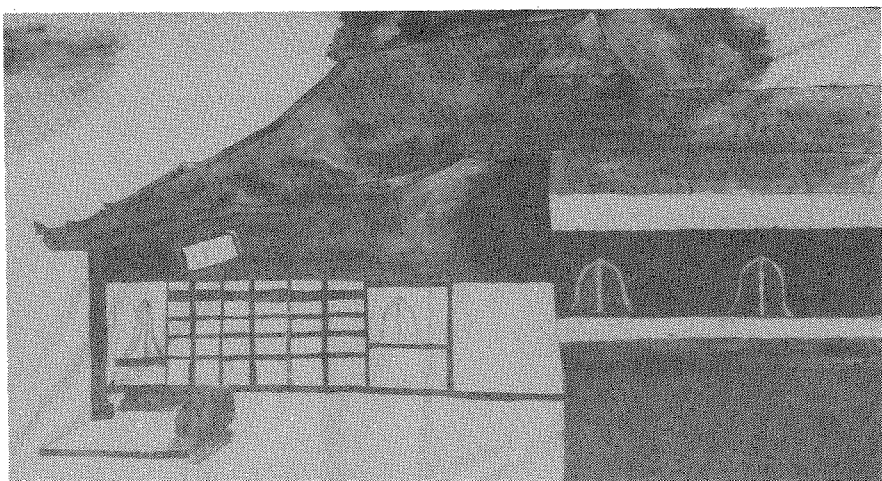


狛江入道増西は、1208年に、ほかの家の田畑の稲を刈り取ってぬすんだ。このため増西は、鎌倉ようふく寺で、百日間の修業をさせられた。この頃は、幕府に反抗する者は、全てとうぞくや

悪人とされた。狛江入道増西のすまいは狛江郷の中にあった。

### ⑪ 玉泉寺

特色は、天台宗で尊祐（調布の深大寺で修行した僧）が開いたお寺。多摩川のほとりで、小田急線の和泉多摩川駅から、歩いて2、3分の所で東和泉3丁目にあります。



1569年6月、

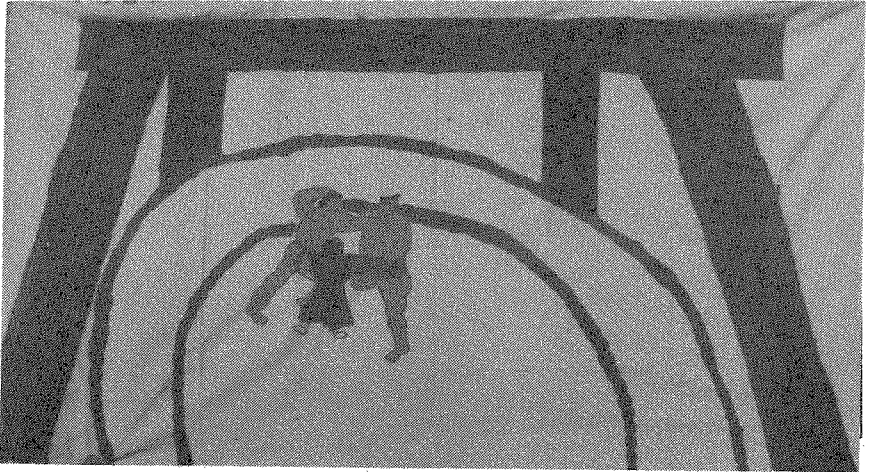
北条氏政が、武田信玄に夜しゅうをかけて、追いはらった。しかし、信玄が又くることを予想して、北条氏は大変きんちょうした。

北条氏の武運を祈らせるだけでなく、狛江の近くの豪族たちを家来として働かせたかったので玉泉寺をおうえんした。

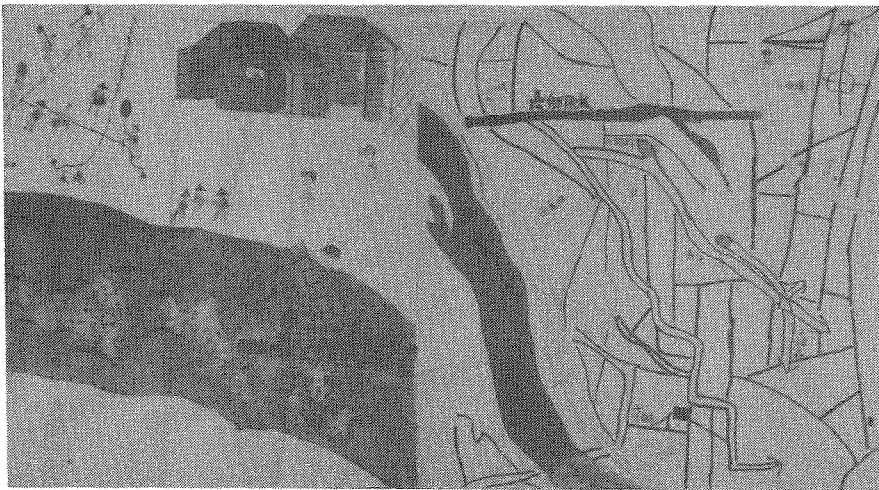
玉泉寺を支えた豪族たちは、小足立の栗山主計、猪方の小川采女、和泉の大久保内膳です。

## ⑫ 岩戸八幡

永録元年、秋元仁左衛門という大きなおすもうさんがいました。鬼御郎左衛門と呼ばれていました。鶴岡八幡宮に御神体をかけたすもう大会がひらかれた。その大会に秋元仁左衛門が優勝し、御神体を岩戸に持ち帰り、岩戸八幡にまつた。



## ⑬ 六郷用水



徳川家康は、多摩川の流域を農業生産地にするため小泉次大夫に命じ見させた。小泉次大夫は多摩川から、水を引き入れる用水堀をつくることを家康に報告した。

古い野川の流

れが六郷用水に合流し、岩戸・駒井地区が野川の流域ではなくなった。岩戸・駒井地区は一小のうらの分水をうけて水田を作っていた。

清水川に六郷用水をつなげ、岩戸より東側の方へ水を引いた。猪方方面にも堀割が作られ天神寺から猪方の一部および駒井の方へかんがいが行われた。さらに六郷用水の分水の猪方用水が作られ、猪方両側全部がうるおった。

六郷用水によって、狛江地域は再開発された。

六郷用水ができる前は、主に野川の水と泉龍寺池といくつかのわき水を使って水田を作っていた。六郷用水は延長2 3.2kmそのかんがい面積は千五百町歩。

⑭ 江戸町奉行石谷十蔵貞清



1651年、三代將軍家光が死んだころ、幕府に対して不満の多い浪人仲間が、由井正雪・丸橋忠弥を中心に反乱を企てたが、和泉を支配していた石谷清正の弟、貞清がとらえた。貞清は千

人近くの浪人を再就職させた。又、1637年、天草四郎時貞を中心とする島原の乱では幕府軍の副大将として参戦している。兄の清正は、泉龍寺を再興し、弟は1151年、伊豆美神社鳥居を寄附し今も残っている。

⑮ 喜多見の犬小屋

つなよしの時代には、犬が大事にされ、犬を大事にしないものは、との様にばっせられました。

犬をかう人が少なくなって犬小屋を作るようになりました。喜多見にもその



小屋があり犬をとっても大事にしていました。

はじめは、数十頭を収容していました。多い時には、4千びきに、中間16・7人がつき、主にアジ・キス・かつぶしなどを食べていた。

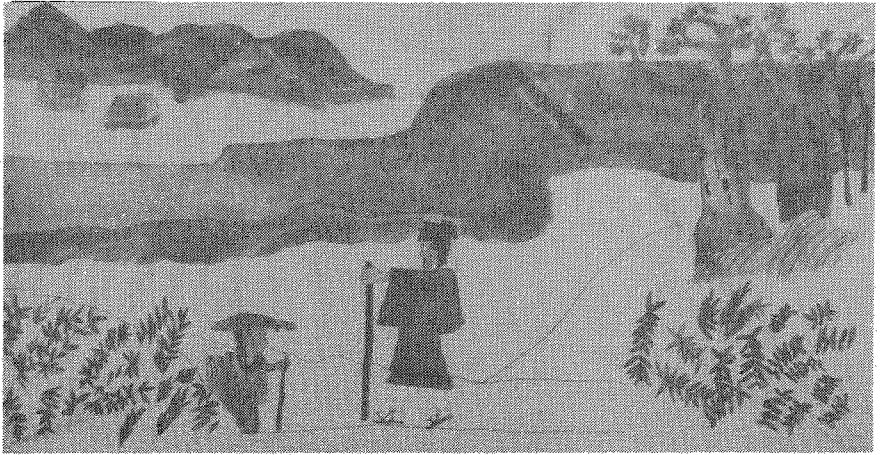
他に、犬に必要な物は、みそ・ろうそく・まきや炭などの雑費62兩余と米の費用は、江戸市民に課せられ、日本橋では間口1間に金5分を徴収されていた。

⑯ 真冬数万人も渡った登戸の渡し

1685年ごろ、狛江の向う岸の宿河原で久えもんが、渡し守をしていて古い小舟を一そうだけ使って

やっていました。  
真冬の12月でも、数万の人々がわたっていましたが、この久右衛門と江戸四谷忍町の吉兵衛とが争い大変困りました。

登戸の渡しは、大風や大雨で、渡場の場所もかわってきました。



和泉村の方も舟を2そう使ってやっていて、登戸側と和泉側でいっしょにやっていました。1952年昭和27年、多摩川水道橋がかけられてなくなった。

#### ⑰ まわり地藏

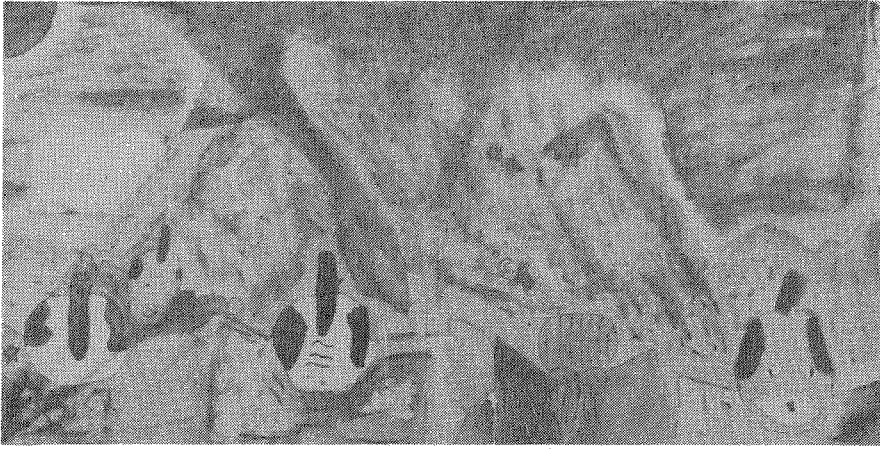


1777年、安永元年、泉龍寺と真福寺の間で、まわり地藏の取り合いがあった。まわり地藏尊というのは、毎月23日に、お寺に帰ってくるが、ふだんは、信者の人が1晩ごとに地藏尊を

招いて、神田・日本橋・本所の方までも回っていた。子授け、安産、子育てなどを願った。

#### ⑱ 浅間山の大噴火

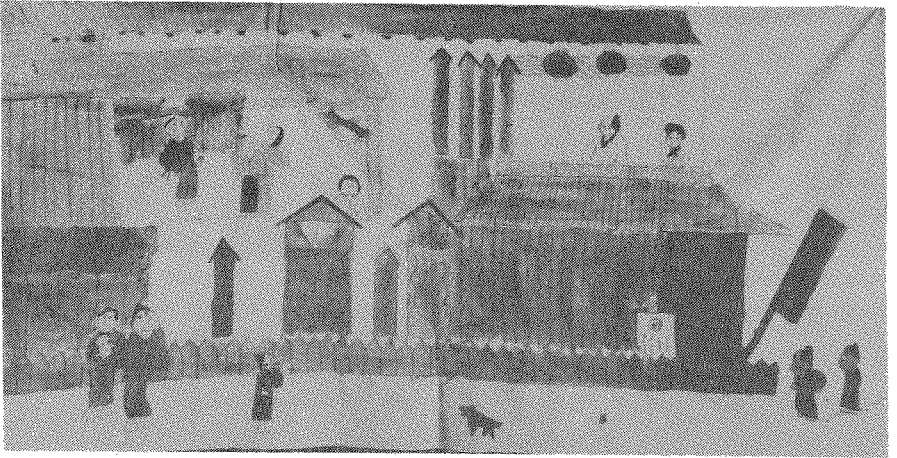
1783年、天明3年2月大地震、6月大雨、7月浅間山大噴火が起った。そのため、現在でも、大爆発の時に流れでた粘り強い溶岩は流されるうちにごつごつした大きな固まりになって残っている。百キロメートル以上はなれた江戸(東京)でも火山灰が3cmもつもった。500kmもはなれた所まで灰がふった。この年も、作物はとれず、うえ死にした人が1,000人以上もいた。今でも天明3年、火山の時の溶岩がつもってきた壁がある。



大噴火の時に山の上の観音堂に逃げた者だけが助かった。百余段の石段が火砕流の下にうまっているといわれる。

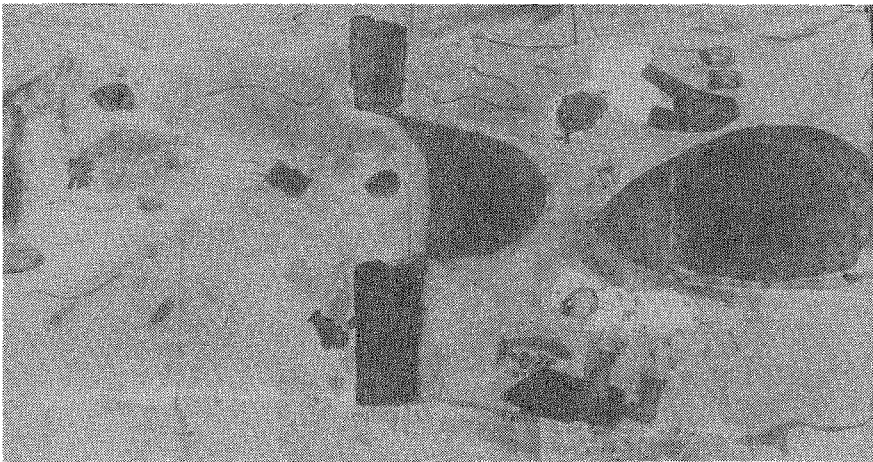
⑱ 多摩川歌舞伎

1818年平井有三が猪方村の隠居の重八に役者呼んでこっそり金をもうけようという話をした。多摩川の河原に小屋をたて、お客がいっぱい入った。5日目、劇がはじ



まろうとした時、いきなり、「ご用」「神妙にせい」と、棒や縄をもった男が飛び出してきた。芝居小屋以外の上演は禁止されていた。

⑳ 江戸時代の多摩川



杉丸太を川を横切って何本か打ち込み、それに杉を横にしてしずませて、流れを渡り浅瀬寄りに一部口をあけ、綱をはって鮎を誘いこみとっていた。また、玉川砂利をとる

舟もあり、舟一そうに砂利一坪を得て一貫二百文をもうける人もでた。

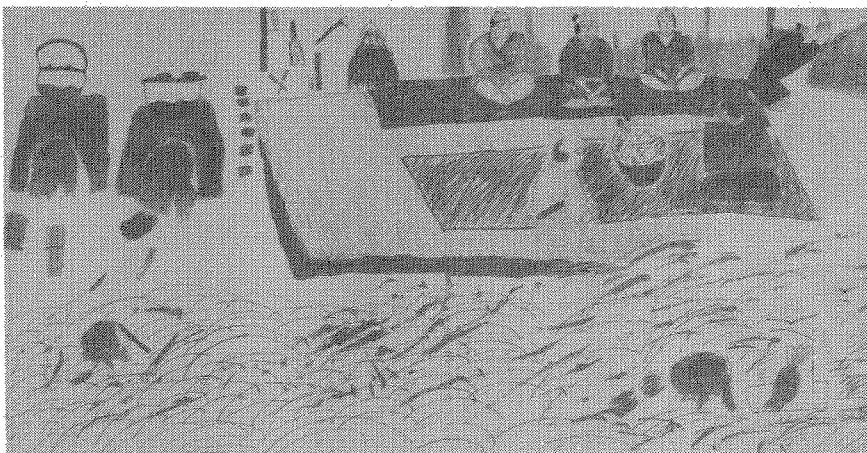
㉑ 伝三右衛門新田



1832年天保3年和泉村の名主伝三右衛門は、調布の方から流れてくる根川道安堀の水を、掛け樋で、六郷用水の上を渡し西河原地区のあたりを切り開き、田んぼにした。

㉒ 和泉村百姓半蔵による強訴

半蔵・栄五郎を中心とした12名は、川をきれいにした賃金を名主が払えず、貧しくなり、ごうその相談をし、名主2名が訴えによって「御役御免」となる。半蔵も14年目、日米通商条約の結ばれた年、田中池で水死体となってみつかる。



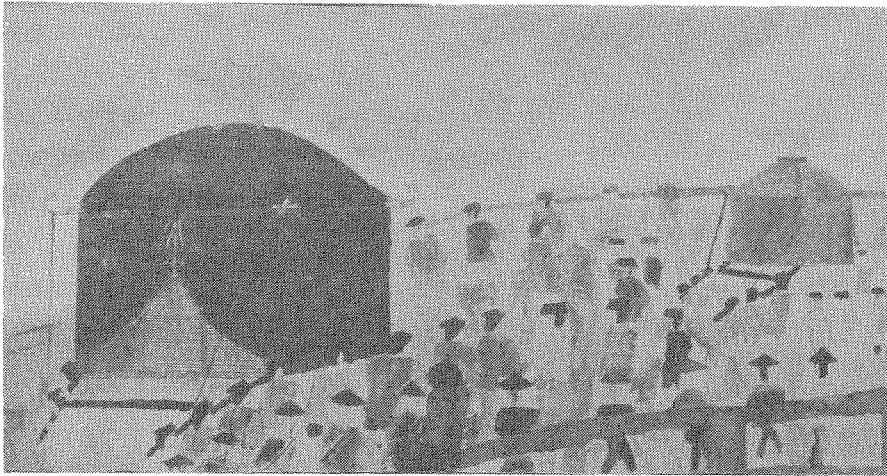
㉓ ベリー来航

1854年、ベリーが黒船にのって日本にやってきました。下田・はこだてに2つの港を開きました。ベリーは井伊直弼に松の木をあげました。今、狛江の石井さん宅の庭に生えていて狛江の駅から見えます。





㉔ 明治維新



1868年、天皇が中心になり明治時代になる。狛江の村は、神奈川県の中に入っているが、コレラがはやり、1893年、玉川上水の管理上、東京府になる。

明治元年には、それまで、キリ

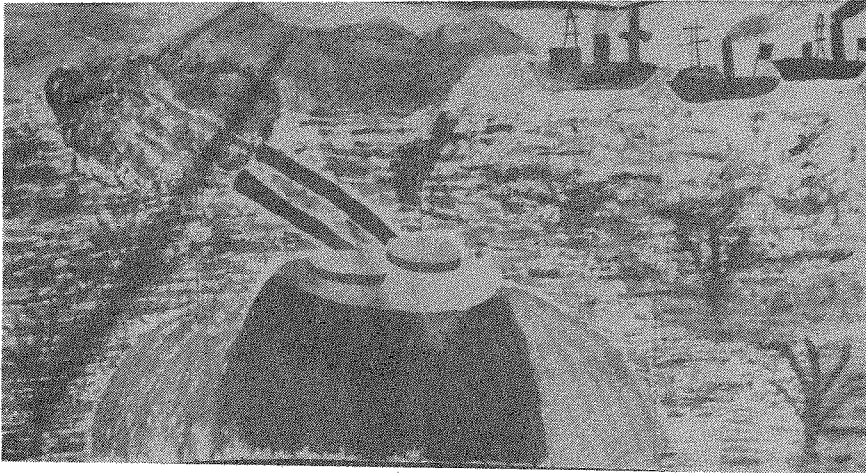
シタン改めで、力を持っていた寺から「日本の神を祭ることと政治とがいっちなしくみにかえよ。」ということで、神社から仏くさいものが捨てさせられた。六所宮行宝院ともいわれていた所が、伊豆美神社と名をかえたのもこの時であり、氏子の登録制度となる。

### ㉕ 学 制

政府は1872年（明治5年）どこの町や村にも学校をつくる制度を決め、「これまでの武士の学問は、実際にあわないものであった。これからは、学問は世の中で生きていくためのものになるべきだ。どこの村にもどこの家にも、学問をしないなどという人がいてはいけない。」という命令を出しました。しかし、初めの頃は、子供を学校へ通わすことのできない家が半分もありました。また、学校の費用は地元にかせため、村の人は苦勞して費用を出していました。



② 日清戦争，日露戦争



朝鮮に内乱(東学党の乱)がおこったとき、清国と日本は軍隊を送ってこれをしずめたが、朝鮮における勢力争いがもとで、清国との間に戦争がおこった。

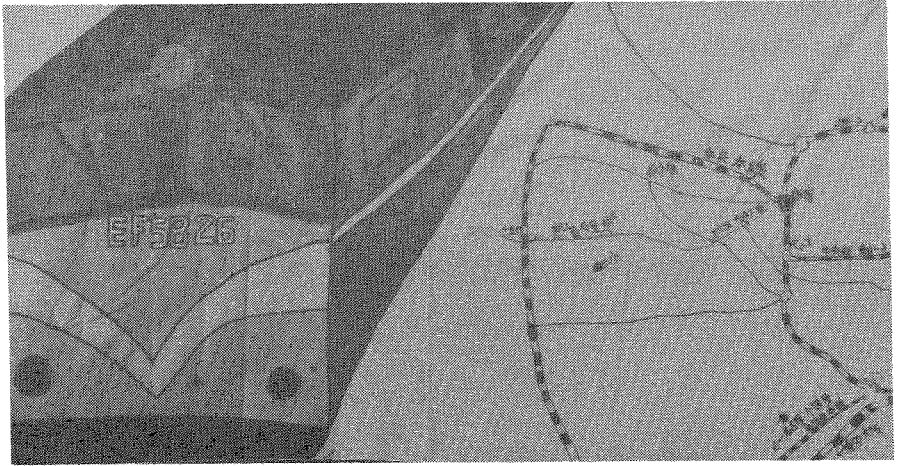
日本はこの戦争に勝ち、下関

条約で台湾、りょうとう半島や、ばいしょう金を得た。

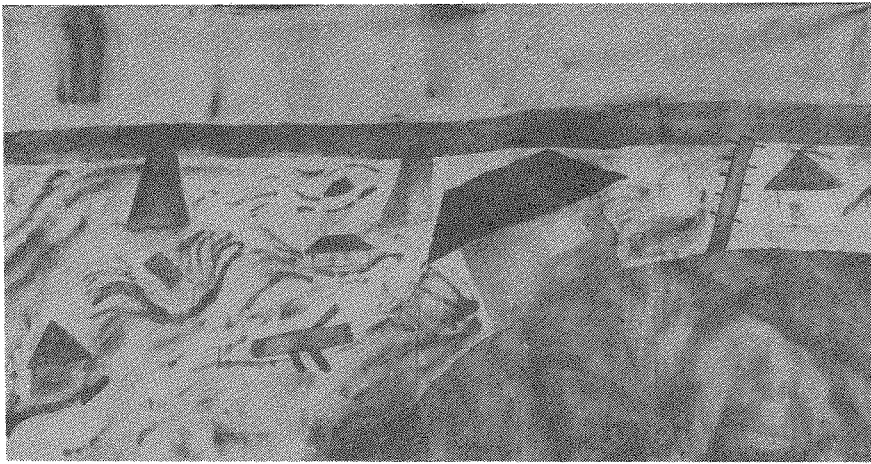
日清戦争後、ロシアは満州からかん国にまで勢力をのぼしてきたので、ついに日露戦争となった。日本軍は満州や日本海での戦いに勝ったものの国力を使い果たしポーツマス条約を結んで南からふとど、満州での権利を得た。

② 鉄道開通

1872(明治5)年、新橋と横浜に鉄道が開通した。明治40年(1907)玉川電車が渋谷—玉川を走り、大正2年(1913)笹塚—調布に京王電車が走る。1927年(昭和2年)小田急線が開通。



㊸ 水 害



大雨がふると、川では水の量がふえ、多くの水害をおこした。水害は家などをおし流し、川の近くには、特にひ害が多く、たいへん困りました。多摩川も同じように、大き

な水害をもたらし、大きな問題となりました。

㊹ 関東大震災

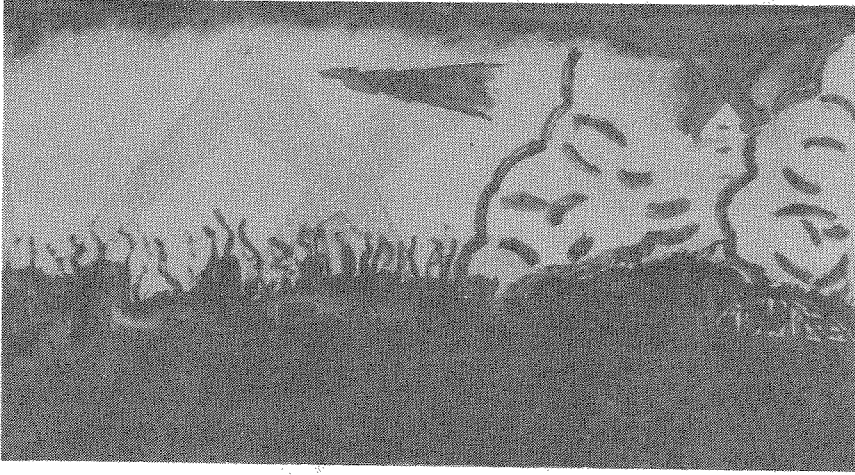
1923年(大正12)年9月1日、関東地方に大地震がおこり、約45万戸の家が焼け、約9万人の人が死に、そのころの金で約55億円が失われた。このふっこうにも



多くの費用がかかり、不景気はいっそうきびしくなった。

多摩川は突然ゴ〜という地鳴りがして川の水がゆれだし、足もとはグラグラして川岸に行こうとしても、足が動かず、魚は岸にはねとばされ、道は地割れし、あたりの家はかたむいたが、狛江の村では火を出した家が一軒もなかった。

### ⑩ 太平洋戦争



1941年、日本はハワイを攻撃しました。太平洋戦争のはじまりです。日本が戦争を始めると、同盟をむすんでいるドイツとイタリアもアメリカと戦争をはじめました。

「ウーウーウー」

サイレンがけたたましくなります。アメリカ軍飛行機の日本空襲です。サイパン島などをうばったアメリカは、B29という飛行機で日本へ爆げきするようになったため、東京は焼け野原となり、たくさんの方が死にました。

1945年アメリカは広島と長崎へ原爆を落とし、戦争はついに終わりました。昭和の初めからの戦争にかかわってきた日本もやっと平和がおとずれたのです。

狛江国民学校も1945年5月25日に焼夷弾で焼けました。

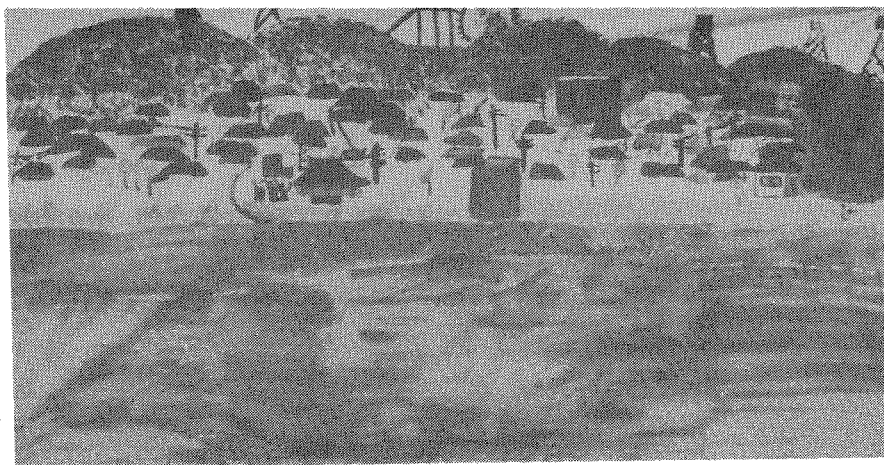
### ⑪ 狛江三小

昭和32年、狛江三小ができました。普通教室は9、職員室しかなく、特別教室はありませんでした。狛江町の給食第一号として昭和34年2月2日から行われました。



プールの水は、岩戸八幡前のわき水からひっぱってきました。

## ④ 多摩川



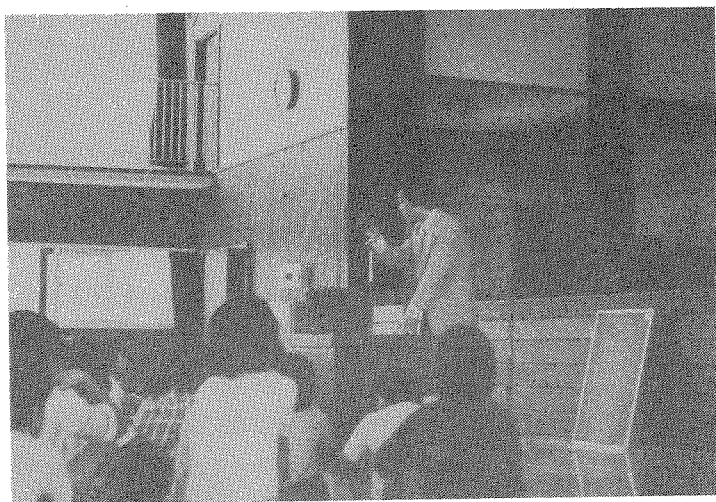
昭和20年代、夏になると多摩川はカップ達でにぎわっていました。ところが、30年代になると、家庭廃水、工場廃水によってごり、1957年、多摩川は小河内ダムの完成で、からからに

ひあがりました。また、水死事故もおこってしまいました。多摩川の鮎も美味でしたが、やはり昭和30年ごろから、減ってしまいました。

今では、多摩川は私達狛江にとっていこいの場として親しまれ深くかかわりあっています。鮎、鯉など放流して、少しでも自然をとりもどそうとしています。

これからも、多摩川は市民と深く親しみあわなければならないのです。

## (10) 石器作り



4月、石器時代を学習している頃、田んぼの土掘りをくわなど使わずにやってみようということになりました。実際にやり出してみると、石器づくりが楽しく、穴を掘っては作りなおすという作業を続けました。

学校の父兄に慶應大学の民俗学の先生がおられて、実物を持って話しにもきてくださいました。実物は光り輝やき、彼等が集めた石器は一つを除いて全

部石のかけらにすぎないことなどわかり、ますます本物の石器を作ってみたいということになりました。

この時、降ってわいたように外部の人に教えてもらうことに反対する声職員の中におこり、すったもんだはしたけれど、教わることには問題のないことがわかりました。でも、4クラスで取り組むにはエネルギーが消耗してしまいました。6月に町田の郷土館、その前に調布の郷土館に出かけ、石器をみ

て、いろいろ勉強しました。興味を持ってみているのがよくわかりました。

卒業間近かの3月21日、多摩川の河原で学校の授業としてではなく取り組むことになりました。河原でしたのは、破片がガラス様で飛び散りあとが危険なので、河原がいいということになりました。

にわとりを生きたままで矢じり（自分達の作るだろうもの）で殺したいという案も出され、家で飼っているにわとりを提供してくれるという話もあり、私はあわてました。たしかに、にわとりを殺す授業をした方はあるのですが、私はにわとりが嫌い、最終的に自分でにわとりに触れそうもありませんし、なによりも生きているものを殺すことそのものが、私にはできそうもありませんでした。肉屋さんにおまかせはないなどと自分の中での反論もありました。子供達の中も、意見が半々に分かれました。悩んですごしました。

何故、今では、食肉さんにまかせているのかということも考えたのです。ところが幸いにして、にわとりを提供して下さる方がやはり可愛想なので提供できないと言ってくださいました。にわとりは丸ごと鳥肉さんから手に入れることにしました。

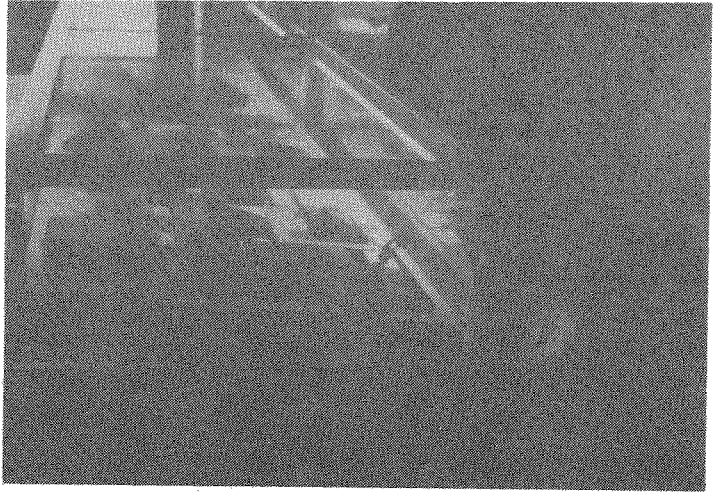
仕上げられたナイフがまわされてきて、皆ためしています。自分の手が切れてしまった人もいます。

自分達も作ってみました。作ったら、ニワトリを切ってみました。手伝いに来てくださったおかあさん方も、うちの包丁よりよく切れるなんておっしゃっています。ビニール袋の上で、ビニールシートの上で、おもいおもいに、上流から流れてきた石をとり、北海道の黒曜石の上に打ちおろす。鳥肉、リンゴなどよく切れます。

大学の先生は、木を切ったり、鳥の骨を切ったりしてレンズを通してみせてくださいました。

石器をみやげに家路へとつく頃には、夕暮がおとずれていました。

一年がかりの夢をかなえたわけです。



（調布郷土館で）



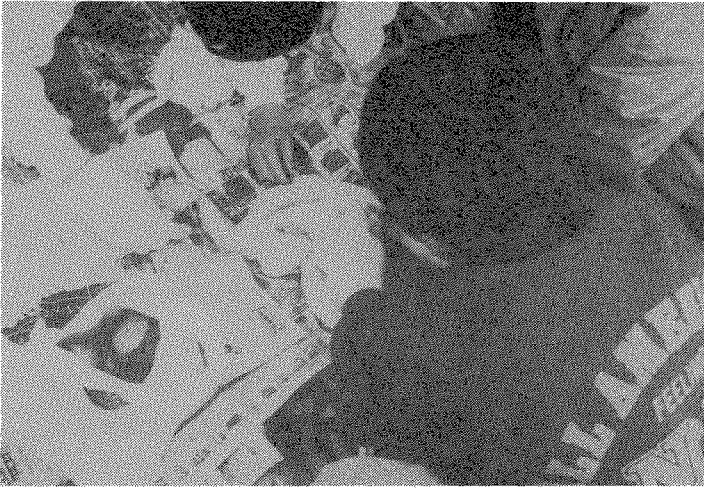


この項  
小林さん  
絹山さんによる写真

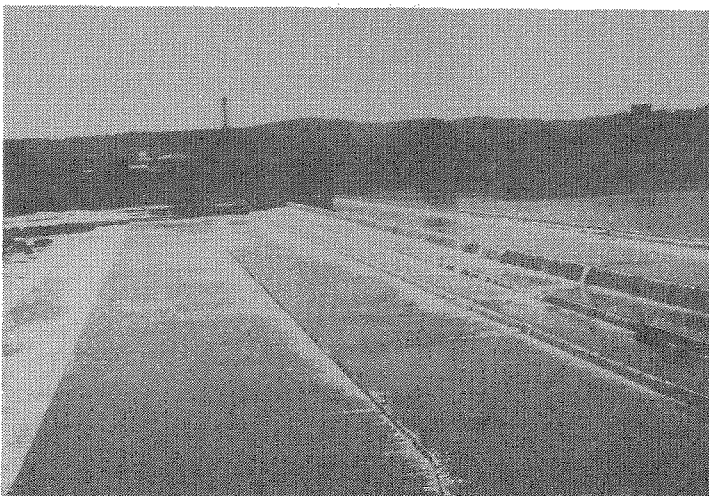


専門家作り始めました。  
(今回は北海道の黒曜石  
を取り寄せて下さいまし  
た。)  
破片がいっぱいいます。





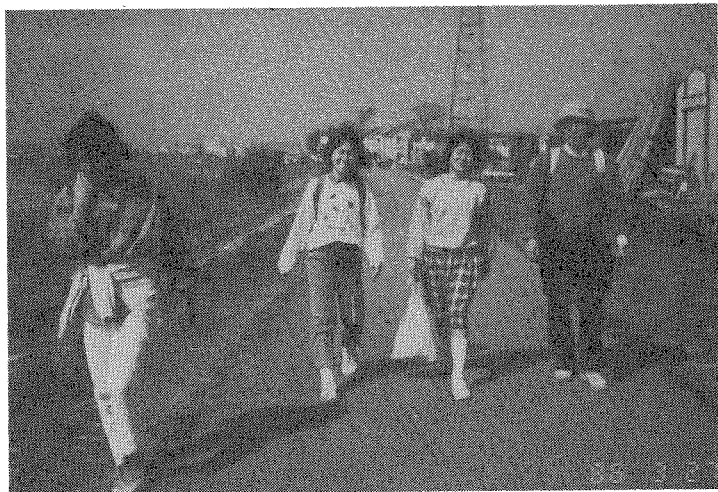
## (1) 多摩川を歩く



「卒業記念に旅行がしたいね。」  
夏の林間学校、日光で楽しい思い出をいっぱい作ってきた6年3組は、卒業の時にもう一度とばかりに、富士山に泊りがけで行く計画や箱根に泊りがけで行く計画やら立てようとしたが、両親に相談してくると、中には賛成の方もありましたが、「まだ贅沢だ」という声が多く、「日帰りを考えなさい」ということになりました。候補地を捜



し、しぼっていく中で、大山と多摩川を歩くことに決まりました。大山は、大山道も今でも残されており、狛江の人達が講を持ってお参りした所、多摩川はすぐ隣りです。それぞれ委員会が設けられて下見に行くことになりました。大山委員会は男ばかり5人のせいか仕事はやくさっそく出かけました。まず駅からバスに30分以上のり、これが満員、次に登りに登山電車に乗って神社について、登り始めたら、全員がすぐあごを出してしまい、休み休み登らざるをえなかったこと、でも下りになると大はりきりであつという間に降りてしまったので、委員会では、グループごとに登らせてアスレチックにする。自分達は午前6時からなどと大はりきりでした。ところが、こちらは父母会でつきそいの希望者なし。



(大野さんの写真)

多摩川の方は下見は私が多摩川を歩く会の12月1日に参加して歩いたのと、信田さんが一家全員で歩いてくれたのとで、なんとかやれそうだということになり、父母会でもついていってくださる方がでて、実現することになりました。

3月のおわり27日、学校へ集合して、いざ出発。

サッカーボールを拾ってけっっていくグループ、他の人に追いつかれまいと早歩きグループ、おしゃべりに花の咲いているグループなどに分れて三々五々歩いていきました。

同じような景色の続く中をただただ歩いたのです。



多摩川台公園についてお昼を食べる時には、まだ半分だなあという気分ながらも、やったという気持ちもありました。



(土屋さんの写真)

六郷土手に着いた時には、これ以上もう歩きたくない人が大部分で電車に乗ることになりました。



(土屋さんの写真)

多摩川を歩く会に参加してみると、日だまりには12月でも蝶がとんでいたり、オオバンをみせてもらったり、イナゴのハヤニエがみられたり楽しい経験をしました。二回に分けてされたところを、私たちは1日で歩き通したので、オオバンだ、カモだなんていうようなことは気にせず、もうただ歩き通しました。まだまだ多摩川もみられます。でも、大昔、人間が初めて多摩川をみた時、どんな風だったか、口をつけて水が飲めただろうし、富士山をみて、しばしうっとりしたのではないのでしょうか。

## V. 狛江郷土カルタ

## V. 狛江郷土カルタ

狛江の歴史を子供達に伝えるには、どのような方法がよいかを考え、遊びながら町の歴史に興味を持たせたいと考えていた時、群馬県では上毛かるたを県中の人で、かるた大会をおこなうほど盛んにやっているのを知り、子供達にかるたを作らせたいと思っていました。が、その機会が与えられず、昭和59年6月「郷土かるた創作講習会」を知り半年かけて「狛江郷土かるた」を作りました。かるた作りは、市の特徴（面積、人口等）、歴史文化財に関する事、施設等を学ぶことから始めるわけですから、かるたが出来上がるころには、おおまかですが町の様子をつかむことができました。

できあがったかるたで子供達は興味を持って遊んでくれましたが、もしも子供達が作ったなら、絵札一枚、読札の一枚づつにも歴史を感じたろうと思います。活動的な今の子供には、外で走りながら取る大番かるたも楽しいものになると思います。チャンスがあったらこんどは、子供と一緒に作ってみたいと思います。

# 「こまえを知ろう」

## 狛江の昔をたずねて

宮武 幸子

数年前、子供に「お母さん川も  
ないのどうして、一の橋・二の  
橋なの」と聞かれたとき子供が満  
足する答えをしてやる事ができ  
ませんでした。私の育った故郷の  
歴史について語ることができても  
この市で生まれ、育ち、ここを故  
郷とするであろう二人の子供に狛  
江の昔を話してやる事ができな  
いことに気がつき郷土史を調べは  
じめました。

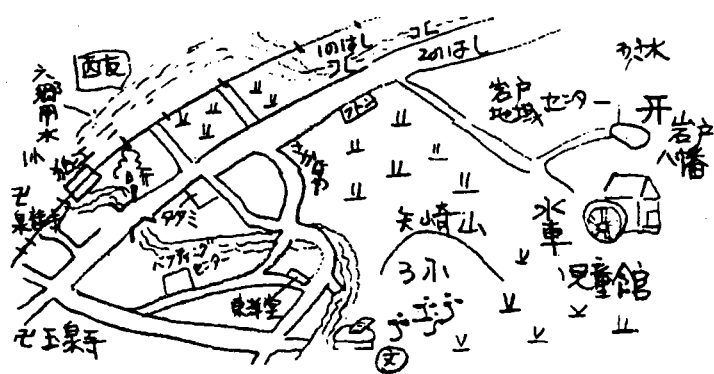
今手元にある昭和三十年の地図  
を広げて見ると、三小が建ってい  
るところは、六郷用水からの流れ  
と泉竜寺・揚辻稻荷からの水の流  
れにかこまれた水田になっていま  
す。この用水は、一つは遊歩道、  
もう一つは水道道路で寸断されな  
がらも、下水道・ところによって  
は道となつて、そのあとをとどめ  
ているところもあります。一昨年

子供とどこまで続いているか歩い  
てみましたら、まがりまがり東名  
の下まで続いてました。世田谷字  
名根の人達が水代金を支払ってい  
たのがなるほどわかります。

「百年前の子供がしじみや魚をと  
って遊んでいた所を、今の子供は  
自転車で走っているのよ。」と話  
しながら歩くのも楽しいものです。  
また二中の信号の所には洗い場  
があり野菜を洗ったりお米をとい  
だりしたそうです。児童館の横の  
洗い場はわき水があり、とてもき  
れいだったようですし、児童館裏  
手のどじょう川では水車がゴトゴ  
トまわっていたそうです。そこ  
は、水田の水の取り入れ口がまだ  
のこっています。

バッテリーセンターの裏手に  
は大山道の道しるべがあります。江  
戸時代の武士が歩いたり旅の人  
が腰をおろして休んだりしたのか  
と想像するのも、子供には歴史が  
現実的になるようです。三小のま  
わりには、一の橋の道しるべ、筏  
道、野村道と、道だけでも昔の人

々が培ってくれたものの延長線上  
に私達の生活があると感じられま  
す。年中行事・昔の遊び・昔話し  
など年々薄れて行きますが、少し  
でも多く子供達に伝えこの市に愛  
着を持つ基になつてくれればと考  
えております。



来年の正月遊びは、古里の様々な情景を織り込んだ手作りカルタで——  
 狛江市の主婦九人が、さる五月から作っていた郷土いろはカルタが間もなく完成する。読み札の歌作りから版画彫り、印刷とすべてが手作業で、十七日は、仕上げにあたる絵札の版画刷りが行われた。住民による郷土カルタ作りは各地で盛んだが、版画彫りや印刷の段階で専門業者に任ずることが多く、この主婦たちの狛江郷土カルタは、素材な味が楽しめそうだ。



主婦たちによるカルタの版画作り作業

# 主婦グループが郷土カルタ

九人の主婦たちは、同市公民館上和泉分館の郷土カルタあり、それぞれの歌の解説で創作講習会に参加した同市和泉本町二丁目生方淳子さん（六十三）から六十代のグループ。市内の民俗学研究者や古老の話を聞き、名所旧跡などを何回も訪問、題材を足で取材した。こうして先月歌を、今月に入って版木を完成させた。

歌は、いろは文字のうち「あ」と「い」を除く四十六文字分。「ろ（櫓）」の音は過ぎし和泉の渡し舟「いわが市（まじ）」の詠れる土語は和泉式「なご、いすれも市内の風物を歌ったもの。」

「い」の歌は、「昭和十八年まで渡し場がありまし

## 歌、版画彫り、印刷 全部手作り

来月の狛江市民まつりで披露

想以上に上手にできた」と試した。登戸の渡しと呼ばれ、多摩川を渡る交通機関として利用されてきました」と解説がついている。

また、「わ」の歌には、「昭和十五年に和泉本町の和泉渡船から見つかった土師器（はじき）には、出土の地名をよんで和泉式土器という型と張り切っている。

式名がつけられています」とあり、それぞれの歌の解説で、狛江の歴史や名所がすぐ分かるのが魅力になっている。

仕上げ作業の版画刷りは、十七日午後、同市中和泉の狛江八幡工室で、同小の園工担当、町田進教諭の指導で行われた。メンバーが手分けし、読み札の歌に合わせた図柄を彫ったカツラやホオの木版木に絵の具などで色を付け、プレス機で一枚一枚印刷した。

版画の多くは黒か紺色の単色だが、図柄によっては多色刷りも。出来上がった絵札は、読み札と同じ文庫本大で、主婦たちは「予

物  
か  
は  
る  
た  
御  
土

狛江市立公民館上和泉分館

昭和59年手づくりのつどい

「郷土かるた創作講習会」共同制作





石谷氏

和泉村から寺興し

地頭石谷氏

江戸時代、和泉村の一部は石谷氏の領知でした。天正十九年（一五九一）に徳川家康より知行地を与えられ、泉竜寺を整備して中興開基となり、菩提寺としました。



ろの音は

過ぎし和泉の渡し舟

登戸の渡し

多摩水道橋ができる昭和二十八年まで小田急線の鉄橋と水道橋の中間辺りに渡し場がありました。「登戸の渡し」と呼ばれ、多摩川を渡る交通機関として利用されていました。



①は

初午に

油揚げ供え  
小唄太鼓

初

午

市内には、一族や地域などで配るお福  
壽さんがあり、二月初午の日に集まって  
福祿壽を行なったり、子どもに菓子やく  
はるなどの行事が行なわれています。



②に

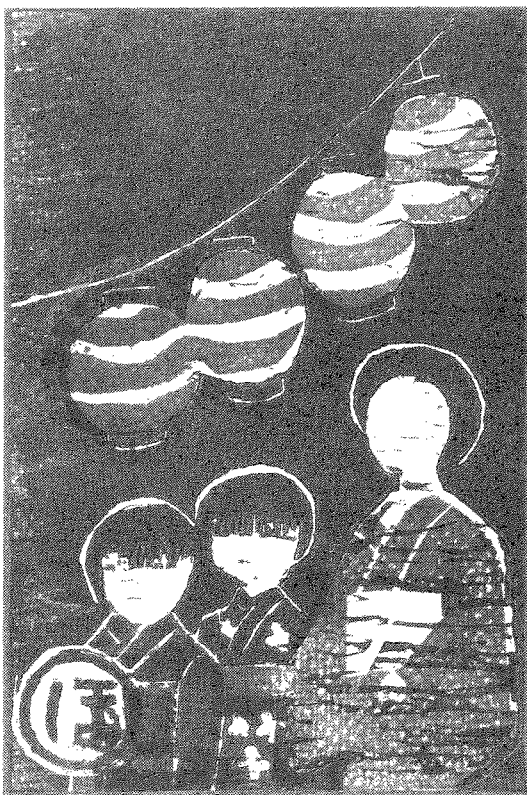
西河原

市民が集う憩いの場

西河原公園

西河原公園は、芝生の広場に噴水が設  
置され、九千本近い樹木が生茂り、市民  
の憩いの場として親しまれています。





こまえ音頭  
こまえ音頭は、昭和五十二年に狛江市の音頭として制定されました。同時に狛江市の歌「水と縁のまち」も制定されています。

①ほ

盆踊り

こまえ音頭が輪を広げ



弁財天池  
東竜寺の弁財天池は、奈良時代に良弁僧部の雨乞いにより湧き出したと伝えられ、「和泉」の地名もこの池から生まれたと考えられています。

②へ

弁財天

まつるいずみの泉鏡寺

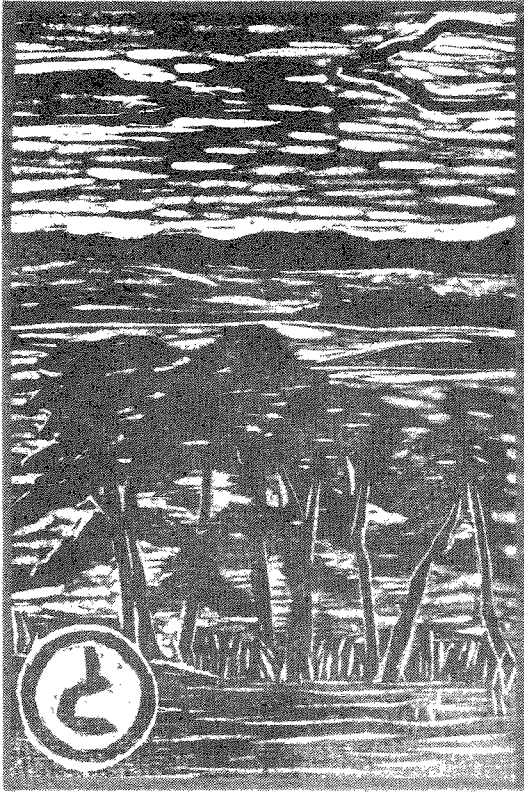
と

東京の

新百景に五本松

多摩川五本松

多摩川五本松の辺りは、明治四十三年の洪水後に作られた堤防で、自然のオアシスとして残っています。昭和五十七年に新東京百景に選ばれています。



ち

治水工事

時の流れに委ねる工事

多摩川

多摩川べりは、何度も洪水に見舞われています。昭和四十九年の多摩川堤防決壊が記憶に新しいところです。

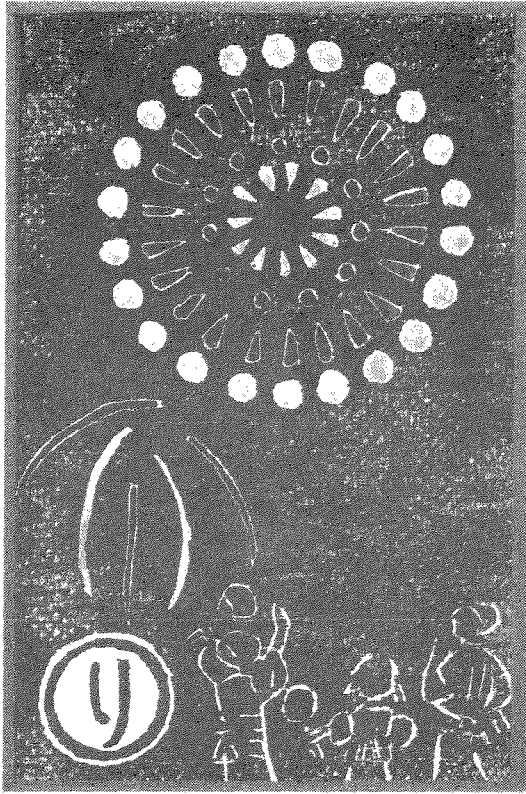


り

両岸で  
歓声あがる大花火

花火

毎年八月、和泉多摩川の河原で花火大会と灯ろう流しが行なわれ、船江の夏の風物絵として市民に親しまれています。



ぬ

布作り  
カラムシ織り 船江郷

布さらし

奈良時代以降、帯化人によって船江郷に織物の技術がもたらされ、定着したことは万葉集にも詠われており、調布などの地名からも伺い知ることができます。



る

累代の  
島で作る梨野菜

農産物

市城の耕地は、田より畑の方が多く、  
畑では愛作が行なわれていましたが、東  
京の発展に伴い、野菜や多摩川べりでは  
梨なども作られるようになりました。

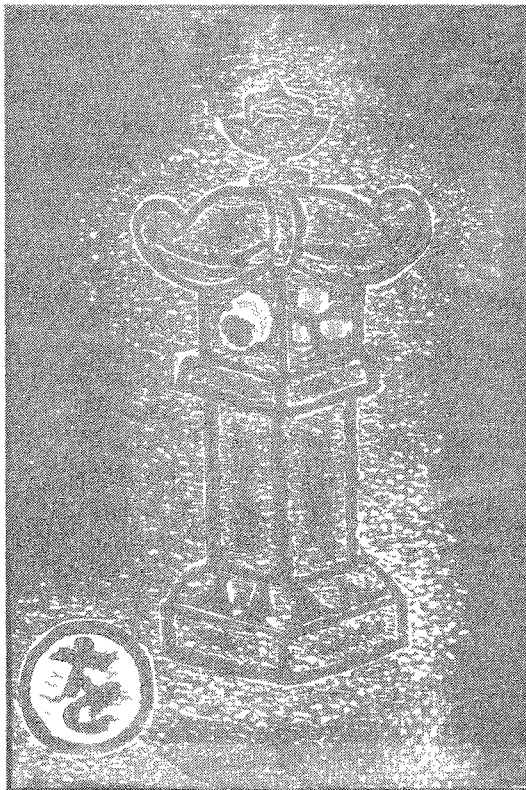


を

日枝神社  
月を待向常夜燈

日枝神社

境内に寛政十二年（一八〇〇）に巳待  
講中が建てた灯籠がありますが、芋部  
のみで火袋がありません。この他、文化十  
年（一八一三）に氏子により建てられた  
灯籠もあります。



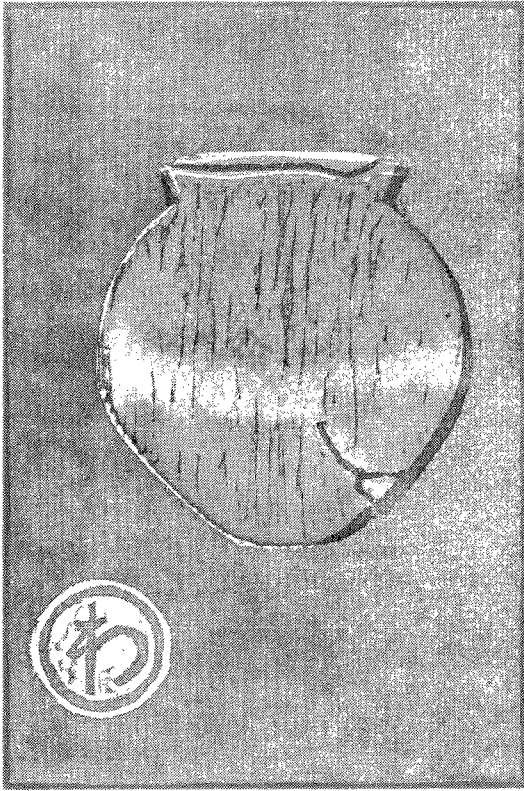
④

わが市の<sup>まち</sup>の

誇れる土器は和泉式

和泉式土器

昭和十五年に、和泉本町一の三五の和泉遺跡から見つかった土師器には、発見された所の地名をとって「和泉式土器」という種式名がつけられています。



④

か 亀塚に

高麗の由来の画像鏡

亀塚古墳

昭和二十六年の発掘調査の折、帆立貝式前方後円墳であることが判り、神人歌舞臺像鏡金銅製毛彫金具等、多数の副葬品が出土して注目されました。



よ

夜泣きの子  
守る北向き地藏尊

北向き地藏

胸井大通りに北向きに面してお地藏尊  
んがあります。子どもの夜泣きや病気を  
なおす北向き地藏尊として信仰されてい  
ます。

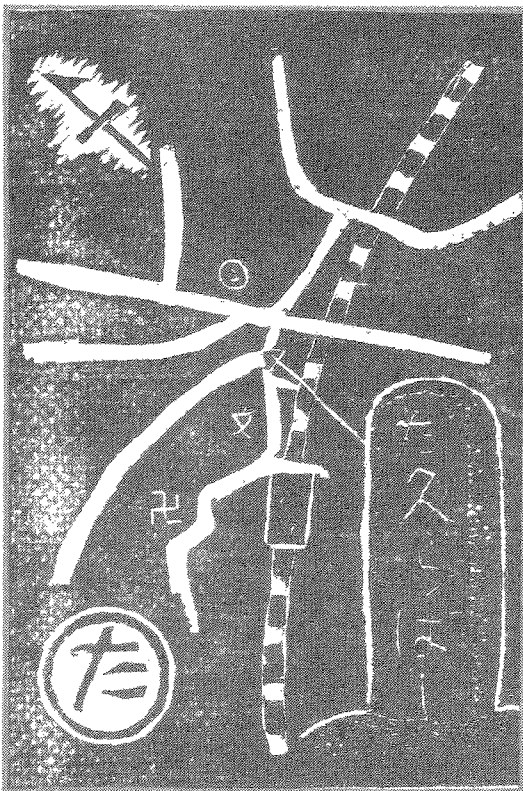


た

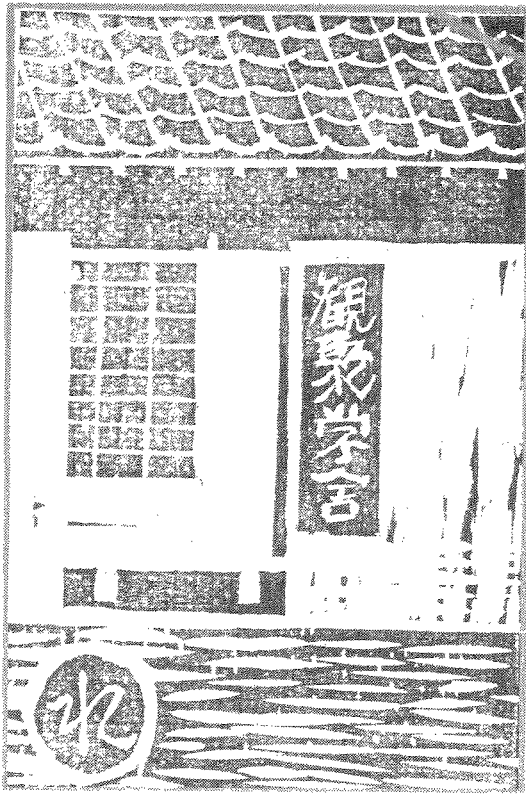
駄倉橋  
地図に残し親まれ

駄倉橋

大塚用水にかかる橋で、通称「めがね  
橋」とも呼ばれていました。現在、橋の  
欄干の一部が谷田郷精一家に残されてい  
ます。





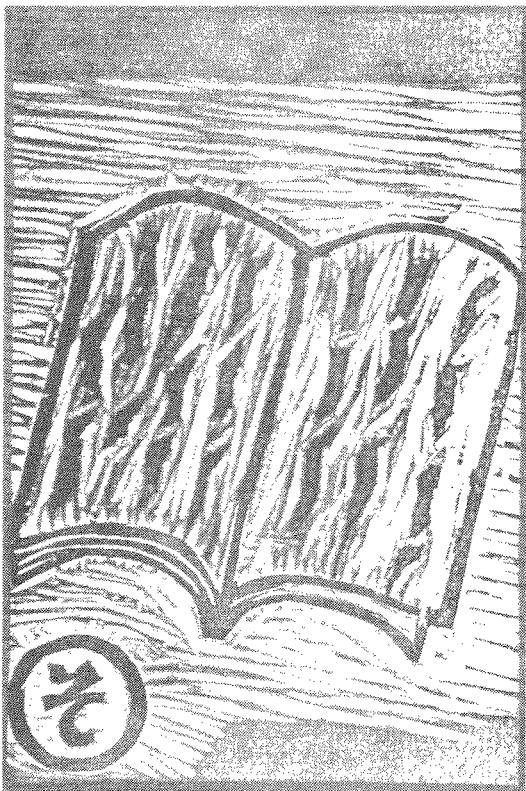


観聚学舎

明治五年の学制施行により、和江でも  
六年に泉竜寺の衆寮堂を借りて、公立の  
小学校がつくられました。

れ

移る昔代に学舎開く  
黎明は



検地帳

文政三年（一五九四）に駒井村で検地  
が実施され、検地帳が作成されたのを以  
じめとして、寛永から元禄にかけて各村  
で検地が行なわれました。

そ

村落の  
姿伝える検地帳

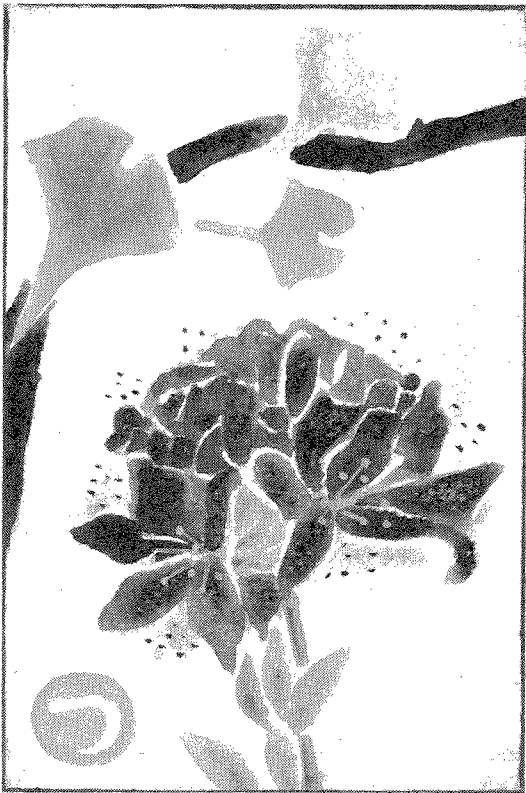


つアツ咲き

いちよらも伸びる遊歩道

市の木・花

旧野川跡と旧岩戸川跡は、緑地公園として整備され、市民の散歩コースや子どもの遊び場となっています。昭和四十八年に、つつじを市の花に、いちよらを市の木として指定。



子の権現

うなまゝを食べぬい伝え

子の権現

子の権現三島神社には、氏子はうなぎを食べてはいけないと伝えられています。それは、この神様が洪水にあつて流された時に、大きなうなぎに助けられたからだそうです。



な

# 長屋門

くぐる歴史の重みあり

長屋門

現在、市内には、西野川の高木家と元和泉の石井家に長屋門が残っています。両家とも江戸時代に名主をつとめていました。

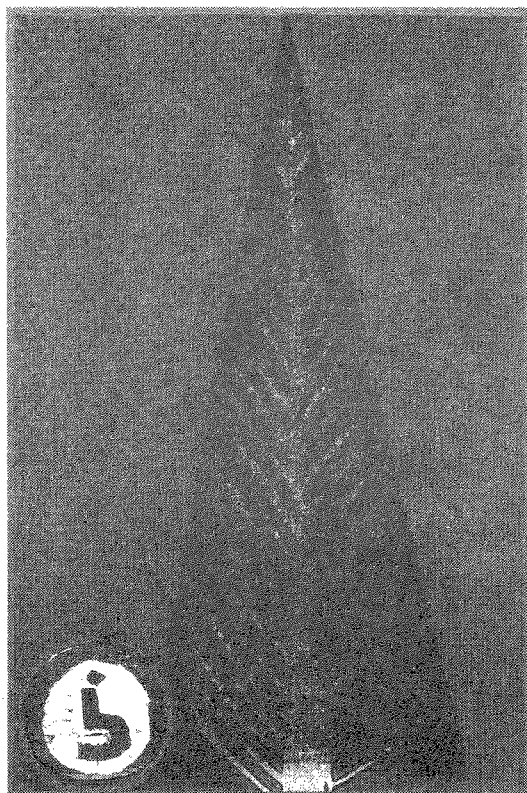


ら

# ラクウショウ 樹令々と誇り枝をほり

ラクウショウ

石井家のラクウショウは、高さ約三十二メートルで、枝張りは四方に約四メートルと樹形が整い、美観を呈しています。市の天然記念物に指定されています。



む

村人の

信仰あつき庚申塔

庚申塔

寛文二年（一六六二）を初出として、

大正時代までに二十五基の庚申塔が建立

されています。庚申の日に講中が集まっ

て、夜を眠らずに通ごす庚申講が行なわ

れていました。



う

移るまを

みてかゝる残りの水神社

水神機

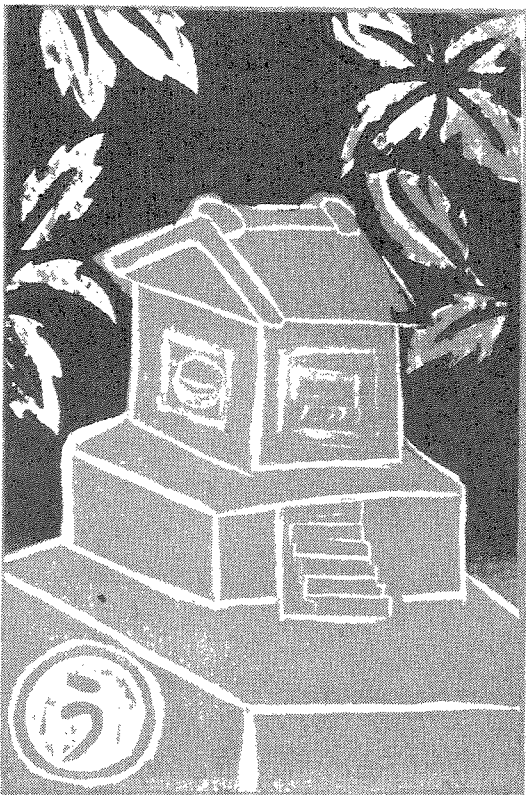
水神機は、六郷用水取水口と権助造り

にあります。多摩川の川瀬に従事してい

た務方、駒井、宿河原の人々により、水

神機をお祭りする水神講が行なわれてい

ました。



の

農業

助けられた水路は次大夫堀

次大夫堀

六郷用水は、慶長年間に小泉次大夫によつて作られた灌漑用水路で、次大夫堀とも呼ばれています。狛江で多摩川の水を取入れ、世田谷、大田の村々の水田をうるおしました。



お

小田急線

昭和二年に踏切できし

小田急線

昭和二年四月に開通して和泉多摩川駅が、六月には狛江駅が設置され、都心への交通が大変便利になり、その後の町の発展の基盤となりました。



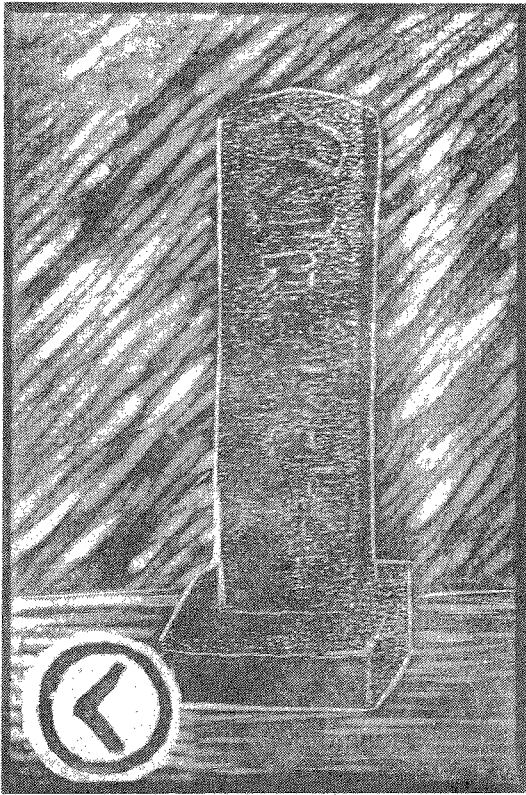
く

# 供養塔

## 一の橋から道しるべ

一の橋

一の橋は、六郷用水にかかる橋で、その跡に文政六年（一八一三）の石橋供養塔があります。この供養塔には、「西登戸府中道」などあり、道標をかねていました。



や

# 山まいり

## 御岳 大山講中連

山まいり

市内の旧大字（江戸時代の村）には、武州御嶽講、大山講（雨乞）、標名講（電除け）などの代参講が組織されていました。現在でも駒井や小足立などでは参詣に行っています。



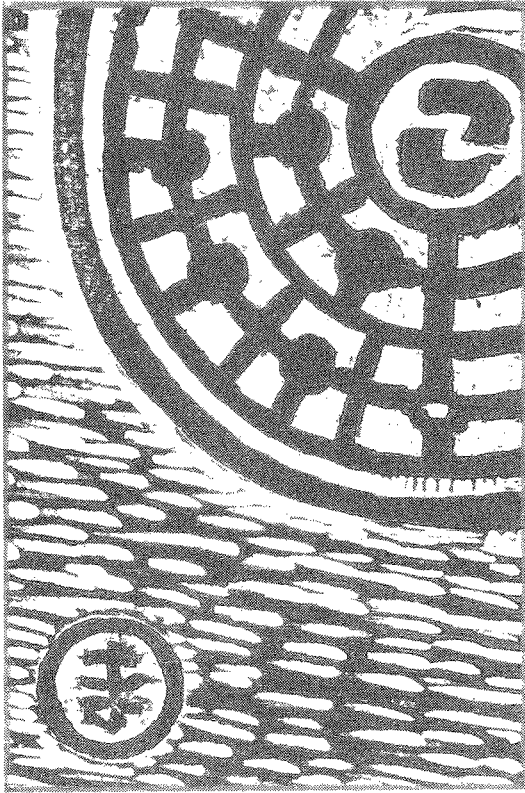
ま

マンホール

「ま」の字、「い」の字の蓋があり  
ふた

市章「こ」

「こ」は市章で、昭和四十五年に制定されました。こまの頭文字を图案化したものです。松江市の下水道は、昭和五十四年に汚水管網が一〇〇％完成しました。



け

慶山岸寺

無事に産まれを礼まいる

塩なめ地蔵

慶岸寺の境内にあるお地蔵さんは、安産祈願の地蔵として信仰されています。安産のお礼に塩をかけるので、塩なめ地蔵と呼ばれています。



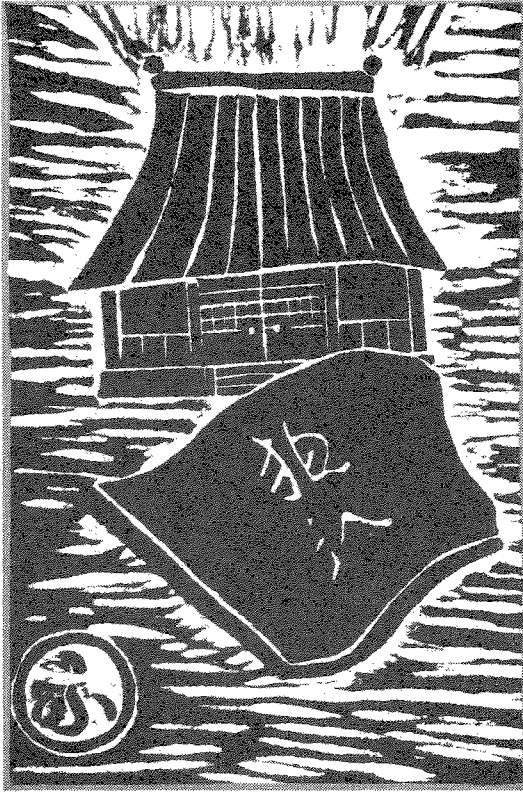
①

# 文化財

「狛」としるした文字瓦

文字瓦

狛江の地名が初めて文献に見えるのは、平安時代の初めで、「武蔵國多摩郡狛江郷」と記載されています。また、武蔵國分寺跡からは「狛」の押印のある瓦が出土しています。



②

# 狛犬

岩戸八幡氏子建て

岩戸八幡神社

神社は氏子の奉納などにより整備され、維持されています。例えば、岩戸八幡神社では文化七年に鳥居、明治十五年に手洗石、狛犬などが氏子により建立されています。





⑨

# 月住院

## 二十三夜の碑を守り

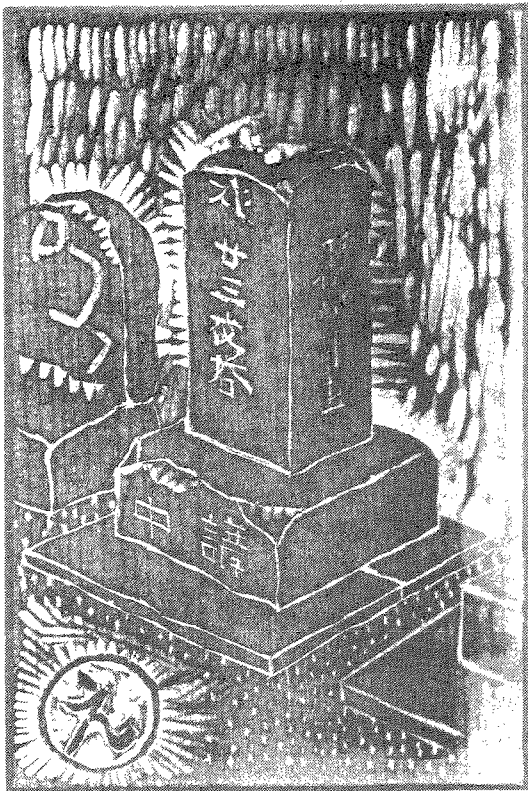
二十三夜塔

円住院の境内に天保四年（一八三三）の

二十三夜塔があります。当時、この地域で

二十三夜に講中が集まつて、月を待つ月待

行事が行なわれていたことが伺われます。



⑩

# 伝承の

## お囃子御目くら秋まつり

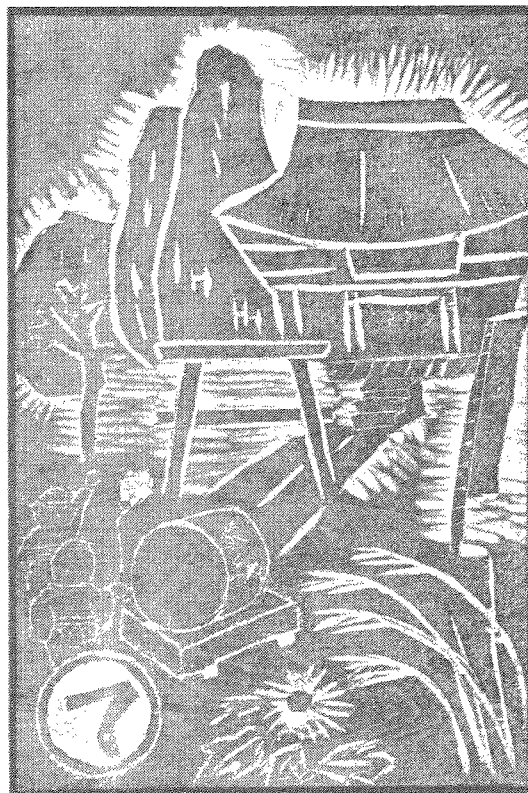
お囃子

市内の和泉、猪方、岩戸、小足立、駒井

の旧大字には囃子が受け継がれています。

目黒ばやしや神田ばやしなどの流れを汲ん

だ祭り囃子が秋祭りや盆に演奏されています。



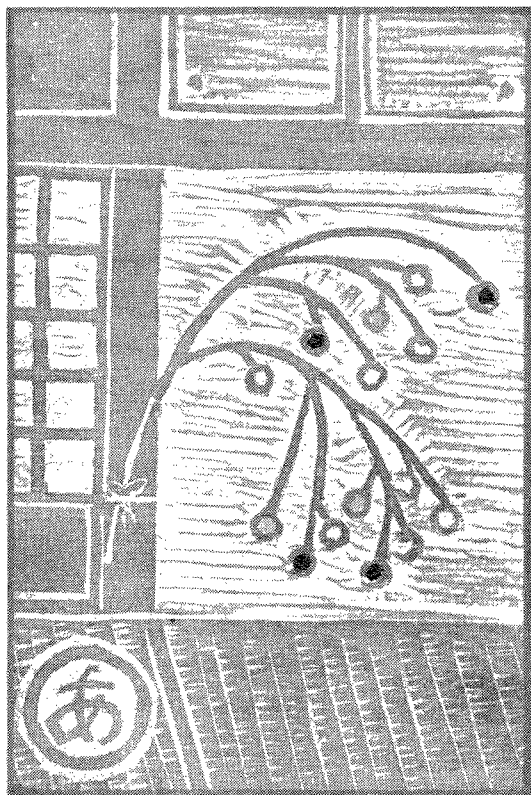
あ

赤白の

まゆ玉飾り正月

まゆ玉

昔は養蚕が盛んに行なわれており、小正月にまゆ玉を作って、柳の枝などにさして蚕の安全を祈る行事が行なわれていました。



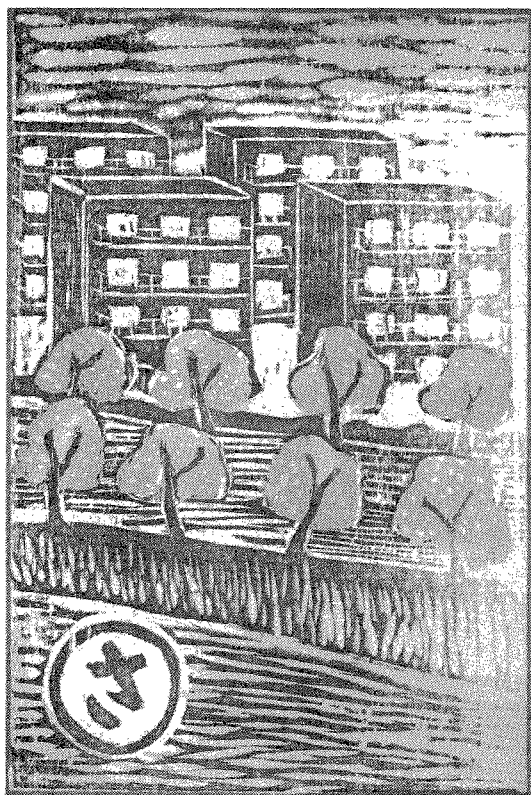
さ

桜咲く

多摩川沿ひに園のい

多摩川団地

現在、多摩川住宅が建っている所は、昔千町耕地と呼ばれ、一面の水田地帯でした。春になると土手や道路そばに桜が咲き乱れます。





# 玉泉寺

なんじやもんじやの丈高し

ボダイジュ

玉泉寺山門の廊にあるボダイジュは、高さ十二メートルの大樹で、なんじやもんじやの樹と呼ばれ、市の天然記念物に指定されています。

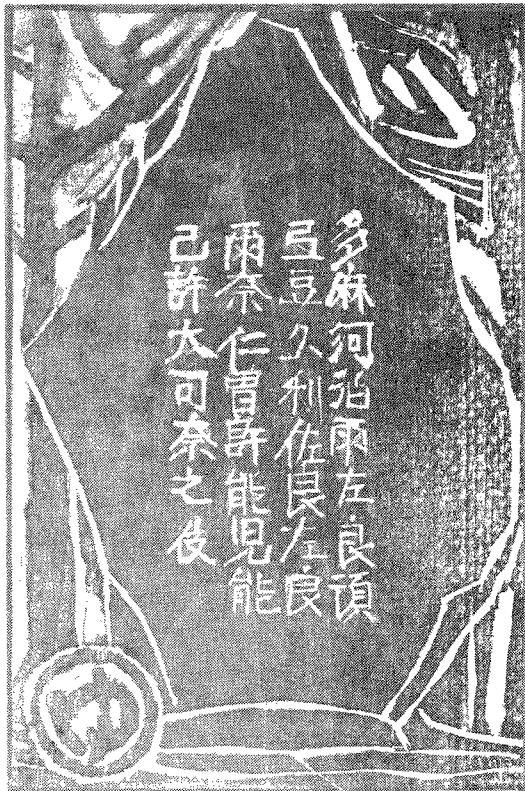


# 豊かなる

多摩の流れに万葉碑

万葉歌碑

文化二年（一八〇五）、彌方村に建立された歌碑は、多摩川の洪水で流されてしまいました。その後、大正十一年に現在の場所に移築されました。



め

る人の

手並みあがりやが籠作り

かごやさん

農家で使用する竹製品を作るかごやさんが市内にあります。かつては、ジャカゴやアユカゴ、ブタカゴなどを作っていました。



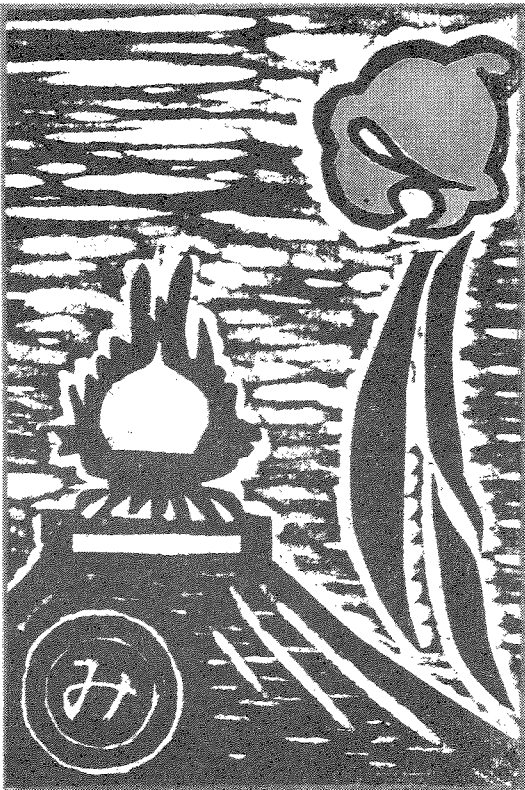
み

明静院

八幡様と隣りあい

明静院

神仏は、平安時代から江戸時代まで習合状態にあり、寺院が神社の別当として、神社の管理や祭礼などを行なっていました。明治初年に神仏分離が行なわれました。



①

出エした

埴輪か残るかぶと塚

兎塚古墳

兎塚古墳は、狛江古墳群の中で旧状をよく残している円墳で、都史跡に指定されています。首山ともいわれ、墳丘からは埴輪の破片が出土しています。



②

百塚と

言われる狛江古墳群

狛江百塚

市内には「狛江百塚」といわれるほど多数の古墳があり、狛江古墳群と呼ばれています。五世紀後半から六世紀中葉にかけて、この地域の有力な豪族により造られたものです。



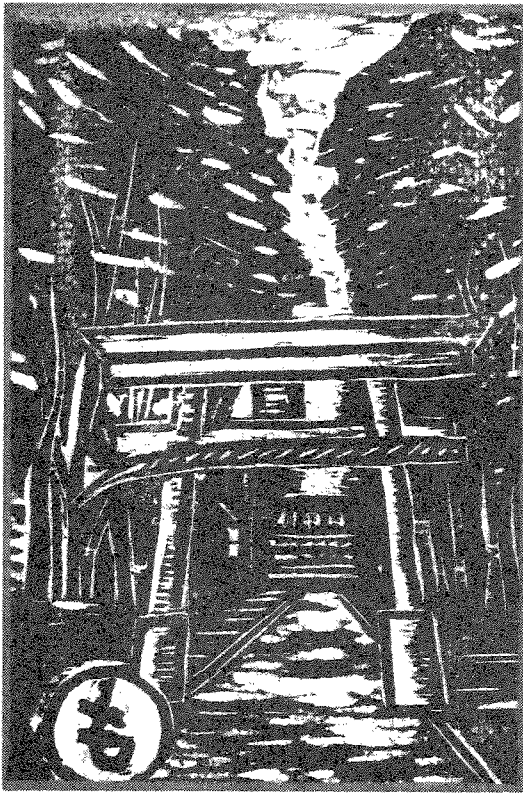
⑦

森浮

伊豆美神社の石鳥居

石鳥居

伊豆美神社の鳥居は、慶安四年（一六五二）に江戸町奉行石谷貞清により建立されたものです。市内に残る最古の石造鳥居です。



⑧

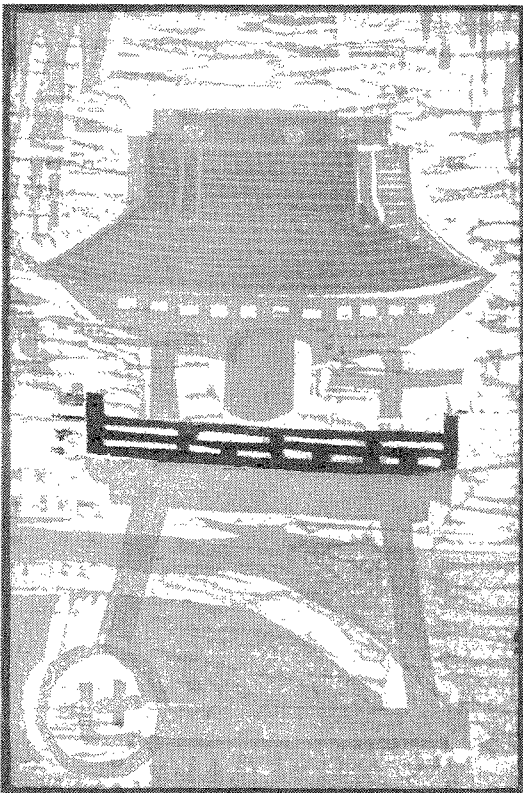
泉鏡寺

梵鐘届く百八ツ

梵

鐘

泉鏡寺の梵鐘は、最初慶安元年（一六五〇）に石谷政勝が鐘の供養のため奉納したもので、その後、天保十五年、大正十二年に再興されています。鐘樓門は天保十五年に再興。



す

住み跡の遺跡  
あらたな街づくり

住居跡

市内のあちこちに古代の人々の住居跡が  
発見されています。現在は、「水と緑の住  
宅都市」をめざして、街づくりが進められ  
ています。



ん

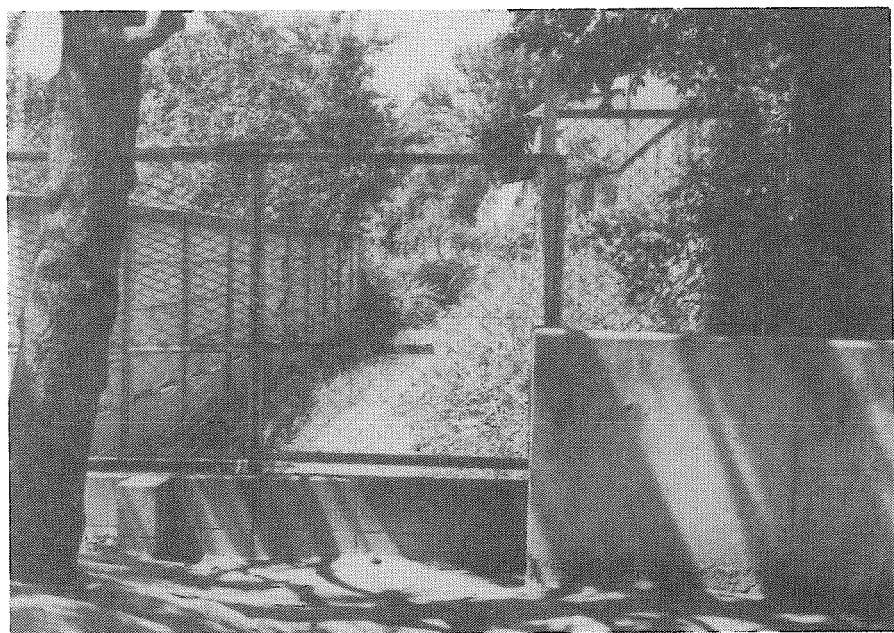
市民祭  
ふえる仲間と手を結び

市民まつり

「ふれあう心で豊かな町を」をキャッチフ  
レーズに、市民まつりが初めて開催された  
のは昭和五十二年のことです。以来、毎年  
秋に多数の市民が参加して行なわれていま  
す。



Ⅵ. あ と が き





## Ⅵ. あとがき

本調査研究は、用水を中心にして学区域の昔の様子を子供達に理解してもらうための教材作りをして、最終的には郷土を愛する人になってもらいたいという願いをこめて始めたものでした。

古地図を捜すことも、話を聞き出すことも資料を捜すことも慣れないことでしたが、月日のたつなかで身につけていきましたが、これからが本番だという気がいたします。

教材化することも、用水については、まだ実際には子供達と学んでいませんし、堅穴住居作り、石器作りなども、系統だって生産活動までを意識づける点が欠けていました。

用水が消えてゆくまでの経過にしても、何十年間という蓄積の上にあることが今回の研究で私共には理解されました。今もまだ変化は続いていて、また何十年かたたないと、気がつかないのかということも考えさせられました。

今回は、今日までに手に入った資料とこの二年間（84年～85年）に子供達とした活動を基にして、用水の消えていった過程を資料を抜萃しながらまとめました。

今後は、最近でた多摩川誌などもっと参考にし（この原稿を書き終わりかけた時に見出した。）歴史的に生産活動を用水を中心にしながら追ってみたいと考えています。

援助・御指導を深く感謝しております。

## 参 考 文 献

- |                |             |
|----------------|-------------|
| 東京むかしむかし       | 教養文庫        |
| 民俗探訪事典         | 山川出版        |
| 地名の語源          | 角川書店        |
| 町の化石しらべ        | 保育社         |
| 字源             | 角川書店        |
| 山野草カラー百科       | 主婦の友社       |
| 井戸と水道の話        | 論創社         |
| 字統             | 平凡社         |
| あの世からのことづて     | 講談社         |
| 自然と遊ぶための野外雑学読本 |             |
| 聞き書き岩手の食事      | 集文協         |
| どんぐりだんご        | 福音館         |
| 江戸の町 上・下       | 草思社         |
| 台所用具は語る        | 筑摩書房        |
| 近世調布の村々        | 調布市         |
| 地図のみた世界        | 福武書店        |
| むさしの昔々         | 河出文庫        |
| 日本の姿           | 国勢社         |
| 世田谷の歴史散歩(上)    | 世田谷区教育委員会   |
| 喜多見            | 〃           |
| せたがやの民俗        | 〃           |
| 狛江市の歴史         | 狛江第三中学校     |
| のびゆく狛江         | 狛江市教育委員会    |
| 多摩川 '76        | とうきゅう環境浄化財団 |
| 狛江市史           | 狛江市         |
| 日本史探訪1~22      | 角川文庫        |
| 授業を創る          | 授業を創る社      |
| 絵でみる日本の歴史      | 福音館書店       |
| たべもの語源辞典       | 東京堂出版       |
| 武蔵野の民話と伝説      | 有峰書店        |

多摩川のむかし話	有峰書店
調布今昔	調布市
原始人の技術にいどむ	大月書店
歴史の見方考え方	仮説社
多摩川物語	日本随筆家協会
多摩川誌	河川環境管理財団
住宅地図	ゼンリン
滅びゆく武蔵野 1～3	有峰書店

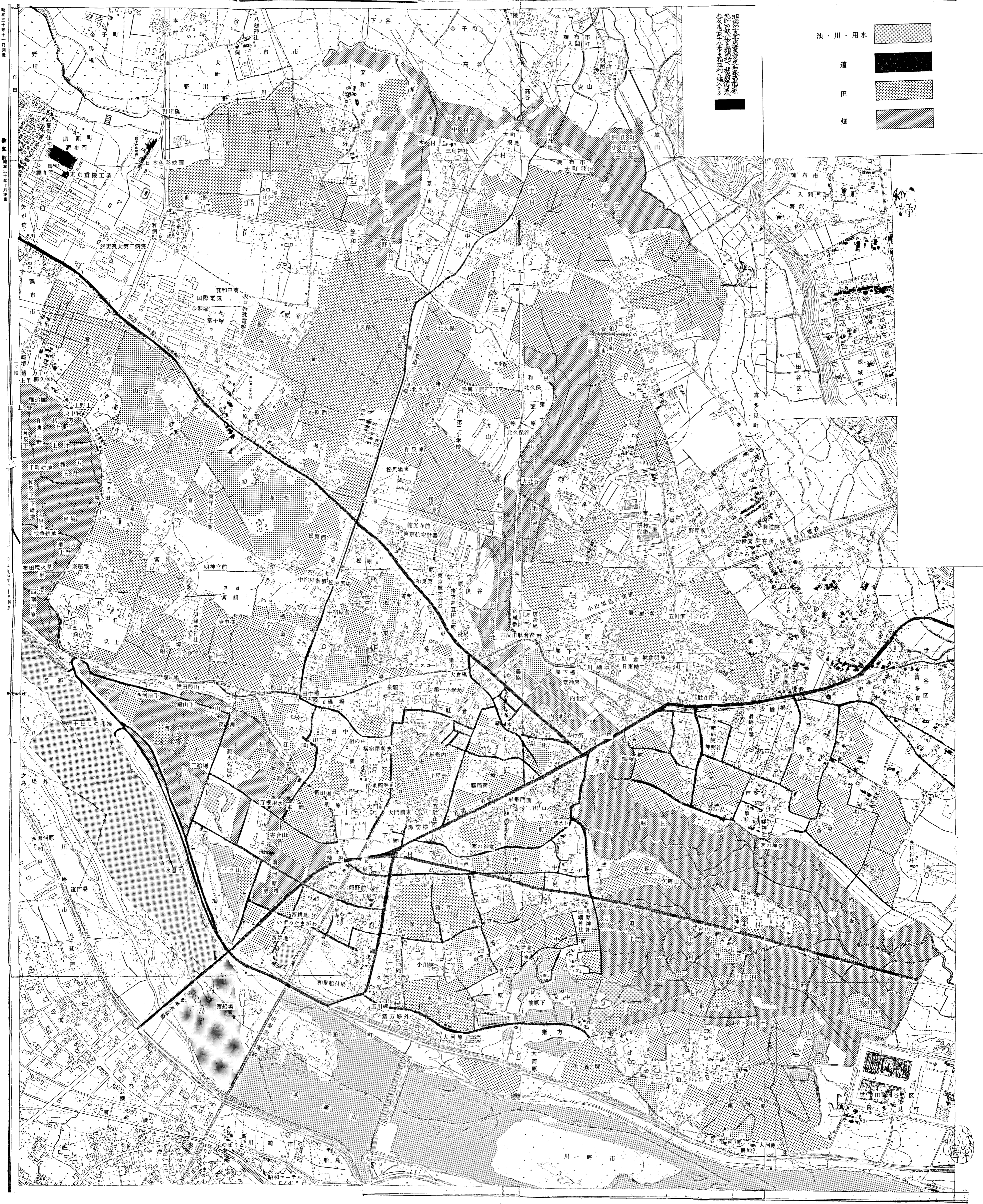
#### お話をうかがった主だった方々

- 岩戸南の秋元重光さん（明治33年生）
- 駒井の秋元清平さん（明治38年生）
- 猪方の清水さん（大正4年生）
- 東和泉の絹山さん
- 岩戸北の西山さん
- 岩戸南の西山さん
- 岩戸南の小川キミさん（明治36年生）
- 猪方の小川ゆりさん（大正13年生）
- 猪方の栗原さん
- 喜多見の浦野さん
- 猪方の石黒トミさん（明治39年生）
- 元和泉石井干城さん（昭和62年7月で78歳）

かるたは、狛江市立公民館上和泉分館昭和59年手づくりのつどい、「郷土かるた創作講習会」

共同制作のものです。

写真撮影は、竪穴住居と布芝居に関しては、ミゾエ企画によります。



昭和三十年十月測量分  
 測量士 石井千城  
 測量士 佐藤 隆  
 測量士 佐藤 隆  
 測量士 佐藤 隆

- 池・川・用水
- 道
- 田
- 畑